

紀伊風土記の丘研究紀要

第 10 号

- 成立期の陶器窯について—仁徳陵出土の須恵器大甕に関連して— 中村 浩・・・1
- 紀伊国伊都郡の南海道駅路 大岡康之・・・9
- 井辺八幡山古墳の太鼓形埴輪について 井辺八幡山古墳検討会・・・19
- 紀伊の船形埴輪—鳴神団地古墳の出土品— 河内一浩・・・25
- 岩橋千塚古墳群から出土した耳環の蛍光 X 線分析について 金澤 舞・・・28
- 天王塚古墳横穴式石室出土の雲母片について 瀬谷今日子・・・34
- 宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』—大谷山地区編—
石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加・・・36
- 安原朝日出土の埴輪について—山口コレクションから資料紹介— 河内一浩・・・56
- 熱田神宮所蔵獅噛太刀出土古墳について—伝紀伊出土の信憑性— 河内一浩・・・60
- 雑賀崎の漁業史（1）—一本釣り漁師への聞き取り調査から— 池田佳祐・萩野谷正宏・・・63
- 【資料紹介】柳川コレクション資料目録（3）—陶磁器類を中心に— 蘇理剛志・・・67
- 紀伊風土記の丘松下記念資料館の建築をめぐって
—理念と意匠、その誕生の秘密— 田中元浩・・・71
- 子供たちが提案する体験学習の可能性
—西和佐小学校「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」の取り組み— 萩野谷正宏・竹内宥介・・・79
- 和歌山県立紀伊風土記の丘のアゲハチョウ類について 松下 太・・・85
- 村上海賊見聞録 富加見泰彦・・・87

執筆者一覧

中 村 浩（浩道）	和歌山県立紀伊風土記の丘 館長	考古学
萩野谷 正宏	和歌山県立紀伊風土記の丘 主任学芸員	考古学
蘇 理 剛 志	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	民俗学
田 中 元 浩	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
金 澤 舞	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学
松 下 太	和歌山県立紀伊風土記の丘 会計年度任用職員	植物学
仲 原 知 之	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主任	考古学
瀬谷 今日子	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主査	考古学
石 丸 彩	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 技師	考古学
富 永 里 菜	和歌山市文化振興課 学芸員	考古学
中 西 瑠 花	有田市教育委員会 学芸員	考古学
馬 場 彩 加	田辺市教育委員会 学芸員	考古学
大 岡 康 之	元橋本市郷土資料館 館長	考古学
河 内 一 浩	羽曳野市立陵南の森総合センター 主幹	考古学
富加見 泰彦	元和歌山県立紀伊風土記の丘職員	考古学
池 田 佳 祐	漁師・Fisherman's Table & Stay 新七屋代表	漁業史
竹 内 宥 介	和歌山市立西和佐小学校 教諭	

井辺八幡山古墳検討会

佐藤純一（白浜町教育委員会）、松田 度（大淀町教育委員会）

清水邦彦（茨木市立文化財資料館）、辻川哲朗（（公財）滋賀県文化財保護協会）

花熊祐基（龍谷大学大学院）、金澤 舞（和歌山県立紀伊風土記の丘）

成立期の陶邑窯について

—仁徳陵出土の須恵器大甕に関連して—

中村 浩（浩道）

はじめに

陶邑とは、大阪府堺市南郊の東西約 15 km、南北約 9 km、東は大阪狭山市から堺市、和泉市、岸和田市にかけての範囲の泉北丘陵に広がって分布していたわが国最古最大の須恵器の窯跡群である。

その成立は、5 世紀前半頃に半島から渡来した技術者によって開始されたとされており、とくに仁徳天皇陵を中心とする大仙古墳群の被葬者群との関連は濃いとされている。

本稿では、仁徳陵出土の須恵器大甕に注目して、成立期の陶邑窯について考察を加えようとするものである。

1. 仁徳陵出土の須恵器大甕の検出状況について

仁徳天皇陵は、報告文によると「全長約 468m、後円部径約 248m、くびれ部の両側には造り出しが存在する。…(中略)…。」とあり、以下の調査が宮内庁書陵部陵墓調査室によって実施された。すなわちその内容は以下のごとくである。

「今回の調査の目的は前方部・後円部・くびれ部の段築等の現況を把握することとし、調査箇所については第 1 図に示した。調査は平成 7 年 3 月 13 日から 19 日に基準点の打設と前方部の調査、平成 9 年 3 月 7 日から 13 日に後円部の調査、平成 10 年 3 月 24 日から 30 日にくびれ部の調査と、前方部の補足調査の 3 回に分けて実施した。……(略)」

とあり、つぎにくびれ部の状況については、「3、くびれ部観察所見」で記述されている。すなわち、

「くびれ部には、東西それぞれに造出が取り付けられている。全体図を見るとわかる通り、現状では築造当初の段築は認められない状況にあり、前方部の鞍部の等高線が乱れていることから、墳丘部に向かって、崩落した墳丘盛土が堆積したものと考えられる。よって、くびれ部周辺には、現状で築造当初の段築を良好に観察できる個所はない。

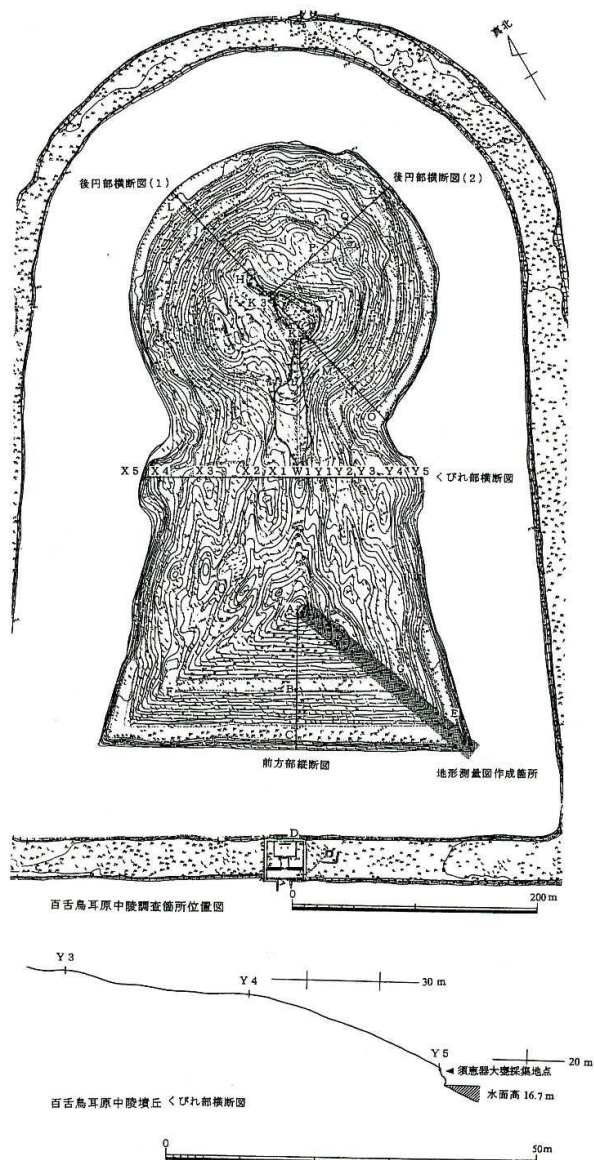


図1 百舌鳥耳原中陵 墳丘平面図、断面図
(徳田誠志・清喜裕二 2001 「仁徳天皇耳原中陵墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』52号より転載)

くびれ部では、墳丘の崩落状況と東西に取り付いている造出を断面図に表わすことを目的とした。断面図作成の結果、W1点の尾根を境に東斜面・西斜面とも、等高線の乱れからもよみとれたとおり、古墳本来の段築が認

められるような状況ではない。築造当初の墳丘面は、現状では明らかにできなかった。……（略）。

東斜面 現地を踏査するとかなりの起伏であるが、断面図を見る限りでは、全体に細かい起伏が連続しながら緩やかに下がっているような状況である。……（略）。

なお、墳端部は現状で崖状を呈しているが、この崖面の標高 18.2m の地点で、後述の須恵器大甕を採集した。後円部第 1 段テラス面のレベルが標高約 20m であり、比高差は約 1, 8m である。須恵器の採集レベルが本来の造出上面かどうかは明らかにできないので、造出上面が前方部第 1 段テラス面と同じだったかあるいは第 1 段斜面にとりついていたのかは不明と言わざるを得ないが、いずれにしても採集した須恵器は、本来は造出上に置かれていた可能性が高いと思われる。」とある。

2. 仁徳陵出土の須恵器大甕について

須恵器大甕は平成 10 年 3 月（第 3 次調査）、くびれ部横断面作成中に、現状で高さ約 2.2m の崖状になった東側造出の濠際（標高 18.2m）付近）に露出していたものである。幸い回収した破片は口縁部から底部まで接合するものであり、口縁部は 3 分の 2、体部は 3 分の 1 程度残っていた。よってほぼ全形を知り得る資料である。実測にあたっては、できうる限り残存する形状を生かし足りない部分を反転復元とした。」とあり、さらに大甕の実測図作成に伴う観察所見は、微に入り細に入りの状況が見られる。詳細は以下のごとくである。

「色調は暗灰色で、自然釉がごく薄く付着した範囲は光沢を持つ。胎土は精良である。

器高約 62 cm、胴部復元最大径約 62 cm を測る。口縁部は径約 36 cm を測り、緩やかに外反する。端部は比較的丸く仕上げられ、端部直下に 1 条の突帯が巡り、その下方約 1 cm のところにもう 1 条突帯が巡る。下方の突帯の直下には、太めの工具を用いてやや振幅の緩やかな粗い波状文を巡らせている。調整は内外面とも指ナデであるが、外面にはナデ以前の口縁部への縦方向の叩き目が一部に残っている。口頸部の指ナデは、その痕跡がやや波打っており、緩やかな回転を利用して施されたと思われる。また、頸基部の剥離面には平行叩きの圧痕が残

っており、このことから体部とは別に成形され、ある程度体部が乾燥した後接合されたと考えられる。そのため、頸基部の内外面には補強粘土が貼られている。体部は、肩部がやや張っており、胴部から底部にかけては焼き歪みのためか、やや内側に窪んだ箇所が見受けられる。外面調整は平行叩きである。頸基部から胴部までは多少左右にぶれるものの、上から見た場合、ほぼ放射状に叩き目が残る。

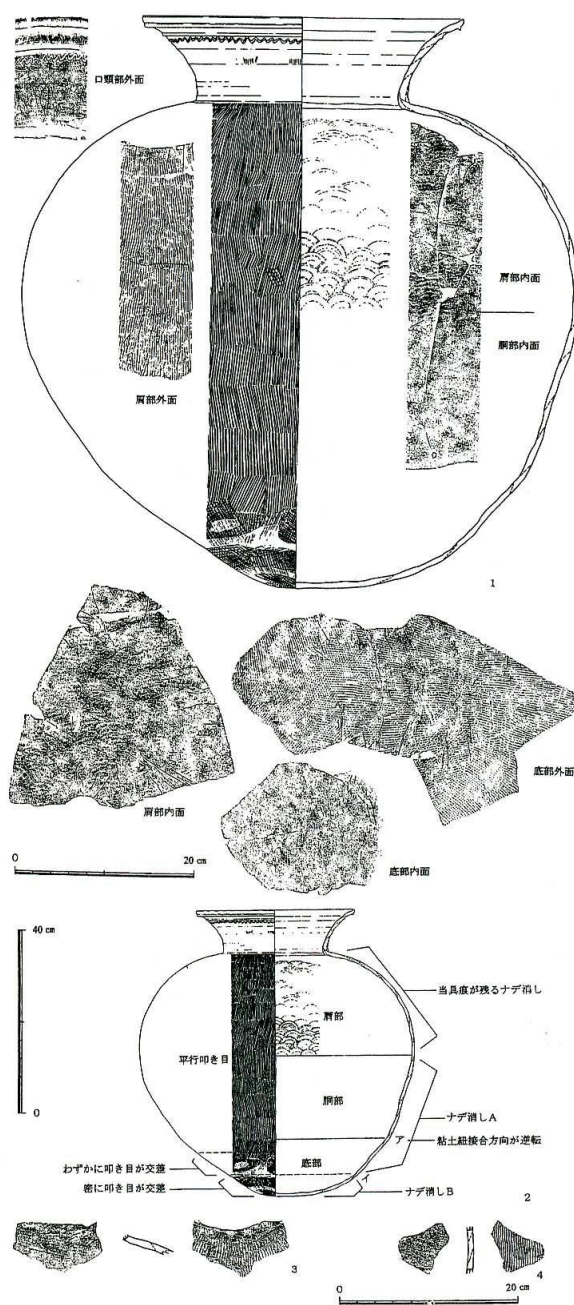


図2 百舌鳥耳原中陵 くびれ部出土須恵器大甕実測図
（徳田誠志・清喜裕二 2001 「仁徳天皇耳原中陵墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』52号より転載）

底部は叩き目が交差する。胴部と底部の叩きの先後関係は底部が後である。底部に関しては叩きの後、底部を一周するように、擦るような指ナデの痕跡が認められるが、調整を意図したものかどうかは不明である。内面調整は、たたきの後の同心円当て具痕をナデ消したものである。なお、このナデ消しには異なる3つの痕跡が認められる。まず底部界に相当する範囲にはかすかながら、革か布のようなものを介在させたようなナデ消し(ナデ消しB)の痕跡が残る。胴部と底部上位に相当する範囲は逆に何も介在させない。指による通有のナデ消し(ナデ消しA)と考えられる。胴部上位から肩に相当する範囲では通有のナデ消しではあるものの、ナデ消しが不十分でかすかに当て具痕が残っている。

底部に関しては、外面の叩き目が交差する範囲とナデ消しAは対応しており、これまでの研究で明らかのように、これらのナデ消しの違いは体部の成形段階を著していると考えられる。よって本個体は3回に分けて体部を成形していったものと判断できる。

また本個体では破片の断面で、粘土紐の接合痕が比較的明瞭に観察できた。胴部以上では外傾する通有の接合痕が認められたが、底部に相当する部分ではその方向が逆転していた。倒立させて成形したと考えられるが、閉塞に伴う絞りの痕跡や底部の突出は認められない。しかし、底部基底面の破片は楕円形を呈しており、これが製作技術を反映すると考えた場合、底部を倒立して成形し、粘土板で閉塞した可能性が考えられている。…(略)。

2個体分の破片が採集されたことから、造出上には複数個体の甕が置かれていたことが想定されよう。」とし、当該部分に複数の甕が配置されていた可能性を知ることが出来る。さらに「まとめ」で「須恵器大甕は墳丘築造時あるいはそれほど時間差のない時期の所産とかがえられる。」とされ、「ON46~TK208期に相当しよう。」と結論されている。

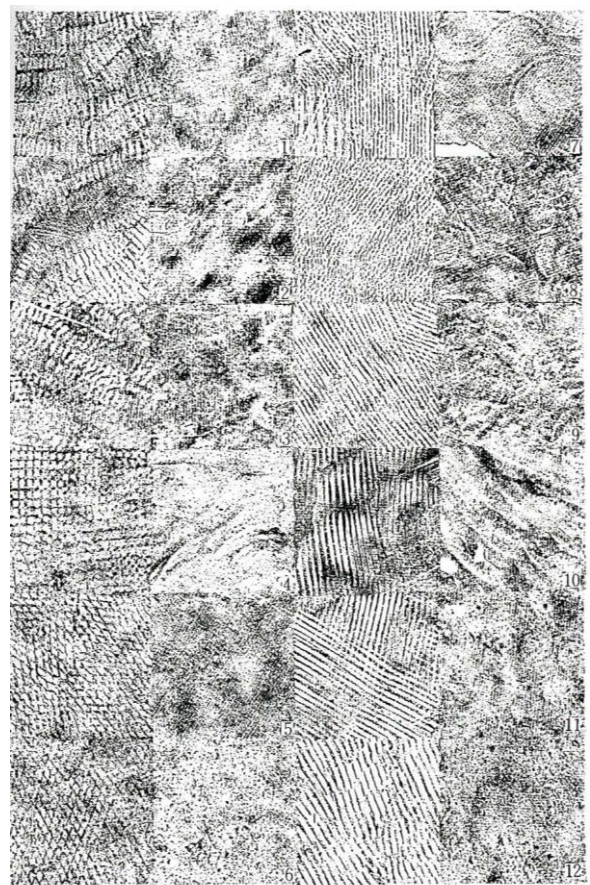
3. 大甕を焼いた窯跡

ところでこの大甕を焼成した可能性のある窯跡を陶邑窯跡群から特定あるいは見出すのは至難である。とはいえ現状では、甕の内外面に残された叩きの痕跡から窯の特定が可能かどうかということに尽きる。

时期的には仁徳陵構築終了段階に相当すると考え

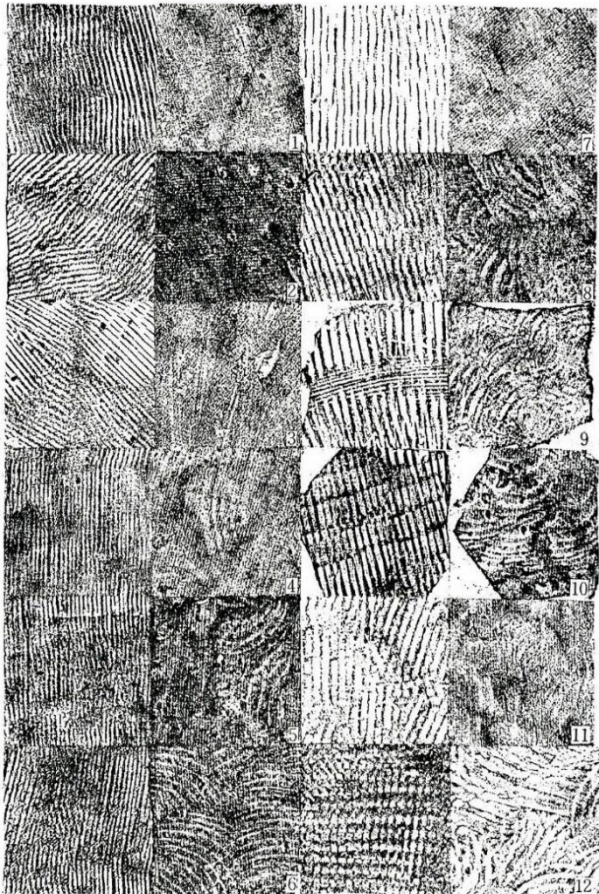
られ、所謂初期段階に相当するが最古段階ではない時期のものということになる。とくに口縁部の段面の特徴から、1型式1段階相当のものではなく、2段階ないし3段階相当の例に近いということになる。さらに推定可能な判断材料としては甕の内外面に残された叩きの痕跡がある。ところで甕に残された内外面の叩きについてみると、1型式1段階後半から2段階相当の甕の叩きを見ると、1段階後期のものでは外面には平行叩きの他に格子叩きが伴っており、内面は大半がナデスリ消しによるものであり、円弧叩き、同心円叩きが残されているものは見られない。すなわち平行叩きと内面同心円叩き、円弧叩きスリ消しナデ調整の組み合わせは、明らかに1型式2段階以降に見られる特徴であることがわかる。

そこで当該時期に相当する窯跡出土例から内外面に施された叩き目、調整例を抽出してみると、以下のごとくとなる。



1~3 格子様叩き(外面)スリケシ(内面) 9. 10 細い平行叩き(外面)半スリケシ(内面)
4 格子様叩き(外面)半スリケシ(内面) 11 細い平行叩き(外面)スリケシ(内面)
5. 6 斜格子様叩き(外面)スリケシ(内面) 12 平行叩き(外面)スリケシ(内面)
7. 8 縄文叩き(外面)半スリケシ(内面)

図3 甕内外面に見る文様拓影(TK85号窯出土)
(中村浩編 1978 『陶邑Ⅲ』、大阪府文化財調査報告書 第30輯 大阪府教育委員会より転載 以下同じ)

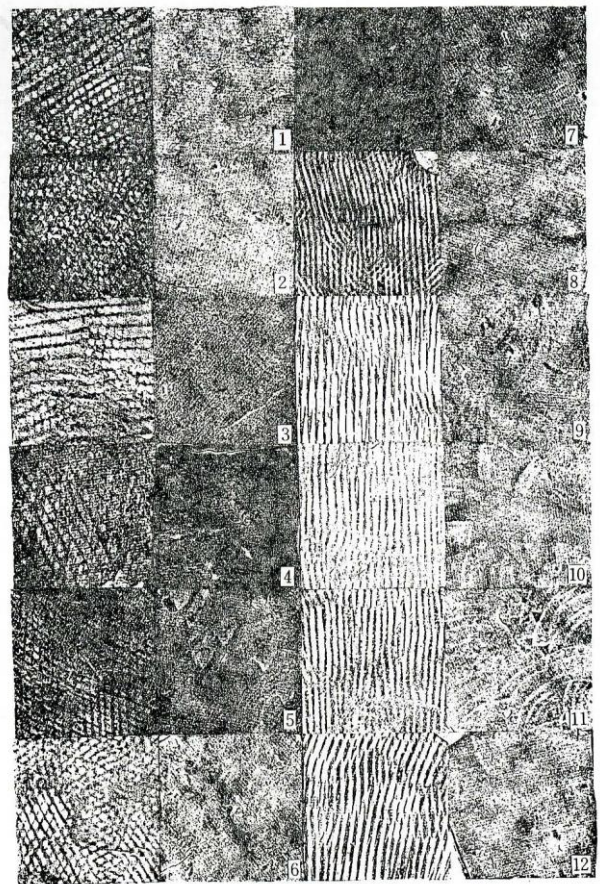


1～3 細い平行叩き(外面)スリケシ(内面) 8. 9 平行叩き(外面)半スリケシ(内面)
4～6 細い平行叩き(外面)半スリケシ(内面) 10. 11 格子様叩き(外面)半スリケシ(内面)
7 平行叩き(外面)スリケシ(内面) 12 格子様叩き(外面)円弧叩き(内面)

図4 甕内外面に見る文様拓影(TK73号窯出土)

すなわち、TK85,TK87,TK306,TK103,TK73、TK305号窯出土例があげられる。これらの出土資料のうち外面叩きと内面の調整痕跡から、近似するものはTK87、305、306号窯例がある、しかしTK87、306号例では内面のスリ消し前の叩き目文様が微妙に異なっており、最も近似するのはTK305号出土例となる。

これらはいずれもTK地区の北端部域に分布する窯跡であり、同一グループによる経営も十分考慮しなければならないだろう。とすると同一グループ内での工具の共有も十分あり、そこに共通共有関係も生じて当然かもしれない。ちなみに生産工具についてみれば、長期間にわたっての使用が可能であり、文様が近似するものがいくつかの段階にわたって使用されることは考えねばならない。しかし内外面の叩き目文様、あるいは調整手法は時期的な段階変化があり、それが一つ重要な目安となるだろう。



1～4 格子様叩き(外面)スリケシ(内面) 8 細い平行叩き(外面)スリケシ(内面)
5～6 斜格子様叩き(外面)スリケシ(内面) 9. 12 平行叩き(外面)スリケシ(内面)
7 平行叩き(外面)スリケシ(内面) 10. 11 平行叩き(外面)半スリケシ(内面)

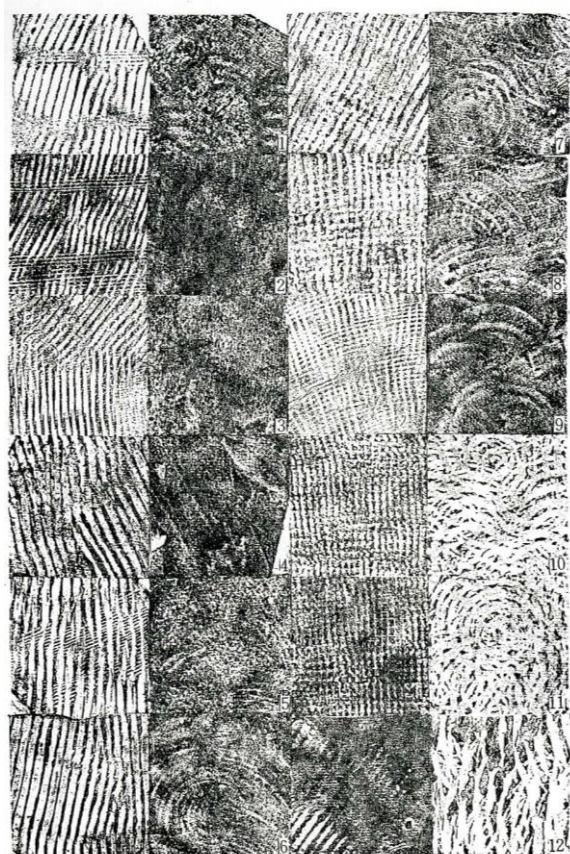
図5 甕内外面に見る文様拓影(TK87号窯出土)

以上の諸点の比較検討から、当該大甕の産地はTK305号窯出土品である可能性が濃いことを指摘しておきたいと思う。

4. 初期段階の陶邑窯

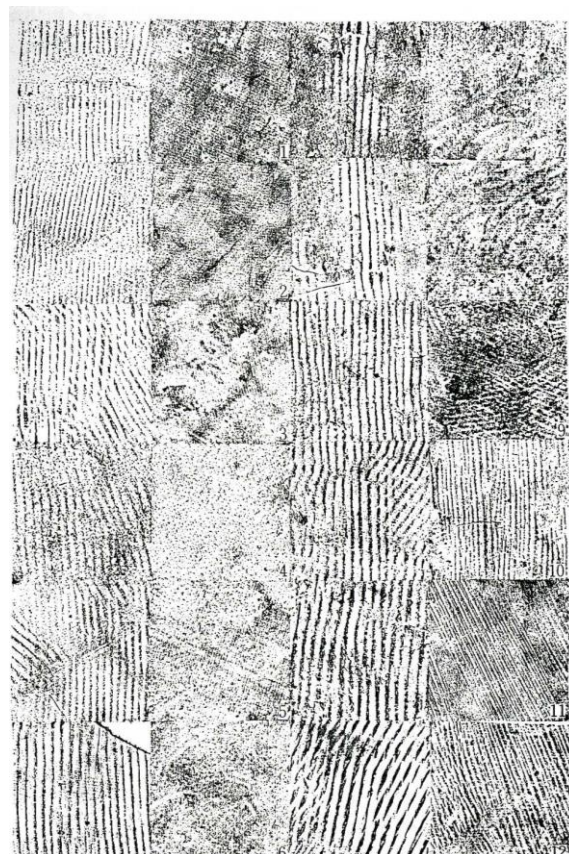
陶邑窯の成立すなわち最初に焼かれたのはいつ頃になるのかは、今後の重要な課題であるが、この段階の生産の様相について記述しておきたい。

従来、TK73号窯が最古段階にさかのぼるとされていたが、その後新たな窯が確認され、現状では必ずしも最古段階とは考えられなくなっている。少なくとも1型式1段階は前後に二分して考えるべきであるという見解に至った。この時期は朝鮮半島から生産技術者が渡来し、各所で生産を開始した時期に該当する。初期須恵器生産の場合は主として貯蔵容器に集中して生産される傾向があることは、以後の陶邑窯の実態などから明らかであるが、当該例もそ



1～4 平行叩き(外面)スリケシ(内面)
5～9 平行叩き(外面)半スリケシ(内面)
10～12 平行叩き(外面)同心円、円弧叩き(内面)

図6 甕内外面に見る文様拓影(TK305号窯出土)



1. 2 細い平行叩き(外面)スリケシ(内面) 6～8 平行叩き(外面)半スリケシ(内面)
3～5 平行叩き(外面)スリケシ(内面) 9～12 平行叩き(外面)カキ目(内面)

図7 甕内外面に見る文様拓影(TK306号窯出土)

の例外ではない。

ちなみにⅠ型式1段階は、我が国に須恵器の制作手法が伝播してからあまり時日を経っていない段階のものと規定している。とくにその生産が一元的に掌握されていたかどうかは明らかではないが、一定の規格に基づく製作ではないと考えられ、形も手法もそれぞれの窯によって異なるという特徴を持つ。

ところで蓋坯という器種については、まず1段階の前半においては後に見るような主たる生産機種とはなっていないが、やがてこの段階の後半以降には主要な生産機種となっている。この状況は陶邑で最古段階と考えられるTG231・232号窯出土遺物についてみれば明らかなように、この段階では蓋坯の出土例は殆どないといってもよいほどである。一方当初から確認されている器種に高坯があり、これらはその技術なり製品なりを輸出した側での傾向に準ずるものとして理解される。さらにTG231・232号窯

跡の報告にもあるように生産開始段階で最も重要視された器種は保水性に富む大小の貯蔵容器であったことは、その導入の経過から見ても当然であった。またTG232号窯よりも後出のTK73号窯やTK85号窯跡出土遺物では、大小の貯蔵容器ばかりでなく、器台や高坯についても器形の簡略化、器形の統一化などが顕著になっている。

ともあれTG232号出土遺物とTK73号窯出土遺物の間には形状で見ると大きな隔たりがあるように見える。しかしその隔たりは後の段階に相当するほど時間的な隔たりではなく、急激な変化と観るのが妥当と考えられる。またTK73号窯出土遺物について詳細に見れば同じ段階にすべてのものが含まれるのではなく、1から3段階までに時期のものを含んでいる。それをTK73A・B・CとするとTG231・232号窯に続くものはTK73Aである。両者の間には記述の指摘を待つまでもなく明らかな形態差が確

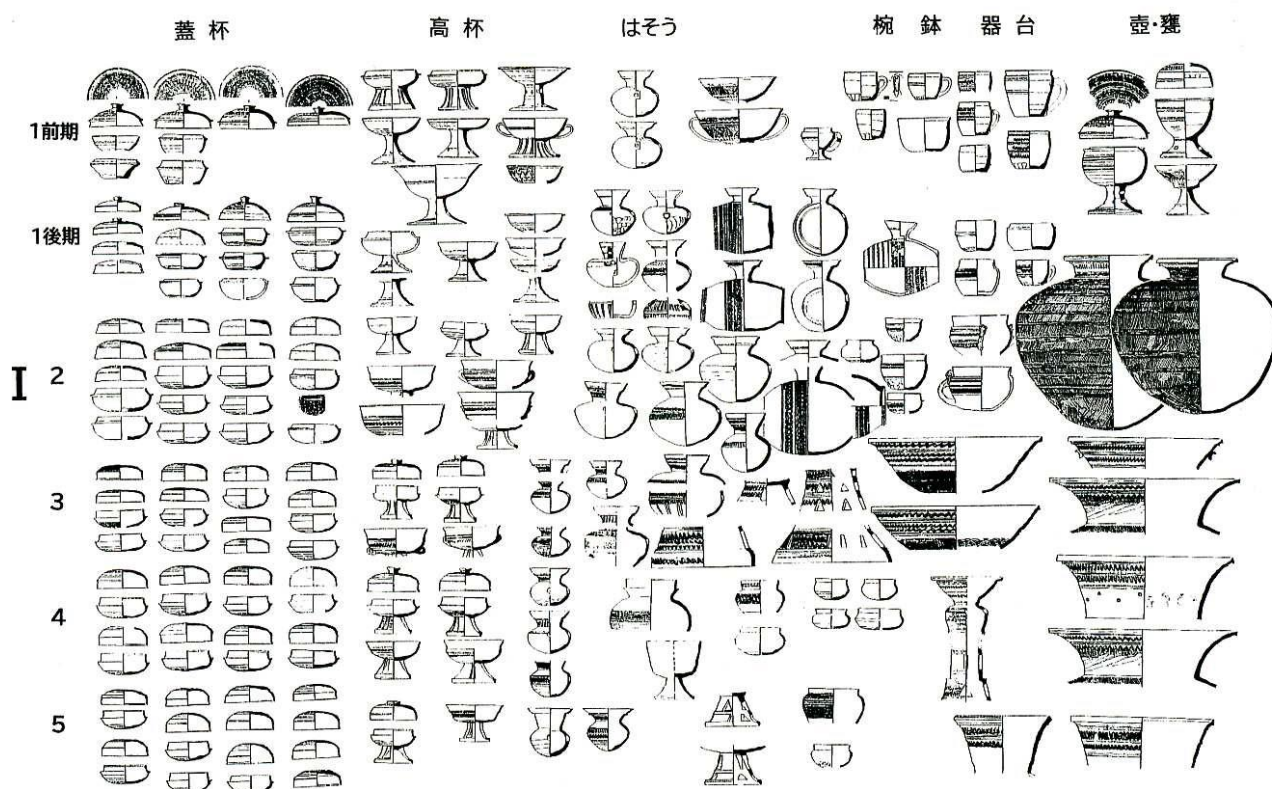


図8 陶邑出土、I型式須恵器編年表（中村作成）

認できる。しかしそれらは床毎、すなわち焼成ごとに大きな変化が見られるなど、きわめて短期間の変化である。それは生産者の置かれた環境の変化であり、日本化への胎動でもあり、その段階をそれぞれ段階変化或いは型式変化と理解するわけにはいかない。従ってここではI型式1段階を前後に区分して、1段階前半、1段階後半としておきたいと思う。以下に1型式の各段階について記述しておきたいと思う。

〈1段階前半〉

TG231・232号窯出土遺物がこの段階に相当する。この時期の大きな特徴は、陶質土器との差がほとんど認められないということにある。器種構成も小型製品が少なく、中型、大型甕などの貯蔵用器種が多いことである。この傾向は広範囲にみられるが、蓋杯が極めて少量であることの特徴がある。

〈1段階後半〉

全範囲比較して日本化の兆候が見られるという時期に該当する。しかし依然として半島の陶質土器の影響は色濃く残っており、前半と同じく床面毎の形状変化が著しい。この段階に区分されるのは

TK85,73,83号窯出土遺物があるが、いずれも各窯の操業期間に時期差が見られる。

〈2段階〉

この段階は須恵器の日本化傾向が著しく進む段階である。しかし随所に陶質土器の特徴ともいえる半島的な文様や形状が残されている。生産された器種については全段階とほぼ同じであるといえるが量的には少なくなっているようであり、明らかに異なっていることがわかる。なおこの変化が日本化の表れであるのかどうかは、次の段階の様相を見なければならぬ。

〈3段階〉

この段階の器種には明らかに本化したといえるものが多く見られるようになる。また陶邑全域の生産にもその傾向が強く行き渡った統制により地域が異なっている、法量、規模、形状の同じ製品が作られるようになってきた。また特別な意匠などは見られなくなり、前段階まで色濃く残っていた半島系の陶質土器の意匠や文様などは全く見られなくなり、陶邑地域全体の決められた意匠によって生産が行な

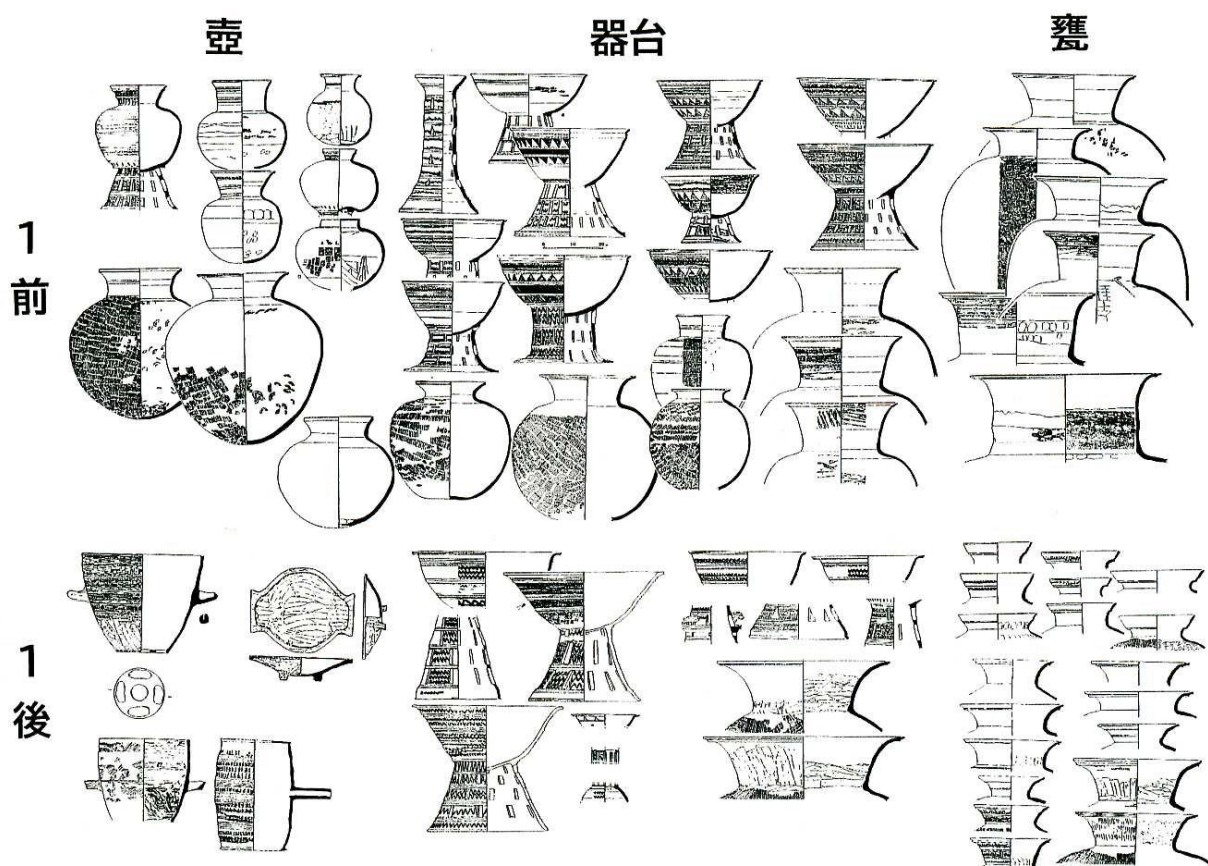


図9 I型式1段階須恵器壺・器台・甕編年表（中村作成）

われているかのように一定の統一された規格品となっている。

〈4段階〉

前の段階に見たような日本化の始まりというような強い印象を与える製品は少なくなり、すでにそれらは定着したような印象を与える。また画一性が見られる一方で、やや手法の粗雑さも見られるようになり、さらに蓋杯の稜線や受け部に見られた鋭意さは姿を消しつつあるように思える。高坏、はそう、壺、甕などの器種は継続するが、樽型はそうなど姿を消す器種もあり、全体的に器種量が減少する。

〈5段階〉

形態の簡略化が相当進行した段階に相当する。とくに蓋つきのごとく極端に小型化するものも見られ、矮小化という表現が適当なほど雑な面が目立つ時期でもある。一方、高坏の脚の長脚化の傾向もこの段階から始まっているとも考えられ、形態の大きな変革の前段階という印象を持つ。

以上、I型式1段階から5段階までを概観したが、

それらは図8に示している。さらに1段階の前半と後半については図9に壺、器台、甕についてのみ示している。

5. むすびにかえて

以上、仁徳陵くびれ部出土の須恵器大甕をめぐって若干の検討を加えてみた。その結果、TK305-I号窯跡出土例に近似するという結論に至った。しかし既述如く、生産工具は長期の使用に耐える場合が多くみられる。従ってTK305号窯跡の近接地域で同じ道具を使用した例は少なくないといえよう。それらは近隣に所在することから同一工人グループの可能性もあるだろう。

ともあれこの甕は陶邑の最古段階ではない、すなわちI型式1段階前半、後半ではないといえる。いずれにしても仁徳陵の構築時期を示すものではないことは明らかである。くびれ部祭祀の時期がいつなのか、少なくとも完成後であることは疑えない。くびれ部祭祀は、墳丘が完成後余り時日を経っていない

頃に行われたと考えるのが妥当だろう。

とはいえ、陶邑と大仙陵との関係が濃いことから I 型式 1 段階のものが、主体部に埋葬されている可能性は否定できない。それらは副葬品としてではなく、被葬者へのお供えの品物を入れる容器として埋納されたと考えている。

＊本稿は、令和 4 年 2 月 13 日に東京よみうりホールで開催されたシンポジウム『大王陵と紀伊の首長の墓』（和歌山県・堺市共催）で、筆者が分担した「仁徳天皇百舌鳥耳原陵出土大甕と須恵器窯」のために用意した原稿の一部である。当日発表できなかったことも多く、慚愧に耐えないが、これを提示してその責の一部を閉じるものである。

補注

和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課「公開シンポジウム「大王墓と紀州の首長墓―百舌鳥・古市古墳群と岩橋千塚古墳群に映し出された政治と社会」資料集、和歌山県・堺市、2022.2.13

参考文献

- 徳田誠志・清喜裕二 2001 「仁徳天皇耳原中陵墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』52 号
- 中村 浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 中村 浩編 1978 『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書 第 30 輯 大阪府教育委員会

紀伊国伊都郡の南海道駅路

大岡 康之

1. はじめに

前号の本研究紀要において、紀和国境にあった真土山と橋本市隅田地区の南海道駅路^{註1}のルートについて愚考を述べた。その中で、真土山とは奈良の都から南海道を辿って紀路すなわち紀伊国に入る最初の地として知られている。真土山と、隅田地区に残る条里遺構の伊勢(大和)街道^{註2}の通じる方格線との間で、南海道の痕跡が残ることを指摘し、さらに真土地内で推定南海道の南側に接する方形の台地は南海道の30里(約16km)毎に設置された駅家であろうことを述べた^{註3}。

ここでは紀伊国内の真土―隅田条里遺構に続く伊都郡内の奈良時代南海道のルートについて、その痕跡をもとに、大きく隅田条里遺構以西の隅田地区、橋本地区、高野口地区、妙寺地区、笠田地区に分けて復元を試みたい。伊都郡内では紀の川下流域に比べると南海道が通じていたとされる紀の川北岸河岸段丘上の平地が未だ少なく、南海道が通る可能性のあるルートが限られていることから復元が比較的容易であろうこと、広範な土地利用ができないために土地区画の変化も限られていることからかつての土地区画が残り南海道の痕跡の発見が比較的容易であろうことが考えられる。

本考においても、前論考の方法を踏襲し、地図では漏れてしまった南海道の痕跡を空中写真から見出し、地図等の他の情報と検討しながら南海道のルートの復元を試みたい。

2. 隅田地区の南海道

隅田地区は前論考で紀和国境から隅田条里遺構までの南海道の推定ルートを復元してみた。ここでは隅田条里遺構から西の隅田地区の南海道ルートについ

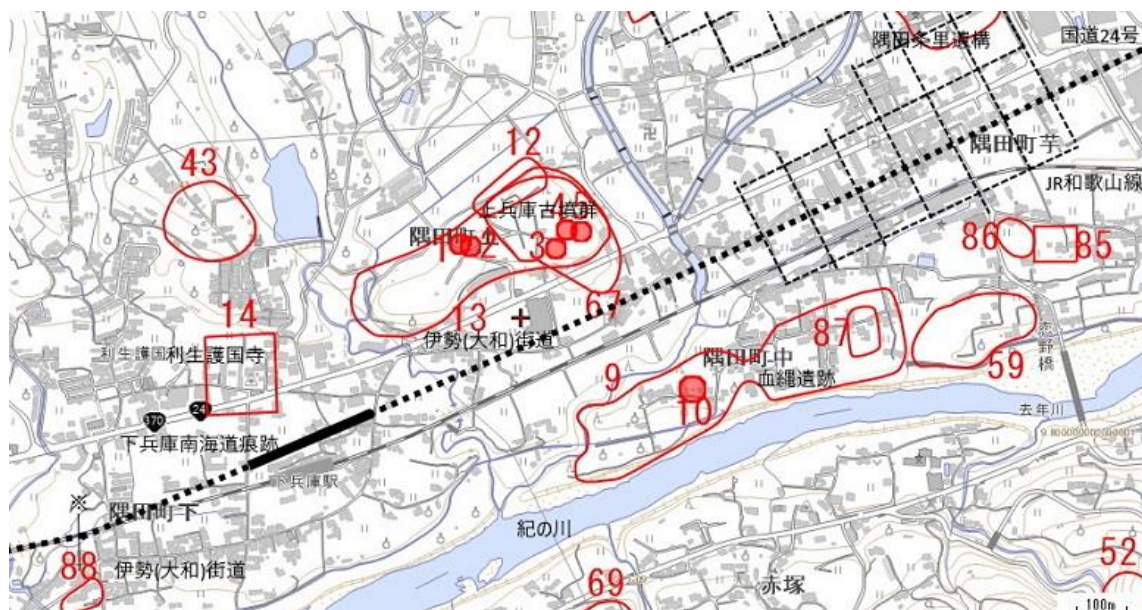
て検討してみたい。

いうまでもなく、駅路はこれまでの全国各地での発掘調査結果から①直進指向性と②規模(幅員)の大き(広)さ、そして③一定間隔に駅家が設置されたことが指摘されている^{註4}。①はどこまでも真っ直ぐ続くコースを採り、地形などにより仕方なく方向を変える場合は現在の車社会の道路のように弧を描いて曲がるのではなく、「く」の字型に屈折して方向を変えること。そして②は不必要に幅広の道路で、南海道の場合12m幅であったと考えられていること。さらに③は当時の法令の「厩牧令」に30里(約16km)毎に駅家が設置されていたことが規定されていることである。③については前掲拙稿に示した^{註5}とおりである。

隅田条里遺構から西方へ橋本までの間は南海道が設定された時期から土地区画が変更されている模様で、土地区画から南海道の痕跡を確認することは難しい状況であった。橋本市隅田町域では農地の区画も当時の頃と大きく変化しており、橋本地域においても市街地化や鉄道・道路建設により地形が大きく変化している。そのような中で、空中写真を観察していると、JR和歌山線下兵庫駅のすぐ北側に東西に住宅の並びがあり、その北側に



第1図 下兵庫南海道痕跡



東北東から西北西に細長い農地の並びを発見した。西は利生護国寺から真っ直ぐ南下する市道まで、東は街道まで伸びており、やや歪みはしているものの最も狭い幅で約 13m、延長は約 300m 近く続いている。一部に住宅が建ち、隣接地を取り込んだり、隣接地に取り込まれたりしているが、これは前掲拙稿の真土でみてきた南海道の痕跡と同様、この下兵庫の細長い土地の並びは南海道の痕跡ではないかとみられる。

これを地図に記したのが第2図である。細長い土地区画をラインに沿って東方へ延長すると、隅田条里遺構の街道が通る方格線に到り、方格線と重なる。すなわち、真土山一隅田条里遺構の街道が通る方格線一下兵庫の細長い土地区画が一直線上に並ぶことになる。これは上で駅路の①直進指向性の指摘に合致し、土地に残された痕跡のみならず、駅路の直進指向の上からも下兵庫の細長く並んだ土地区画は南海道が残した痕跡であることが言える。

さらに、この下兵庫の痕跡の南北幅は南海道の道幅 12m に近く、南海道であった可能性を一層高くする。下兵庫南海道痕跡を西方へ直進延長すると、やがてそのラインは下兵庫共同墓地東側丘陵北で JR と歌山線と交差する(第 2 図※印)。

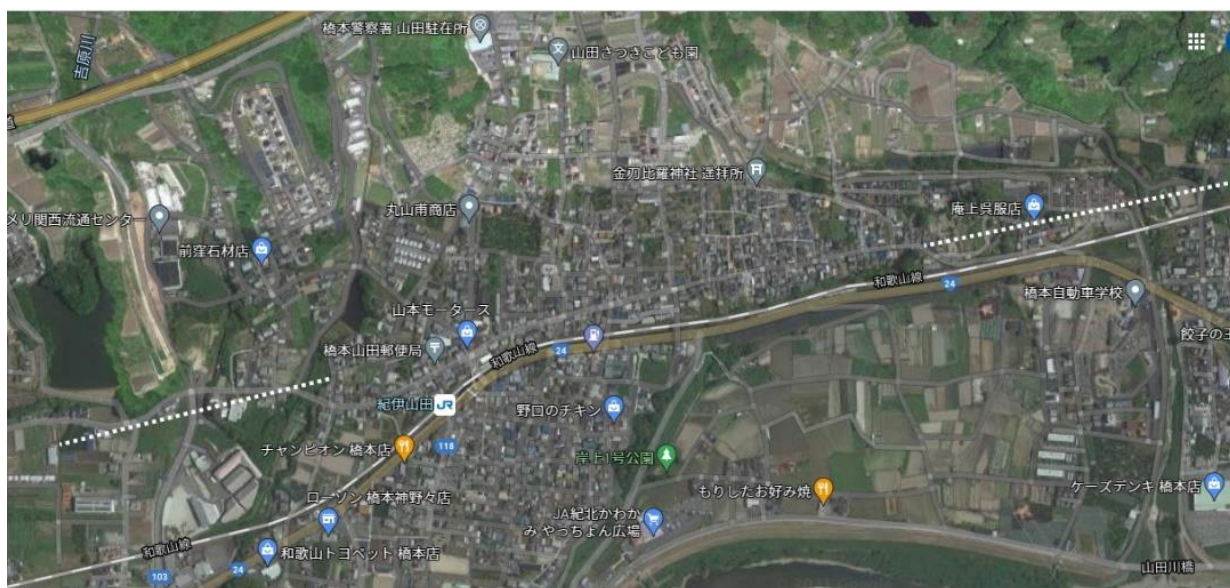
なお、中野栄治氏は駅路の直進指向性をいち早

く紀伊国内の南海道に適用し、真土山から隅田条里遺構を経て橋本市隅田町河瀬まで直進したと設定し、河瀬で方向を幾分北寄りに変えて橋本方面に向かったとする^{註6}。

3. 橋本地区の南海道

橋本地区は狭い範囲に市街地化が進み東西に伊勢(大和)街道とJR和歌山線、国道24号、京奈和自動車道が、南北に高野街道と南海高野線、国道371号がそれぞれ通じ旧地形を復元することが難しい状況にある。そんな中で旧橋本小学校跡地の居館跡とその北側に展開する中要害・上要害間の「イバ」の存在、さらに、その西方に残る橋本市神野々から野に到る街道の直進区間の存在が南海道の復元にヒントを与えてくれる。

まず、後者の街道の直進区間について検討してみたい。ＪＲ和歌山線橋本駅の西隣の駅、紀伊山田駅の北側をＪＲ線と国道 24 号に並行して街道が東西に通じており、駅路の直進指向として南海道を踏襲している区間であろうと考えられる。実際には、南北に少しずつ上下しながら 1 間半から 2 間程度の道幅が残存しているが、当時は 12m あった南海道の道幅も、北側からまたは南側から折々に侵食されて、最低限度必要な道幅が今日に残ったと考えれば、現況の状態となったのも頷け



第3図 神野々々野 街道直進区間 (Google Map に加筆)

るのではなからうか(第3図)。

また、紀伊山田駅のすぐ東側に南北の道が通じているが、「御幸道(ごこうみち)」と呼ばれ、天皇が利用された道と伝わっている^{註7}。弘法大師空海によって高野山がひらかれた後、高野参詣に用いられたと言われており、平安遷都後に南海道のルートが一時的に紀伊峠越えに変更され、その後、高野街道として用いられるようになったことを思えば、平安遷都後間もない頃の新南海道はこの地で旧来の南海道に合流したものと考えられる。

次に前者の旧橋本小学校跡地にあったとされる居館跡とその北にあった中要害と上要害について

触れたい。現在、旧橋本小学校跡地北方の三角形に突き出た独立した岩山と橋本インターから南へ張り出した尾根筋との間に狭い切り通しがあり、ここをJR和歌山線が通じている(第4図)。これまで、この切り通しはJR和歌山線の前身である紀和鉄道が北方から南へ突き出した一つの連なった尾根を分断して鉄道を通したと考えていたが、紀和鉄道がここに鉄道を通す以前からこの尾根筋は北側と南側の二つに分断されていた形跡のあることが解った。

岩倉哲夫氏が紹介された「協家文書」の「伝家記」の付図とされた「先祖屋敷之図」及び「今代所之図」^{註8}で、現在の旧橋本小学校跡地に「居屋敷迹」とあり、その北側に街道を挟んで「中要害」、その北側に「イバ」と表記された低まった弓場が描かれ、さらに、その北側に山のように描かれた「上要害」、その西に「墓」が記されている。地形としては、北から上要害、イバ、中要害、居屋敷迹と南北に並んでいる。近年、東家館跡である旧橋本小学校跡地では発掘調査によって堀の穿たれた館跡が発見されており^{註9}、これをこの図では「居屋敷迹」と記し、



第4図 東家 JR線と上要害・中要害(西から)



第5図 神野々—橋本 南海道推定ルート(「和歌山県埋蔵文化財包蔵地地図」に加筆)

本図は中世から残された地形を表現したものと推定されている。

東家館跡は台地上にあり、東・南・西の三方は約 10mの段差を介して目下に紀の川の氾濫原が広がっており、北方のみが地続きとなっている。東家館跡北方の「イバ」と記される弓場跡は上・中両要害から低まった場所であったとされることから、中世にはこの切り通しがすでに存在し、丘陵が分断されていたことになり、中世または中世以前にすでに尾根筋を切り通すという大工事が行われていたことになる。その当時はここまで深く切り通しが行われていた訳ではないと考えられるが、そのような古い時代にこれだけの大規模な工事がこの位置で行われるのは南海道建設工事以外に考えられず、現在鉄道が通る橋本市東家の切り通しは南海道の通じていた跡であろうと考える。

ここで、上で検討した神野々一野の街道直進区間と東家の切り通しを地図上にのせてみると第5図のようになる。図からお解りのように神野々一野の街道直進区間と東家の切り通しが一直線上に並ぶ。さらに、「23 市脇遺跡」でも東家の切り通しと同様に北から南に向かって突き出した舌状台地を分断した切り通しが認められ、東家・市脇の切り通しは地形としての形状だけでなく、神野々一野の街道直進区間を延長したライン上で一直線に並ぶことになり、直進指向が指摘されている南海道のルートであった可能性は極めて高いということになる。

南海道を直線で東西に通そうとすれば、紀の川の氾濫原は必然的に避けることになるから、北側の山手を通す必要がある。「60 銭坂城跡」は紀の川の初段の河岸段丘端部に位置し、直線で東西を結ぶ幅広の道路を容易に通すには丘陵裾部の比較的高低差の少ない場所を選ぶ他になく、当地の地形からも南海道は第5図に示すルートであったといえる。

東家の切り通しについては、当初から現状のように深く切り通されていた訳ではないと考えられるが、中世において切り通しはこの南側と北側に分断された丘陵が要害として利用され、切り通しそのものは弓場として利用され、上要害と中要害に分断されていた。近代には鉄道敷設にあたってこの切り通しに目が付けられ、鉄道が越せる程度の勾配を保つために深く切り通す工事が行われたと推定される。

ただし、市脇・東家の2か所の切り通しから現在の橋本駅へ向かうには橋本川を越えなければならない。現況では、橋本川西岸（東家）の上記の切り通しのある段丘から橋本川が形成した開析谷へは13m程度の段差があり、J R線のすぐ北側であれば一定の斜面を介して谷へ下ることができる。ところが、橋本川東岸（古佐田）は現状では断崖となっており、橋本川を渡って道路を付けることができるような場所は確認できなかった。しかしながら、昭和23年のアメリカ軍の空中写真^{註10}をみると、左岸では現在のように護岸の高い擁壁は



第 6 図 橋本—下兵庫 南海道推定ルート（「和歌山県埋蔵文化財包蔵地地図」に加筆）

認められず、段々に橋本川へ向かって低くなっている様子が窺える。左岸でも右岸と同様に河床へ下ることができたものと解され、南海道が通じていた可能性が考えられる。

ところで、神野々一野の街道直進区間、東家の切り通し、上要害と中要害の間を通過して現在の橋本駅北側へ至ると推定されるが、これをさらに東へ直進延長すると橋本市妻の JR 和歌山線と南海高野線が交差する付近から JR 線と重なって東進し、国道 24 号と交差のうえ、隅田町河瀬と下兵庫の境界の白猪谷川（しらいだにがわ）を越える。一方、前項でみた隅田条里遺構から直進してきた南海道は下兵庫駅北側の痕跡を通過して、白猪谷川の東で JR 線と交差する。神野々一野の街道直進区間から東へ直進してきたラインと、隅田条里遺構から西へ直進してきたラインは白猪谷川の東、下兵庫共同墓地東側丘陵北で両者が交わることになる。その交点で南海道が屈折していたであろうことが推定されるのである。

また、JR 和歌山線が南海高野線との交差点から白猪谷川東の墓地東側丘陵北までの間を南海道の跡を通過しているということは、JR 和歌山線の前身である紀和鉄道が鉄道を敷設するにあたって、東家の上要害と下要害のところでも触れたように、すでに道路としての一定の整地がなされており、鉄道敷設工事を軽減したであろうことと、土地取得にあたってすでに南海道の道路として細長く土地が区画されていた部分をそのまま取得できた可

能性があり、分筆などの面倒な手間が軽減されたなどが想定される。少なからず経費や手間が軽減されたものとみられる。

4. 高野口地区の南海道

橋本市高野口町は伊都郡内でも紀の川北岸河岸段丘上の平地が比較的広く、水田に適した平野が広がっている。古代にはこの地域は「村主郷（すぐりのごう）」と呼ばれ、その郷名からかつての伊都郡の中心地域であったと考えられている。大規模な条里遺構も確認されており、条里遺構の東と西の両側には古代寺院が存在していたことが知られ、二つの寺院に挟まれた条里もしくはその周辺には郡の役所である郡衙存在の可能性も指摘されており、村主郷という名にふさわしい景観が広がっていたと推定される。

橋本市高野口町でも西部のかつらぎ町との境界に近い大野では京奈和自動車道高野口 I.C. へのアクセス道路が開通し、近年開発が進み市街地化されつつある。そんな中で農地が残る区域の空中写真を観察してみると、高野口駅の西方約 650m の JR 和歌山線南側に、東北東から西南西に向けて地割が幅 10 余m、延長約 200m にわたって細長く一直線に続いている様子が認められる（第 7 図）。現在は中ほどに家屋が数棟建っているのですがその痕跡は崩れつつあるが、空中写真からはその痕跡が今でも確認できる。楕円形を付した左下の T 字路から、南北に通じる県道 112 号を少々越えた



第7図 大野南海道痕跡(Google Map に加筆)

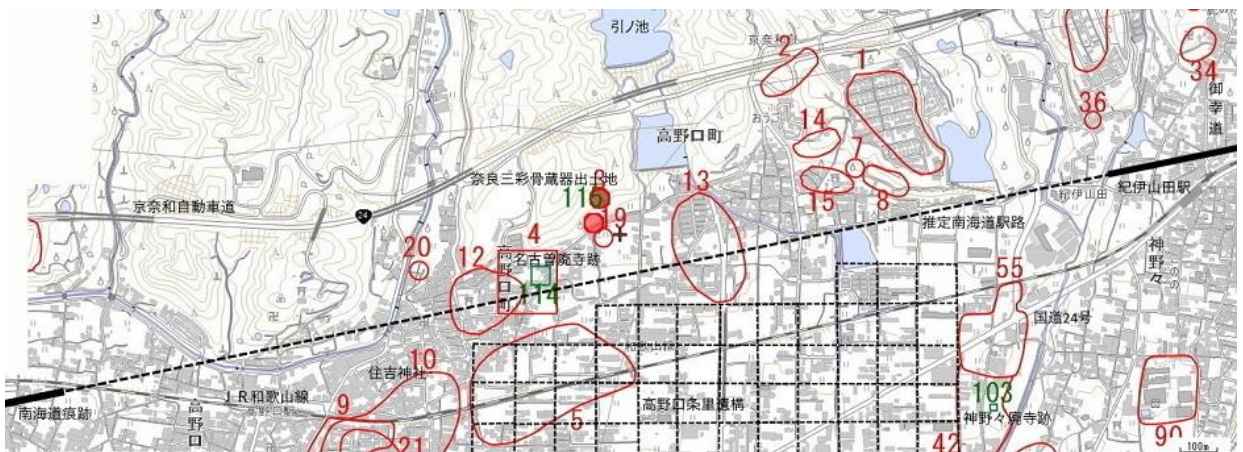
ところまで続く。地番図を見てもその状況があらわれており、道路の痕跡と推定され、その幅、そして直進している様子からみて南海道の可能性が推測される。

この位置を地図上にのせてみると、第8図のとおりである。大野の細長い地割のラインを真っ直ぐ東へ延長すると高野口駅北側の高野口公園の南側を掠めて名古屋の住吉神社・名古屋廃寺跡の南側、応其の野中池、そして神野々から野へ直進する街道へと至る。すなわち、大野の地割と神野々一野の街道直進区間は直線上に並び、大野の地割は単に道路跡の痕跡だけではなく、直進性が強く意識される駅路の可能性が高く、南海道ルートであったものと推定されるのである。

第8図には、橋本市高野口町応其から名古屋に

かけて基盤の目状に土地が区画されている条里遺構が認められ、一辺が1町(約109m)の正方形の土地の区画が行儀よく並んでいる。高野口条里遺構は伊都郡内最大規模で、古代に「村主郷」と呼ばれた区域にあって耕地も広く、伊都郡の中心地であったと推定されるのは上に記したとおりである。

伊都郡内の紀の川北岸には東から隅田、高野口、妙寺、笠田地区にそれぞれ条里の遺構が残されているが、隅田条里遺構の条里方格線は方位にのせられておらず、北が西に向かって28度傾いて設定されている。妙寺と笠田もそれぞれ北が西へ向かって15度と、22度傾いて設定され、高野口条里のみが方位に合わせて設定されている^{註11}。紀の川北岸の伊都郡内に残る条里遺構は高野口のみが



第8図 大野ー神野々 南海道推定ルート(「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」)に加筆)

方位に則った形で設定されているが、他の3つの条里遺構はいずれも異なった傾きをもって設定されているのである。傾きの理由は地形的な制約というよりは、隅田条里遺構で見てきたように南海道の進路に影響されたと考えるべきであろう。条里のある区域はいずれも平坦地を選んで設定されており、南海道以外にわざわざ方格線を傾けて設定する理由が見当たらない。すなわち、傾きをもって設定されている隅田、妙寺、笠田の各条里遺構は南海道駅路の進路に影響され、南海道の傾きをもって設定されたものと推定されるとともに、いずれも条里の方格線のいずれかを南海道が通っていたと考えられるのである。従って、それぞれの条里は南海道が設定された時期、もしくはそれ以後に設定されたことになる。

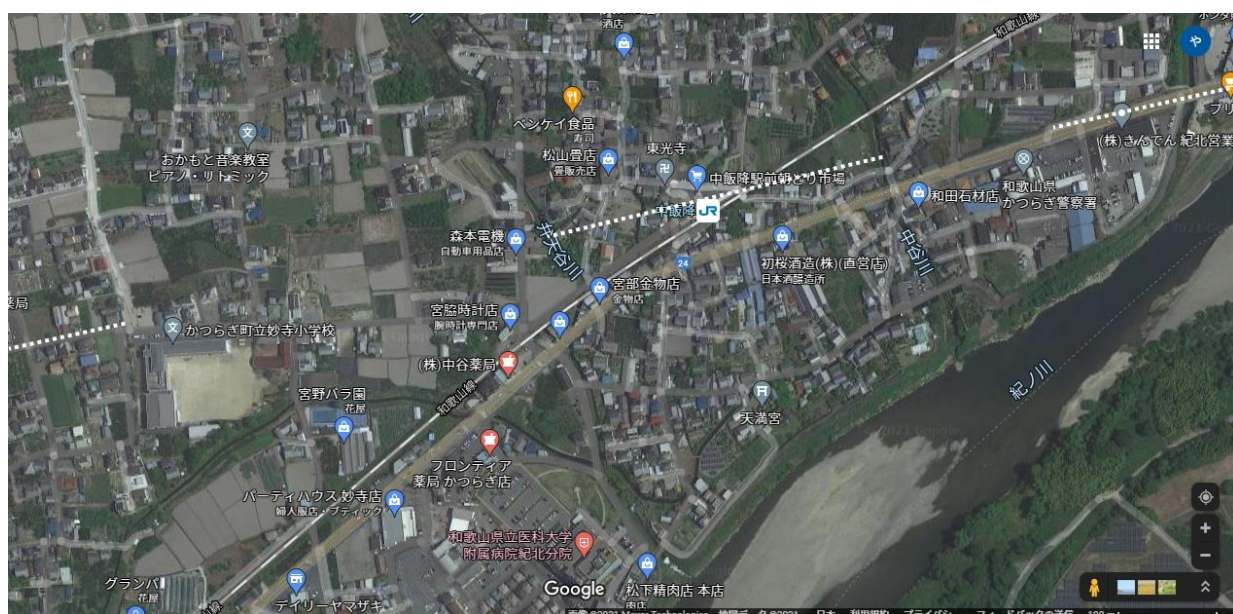
では、高野口条里はどうかというと、条里遺構の方格線を検討してみても、駅路が通じていた証明となる余剰帯を持つ坪列は見あたらず、南海道は高野口条里の内を通過したとは考え難い。上でみてきたように南海道ルートは高野口条里遺構の北側を通り、このルート沿いの区域には条里が及んでおらず、条里は南海道と直接関わりを持たずに設定されたため、南海道が通じる方向の影響を受けず、方位に則った形で条里の方格線が設けられたものとみられるのである。現在、条里の方格

線が南海道推定ルートに及ぶものも見受けられるが、これらは南海道が廃絶した後に南海道跡地が耕地化された際に、条里の方格線を延長して耕地の区画としたと考えられ、これらは1町四方の坪の内の地割（長地型・半折型）に乱れがあつて、本来の条里遺構と見分けられ、後世に耕地化されたことによる方格線の延長ということが推測される。これらのことから、高野口条里遺構は条里の内を南海道が通っておらず、その影響を受けずに方位に合わせて設定されたことが推定されるのである。

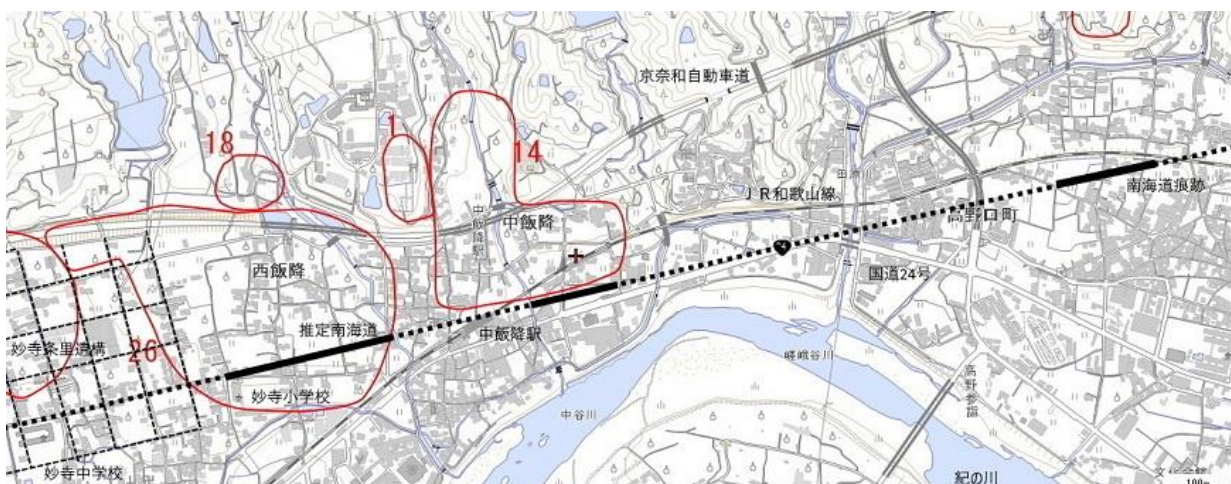
5. 妙寺地区の南海道

大野の細長い土地区画は上でみてきたように南海道の痕跡とみられることから、神野々一野の街道直進区間から大野の痕跡に至る直線ラインを西方へ延長すると、かつらぎ町妙寺条里遺構方格線のうち、これまで南海道と指摘されてきた^{註12}妙寺中学校北側東西道路に至る。JR線下兵庫駅の西側からかつらぎ町妙寺の条里遺構の方格線(妙寺中学校北側の東西道路)へ一直線で繋がるのである。

また、大野の痕跡と妙寺の条里遺構の間の JR 線中飯降駅の東方と西方にも第9・10図のように南海道の跡とみられる土地区画が認められる。駅東方の痕跡はかつらぎ警察署の北側、西方の痕跡



第9図 中飯降南海道痕跡(Google Map に加筆)



第 10 図 妙寺一大野 南海道推定ルート（「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」に加筆）

は妙寺小学校の北側に残されており、いずれも大野痕跡と妙寺条里遺構の妙寺中学校北側の東西方格線を結ぶ直線上にあって、上に述べた下兵庫ー妙寺の直線ラインが南海道ルートであったことを補完する。

上でも述べたように、妙寺条里遺構は方位にのせて設定されておらず、傾きをもって設定されていることからこの条里遺構の東西方格線のいずれかを南海道が通じていたことになる。これまで妙寺中学校北側の東西方格線が南海道であったといわれてきたが、大野・中飯降の痕跡及び下兵庫から地表に残された痕跡を綴り合わせて西方へ延ばしてきた直線がここに至ることから、これまでの

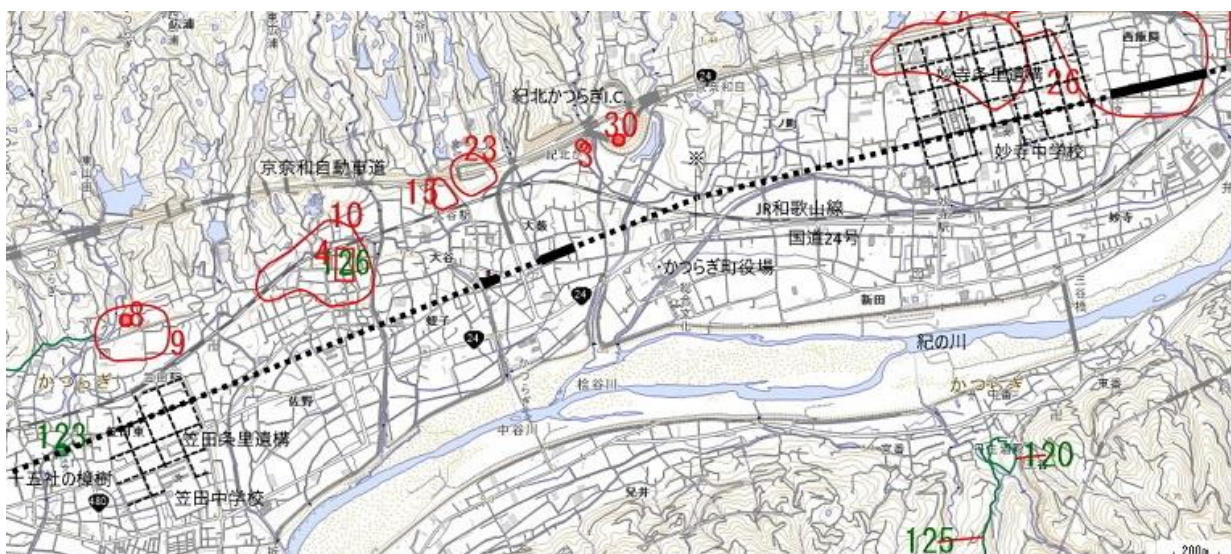
妙寺中学校北側の東西道路が南海道であったことが裏付けられることになる。

6. 笠田地区の南海道

妙寺条里遺構と笠田条里遺構はいずれも方位にのせて設定されたものではないので、上の考察からすると両者とも東西方格線のいずれかを南海道が通じていたことになる。しかも、妙寺と笠田の条里はそれぞれ異なった角度の傾きをもっていることが判明している。すなわち、それぞれの条里遺構を突き抜ける南海道ルートは一本の直線で両者を突き抜けることはあり得ないことであり、南海道ルートは妙寺条里遺構と笠田条里遺構の間の



第 11 図 大谷南海道痕跡(Google Map に加筆)



第 12 図 妙寺—笠田 南海道推定ルート（「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」に加筆）

どこかで屈折していなければならない。

そこで、再び、妙寺—笠田間で南海道の地表に残る痕跡を検討してみた。地図では道など残る以外は情報が失われてしまっているの、ここでも空中写真から探索してみた。その結果、大谷付近で南海道の残した地割とみられる痕跡を発見した(第 11 図)。かつらぎ町役場前交差点から街道沿いに西方へ進み、京奈和自動車道かつらぎ I.C.へのアクセス道路との交差点東と西で、それぞれ北側を並行して南海道が通じていたとみられる。

この位置を地図上に記すと第 12 図のようになる。図中ほどの実線で示した部分である。この 2 か所を繋いで西方へ直線で延長すると、笠田条里

遺構の笠田郵便局前の東西方格線に重なり、笠田条里の傾きの角度にも合致する。逆に東方の妙寺条里遺構へ延長すると、大谷の痕跡のラインと妙寺条里遺構の東西方格線の傾きの角度とが異なっており、両者は重なりをもたない。従って、大谷の痕跡は笠田条里の延長上にあつて、大谷の痕跡と妙寺条里遺構の間で南海道は屈折していることになるのである。

上記の南海道屈折点はどこかという、笠田条里—大谷の痕跡のラインを東方へ、妙寺条里の妙寺中学校北側の東西方格線を西方へそれぞれ延長した両者の交点、かつらぎ町役場の北方、京奈和自動車道かつらぎ I.C. 東側の北から南へ突き出



第 13 図 南海道推定ルート笠田—背の山（「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」に加筆）

した尾根の先端ということになる。この点で南海道が屈折していたものと推定される。

以上の結果、笠田条里遺構では北から2本目の東西方格線を南海道が通っていたと判断でき、現在の笠田郵便局、笠田小学校北の十五社の樟樹付近を抜けて西方、背山方面へ向ったものと推察される。

笠田条里遺構の南海道が通じる方格線が判明すると、笠田条里遺構の西方、背の山へのルートが課題となる。これまで、背の山越えについては、背の山北側の丘陵鞍部越え説と、背の山南側の紀の川との間を抜けたとする説があり^{註13}、両者について検討されてきたところである。上の考察から南海道は笠田条里遺構の笠田郵便局—笠田小学校北側・十五社の樟樹を繋ぐ方格線を通ったと考えられ、妙寺条里遺構と笠田条里遺構の間で南海道ルートが屈折しており、同間で屈折した後すぐに笠田条里遺構の西側で屈折することはこれまでの設定ルートの傾向から考えられないので、このラインを西方に直進したものと推定される。その推定ラインは第13図に示すとおりである。

また、仮に、笠田条里遺構方格線の一つ北側の方格線を南海道が通っていた場合、背の山の頂上付近を通ることになり、相当険しいルートとなる。逆に一つ南側の方格線を通った場合、紀の川にかかってしまうため、双方とも南海道ルートとは考え難い。さらに、仮に笠田条里遺構の西側で屈折して背の山の北側鞍部を越えると仮定しても、山間に入っていくため背の山を越えて西側で再び南寄りに屈折する必要がある、何度も屈折を繰り返すことになってしまい、直進指向の駅路としてはありえないルートとなってしまう。

笠田から背の山裾までは、笠田郵便局—笠田小学校北側・十五社の樟樹を繋ぐ方格線の西方への直線延長線が街道ルートと重複もしくは並行して通じており、街道が南海道ルートを概ね辿っていることを考えれば、上の推定ルート、すなわち、背の山南側を南海道が通じていた可能性が濃厚となる。

7. おわりに

これまでの南海道研究は、文献をはじめ歴史地理学の分野から地図に描かれた道路や地形から南海道の復元が試みられたが、直接の成果になかなか結びつかなかったのが現状であった。しかしながら、近年はインターネットから戦後—現在の空中写真の閲覧が可能になったことにより、地図から漏れた情報を容易に得ることができるようになった。ここでは空中写真から南海道の痕跡を探し出し、地図情報と組み合わせて南海道の復元をするという全く新しい手法を試みた。さらに精度の高いものとなるよう諸兄のご指導とご批判をお願いする次第である。

【註】

- 1 以下「南海道」と略す。
- 2 以下「街道」と略す。
- 3 大岡康之 2021「紀和国境の南海道駅路」『紀伊風土記の丘研究紀要』第9号
- 4 ①②中村太一 2000「計画道路の発見」『日本の古代道路を探す』平凡社新書
③中村太一 2000「駅伝制とは何か—律令国家交通精度」『日本の古代道路を探す』平凡社新書
- 5 前掲註3
- 6 中野栄治 1989「南海道と条里」及び「南海道の直線指向と条里」『紀伊国の条里制』古今書院
- 7 「主な史跡と遺跡」『橋本市史』下巻 1975
- 8 岩倉哲夫 1998「橋本市東家の古社寺について」『文化橋本』第20号、「伊都郡東家館の考察—史実と伝承—」『和歌山城郭調査研究会 10周年記念誌 城』
- 9 『東家遺跡・東家館跡発掘調査報告書—橋本市こども園新築工事に伴う発掘調査—』橋本市遺跡調査会 2014
- 10 地図・空中写真閲覧サービス 国土地理院ホームページ
- 11 前掲註6
- 12 「条里遺構と条里区画」図3『かつらぎ町史』通史編 2006
- 13 「南海道と萩原駅」『かつらぎ町史』通史編 2006

井辺八幡山古墳の太鼓形埴輪について

井辺八幡山古墳検討会

はじめに

経緯と経過 井辺八幡山古墳は、和歌山県和歌山市井辺字八幡山に所在する全長約88mの前方後円墳である。1969年に和歌山市の委嘱を受けた同志社大学文学部考古学研究室により、墳丘の測量調査および東西の造り出し部分を中心とした発掘調査が実施された。その成果は調査報告書（森編 1972、以下「1972年報告」）にまとめられた。とくに、東西造り出しからは、数多くの形象埴輪が原位置の検討の可能な状況で出土したため、6世紀代の埴輪配置を考えるうえで重要な位置を占めるようになった。

しかし、上記報告書の刊行以後、古墳における形象埴輪の配置構造の分析、配置原理の解釈に関する研究が大きく進展し、井辺八幡山古墳の埴輪配置について調査資料の実態を踏まえたより実証的な復原案が求められるようになった。

このような状況を受けて、我々は井辺八幡山古墳検討会を立ちあげ、調査時の原図および未整理資料を含む形象埴輪群の再検討に基づく新たな埴輪配置案を提示した（佐藤ほか 2005）。

その成果については、様々な研究（犬木 2019、松田 2010、若松 2012 等）や博物館の展示（高槻市立今城塚古代歴史館 2019、和歌山県立紀伊風土記の丘 2008・2011 等）に活用されている。

2021 年秋、大阪府今城塚古墳に太鼓形埴輪が存在すると発表された。単体の埴輪表現としては宮崎県百足塚古墳に続く 2 例目の発見となる。近畿地域における発見は同地域内の他古墳でも太鼓形埴輪が存在する可能性を示唆した。

これを受けて、井辺八幡山古墳検討会では、同年 12 月に同志社大学歴史資料館にて検討会を実施した^①。その結果、井辺八幡山古墳においても太鼓形埴輪の存在を確認した。

本稿の目的 本稿は、その資料紹介が主たる目的である。くわえて、他例との比較検討、埴輪配置での

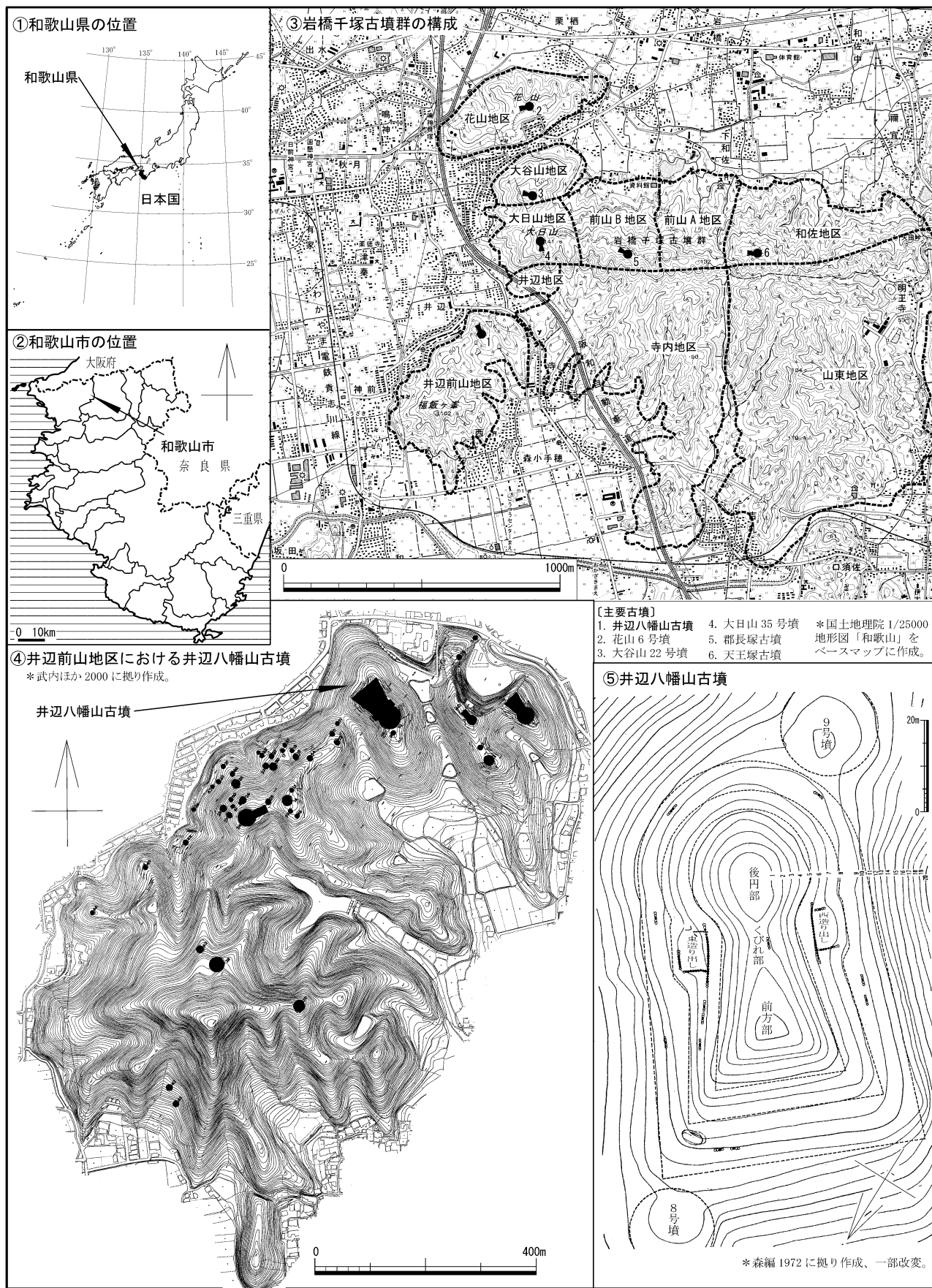
位置付けについても若干の予察を試みたい。（清水）

1. 古墳群と古墳の概要（第 1 図）

岩橋千塚古墳群 岩橋千塚古墳群は、紀ノ川南岸の岩橋丘陵周辺、東西約 3.0 km、南北約 2.5 km の範囲に広がる 4 世紀末から 7 世紀にかけて造られた総数約 900 基にも及ぶ古墳群である。古墳群は地形及び古墳の状況から 10 区（花山地区、大谷山地区、大日山地区、前山 A 地区、前山 B 地区、寺内地区、井辺地区、井辺前山地区、和佐地区、山東地区）に分けられ、一部が国の特別史跡に指定されている。

6 世紀の首長墓 この古墳群の最盛期は、古墳時代後期にあたる 6 世紀である。丘陵上に大型古墳が築造され、6 世紀前半には大谷山 22 号墳、大日山 35 号墳、井辺八幡山古墳、6 世紀中頃には天王塚古墳、6 世紀後半には寺内 57 号墳、6 世紀末から 7 世紀初頭には井辺 1 号墳が連綿と続く。また、この地域特有の岩橋型横穴式石室や独白色の強い埴輪が出土するなど、ヤマト政権との関わりをもちつつも、地域色が濃くみえてくる。そのため、岩橋千塚古墳群は紀ノ川下流域の在地勢力により築造された古墳群と考えられ、古墳の被葬者は、文献史料の記述に登場する豪族「紀氏」が想定されている。（金澤）

井辺八幡山古墳 岩橋千塚古墳群中の井辺前山地区（福飯ヶ峰）に位置する。井辺前山地区は約 90 基の古墳から構成されている。当該古墳は従来三段築成の前方後円墳とされてきたが、大日山 35 号墳の調査成果との比較検討から、一段目は墳丘に付帯する基壇部分（盾形）に相当するとし、その上部に東西の造り出しをもつ二段築成の前方後円墳とする見解が提示された（藤井 2005）。この場合の墳長は全長約 67m、後円部径約 39m、前方部幅約 43m となる。基壇を含めた全長は約 88m で、従前の数値から変わりはない。埋葬施設については未調査であるが、横穴式石室が想定される。築造年代は、造り出しから出



第1図 井辺八幡山古墳関連図

土した須恵器の年代から、6 世紀前葉～中葉頃に位置づけられる。

東西の造り出し 造り出しを囲繞する埴輪列の区画は、東造り出しで幅 7.5m・長さ 6m、西造り出しで幅 7m・長さ 5m となり、それぞれコの字状を呈している。この区画内部と埴丘裾部からは、東造り出しで 25 個体以上、西造り出しで 17 個体以上の形象埴輪が、ほぼ原位置をたもった形で検出されている。

東造り出しの埴輪配置 ここではとくに東造り出しについて述べる。東造り出しの人物埴輪は基本的に埴丘内側に正面（足先）を向けて配置されている。形象埴輪群は、バチ形土製品を握る武装人物 2 を先頭とする一群による「隊列グループ」、袈裟状衣の人物 8 と須恵器群による「供献グループ」、人物 10 を先頭とする鷹形土製品を伴う武装（もしくは盛装）人物とそれに伴う動物群による「狩猟グループ」の 3 群から構成される（佐藤ほか 2007、松田 2010）。埴丘側では西を向く武装人物と馬の組み合わせが配置されているほか、円筒埴輪を組み合わせた排水施設が東側の谷部へ向けて設置されている。詳細は後述するが、今回資料紹介する太鼓形埴輪は人物 2 号の周辺から出土したと想定される。（佐藤）

2. 太鼓形埴輪について（第 2 図）

概要 今回出土資料を再検討した結果、太鼓形埴輪と考えられる破片を見出した。いずれも東造り出しからの出土である。これらは、内面が暗灰色で指頭痕が残る点、外面は明褐色を呈し風化（摩滅）が著しい点、胎土には 1mm 大の片岩が多くみられる点等の特徴から、同一個体もしくは類似した特徴を有する少数個体であった可能性が高い。

観察結果 今回これらの破片をあらためて実測したので、それらを提示しつつ、各破片の観察結果を以下に述べる。

1 は太鼓形埴輪の「鼓面」に相当する。1972 年報告では「円弧で飾った薄板 形象（カ）」として実測図 2 点が掲載されていた。今回、この 2 点が接合し、最終的に円盤状を呈することが判明した。円盤の直径は約 22cm に復元される。後述する太鼓形埴輪の胴部と一部接合する可能性が高い。また、接合しない

同様の部位の破片がもう 1 点ある。

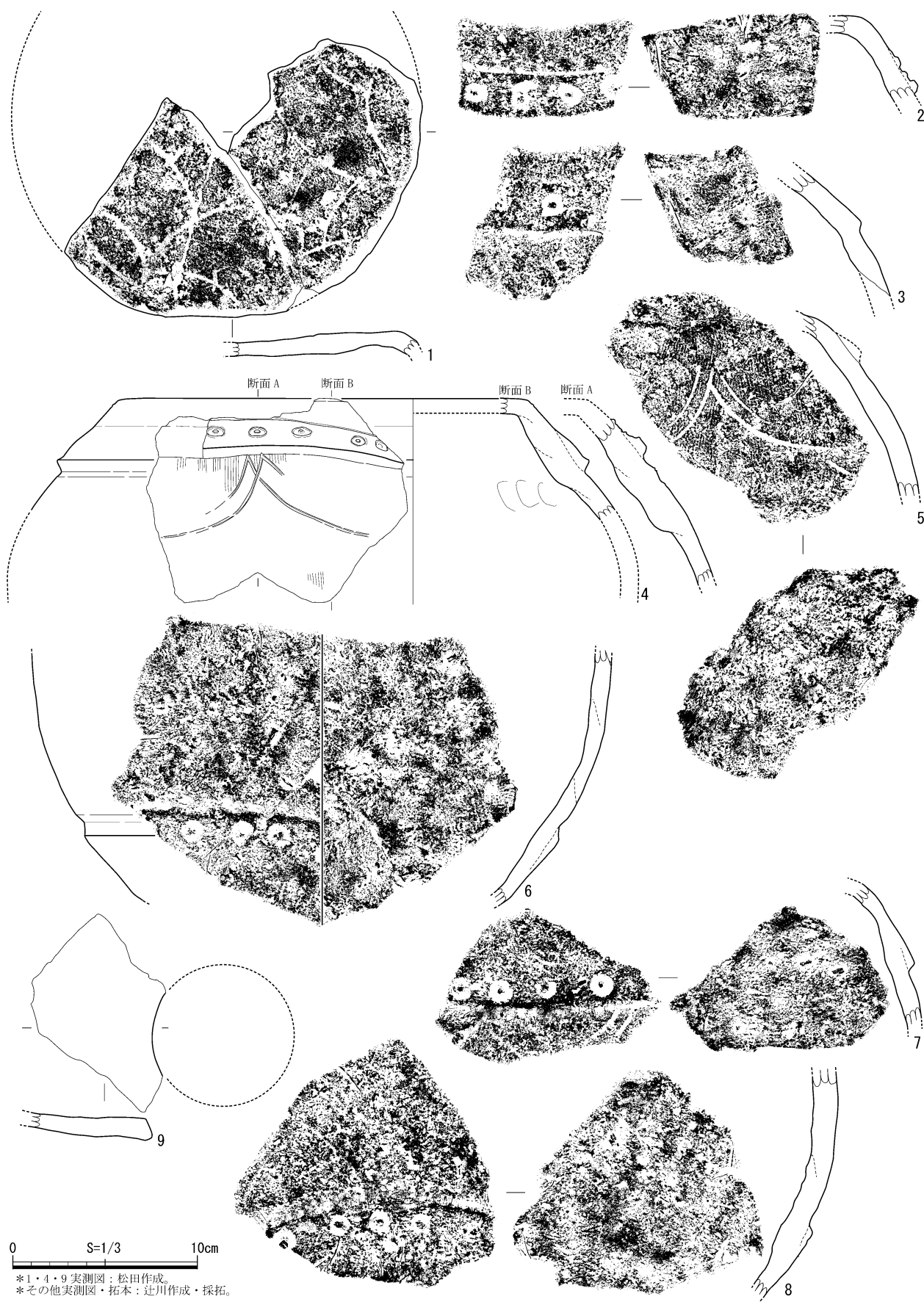
2～8 は胴部片と目される。1972 年報告では「大型脚付鉢 形象（ル）（ヲ）」として、4・6 の実測図が掲載されていた。今回、粘土接合痕等の観察から、胴部上半（2～5・7）と下半（6・8）の破片の存在を確認した。上半は「鼓面」から体部に屈曲する部分に幅 2 cm 程度の粘土帯を貼付し、竹管文列を加える（2～5）。竹管文列の上部に沈線 1 条を追加する例（2）もあるが、その有無が個体差を反映するかは確言しがたい。また、外面には、タテハケ調整後、連続する弧状の二重線刻が粘土帯の下方に施される（4・5）。一方、下半では、連続する鋸歯状の二重線刻が粘土帯の上方に施されている（6）。上半と下半の線刻の関係については確定できなかった。粘土帯端部の曲線から推定すると、胴部の最大径は約 33cm に復元される。9 は 1972 年報告に記載のない資料である。板状の部位で、直径 7～8cm に復元されるスカシ孔がある。1 に類似するものの、外面に円弧が描かれていないことから、1 の鼓面とは逆の下面と推定した。ただし 6・8 とは接合しない。

出土位置 上記の形象埴輪の出土位置は、「東造り出し 形象（ル）」との注記がある以外、詳細は不明である。ただ、1 については、1972 年報告に「A 区家形埴輪二号付近で破片となって散乱していた」（森編 1972、p280）と記述され、内面に同様の注記（家形 2 付近）がある。配置場所を想定できる重要な情報といえる。（松田）

3. 若干の考察（第 3・4 図）

太鼓形埴輪としての復元 今城塚古墳例や百足塚古墳例を参考にして、先述した破片から全体形を復元してみた（第 3 図）。

全体形態は胴張気味の樽形を呈する。上端の「鼓面」は直径 22 cm 程度、全長については不確定ながら、35～40 cm 程度になると推定される。「鼓面」には円弧紋が線刻により描かれる。「鼓面」から続く部分の外面には、幅約 5 cm の粘土帯がめぐらされ、その下端寄りに竹管紋列が施される。この粘土帯は革張りの縁の表現、竹管紋列は革を留めた「鉾」の表現と見なせよう。体部外面には上部に円弧紋を、下半部



第2図 太鼓形埴輪実測図

には2条沈線紋で三角文を描く。

体部下端については、手がかりが少ないものの、その中で6・8は注目すべき破片である。破片の一端には粘土帯と竹管紋列という構成が認められ、上部の「鼓面」付近の破片とも考えた。しかし、観察された粘土接合痕は外傾接合であって、「鼓面」付近の破片(2~5)とは異なる。両者を別個体とする余地もあるけれども、ここでは胎土等の類似性から一個体と考え6・8を下端付近の破片とみた。かかる想定が妥当な場合、「鼓面」と反対側にも粘土帯+竹管紋表現が施されていた一部部の上下側ともに革を張った「鼓面」が表現されていたことになる。さらに、9の存在からみて、下方の「鼓面」に円孔が先行されていたことも推定される。

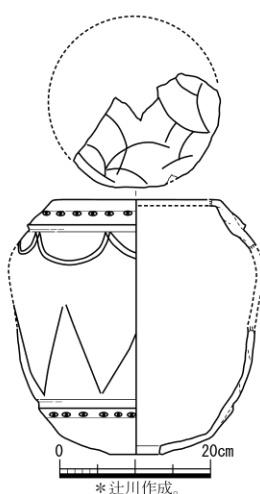
以上から、本例は樽形の太鼓単体を表現した可能性が高いと結論づけられる。

配置の復元 次に、この太鼓形埴輪の配置場所について検討する(第4図)。破片の大半は東造出し出土という以外に出土地点に関する情報を知りたい。しかし、先述したとおり、「鼓面」片(1)は「家形埴輪二号付近」で出土したことがわかる。家形埴輪二号は東造出しの北端付近にある。これに加えて留意すべきは、東造出しから桴状の「短棒を持った左手」(腕(二))や桴と目される「先の尖った短棒」(形象ツ)が出土していることである。1972年報告には、前者は「A区の人物二号の横で二片に割れて出土したものに付近から出土した短棒の上半が接合

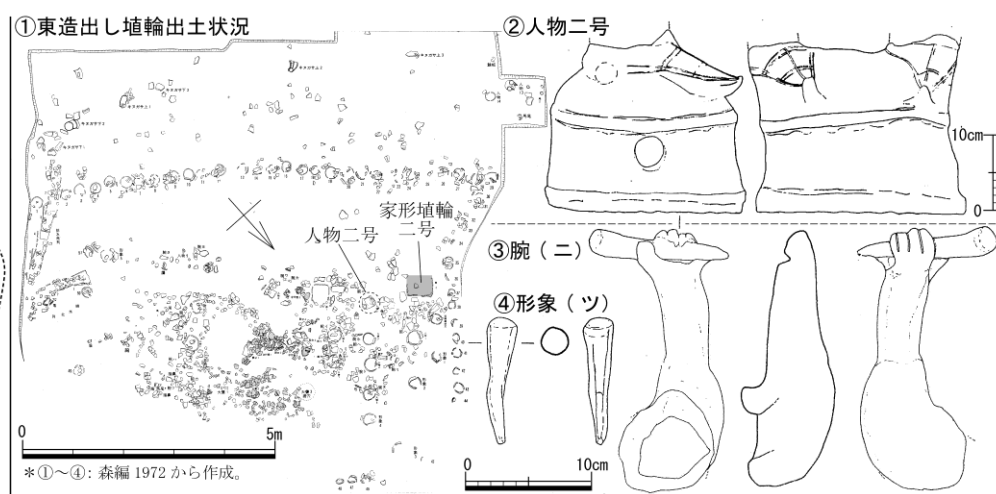
した」(p. 131)とし、後者は「A区人物二号付近で単独に出土した」(p. 283)とする。これらの桴が太鼓に伴うものであり、それらの出土場所からみて、桴を持つ人物の候補として「人物二号」をあげておくのが穏当であろう。ちなみに、先述したとおり、太鼓形埴輪の「鼓面」片(第2図-1)は「家形二号付近」で出土したことが注記から判明しているが、この「人物二号」と「家形二号」との間が約0.7mと比較的近いことも先の想定と矛盾しない。(辻川)

他の事例との比較検討 井辺八幡山古墳から出土した太鼓形埴輪は、倒立成形された樽形の鉾留太鼓である可能性が高い。最後に他事例との比較を行う。今城塚古墳例は、内堤張出部の埴輪祭祀場から出土した。鼓面付近の破片のみで、胴部以下については判然としない。鼓面は無文で平坦に仕上げられ、外縁部分を粘土帯貼付で肥厚させて、皮を表現する。皮の下端に鉾を模した円形の粘土を一定間隔に付加した鉾留太鼓である。胴部片は現状認められないが、周囲で円筒埴輪片が出土することから、下部は円筒基部である可能性が高く、鼓面内面の接合痕などをふまえると正立成形であるとみられる。

百足塚古墳例(樋渡 2015)も、面付近の破片が2点のみで、胴部以下は不明である。鼓面は平坦に仕上げられており、無文の面と文様を施す面がある。無文の鼓面は皮部分も残存しており、段を設けて胴部との境界を明示し、皮下端の方形の粘土による鉾の表現から、鉾留太鼓であることがわかる。報告書では



第3図 太鼓形埴輪推定復元図



第4図 太鼓形埴輪配置推定関連図

同一個体の可能性が想定されており、樽形であると思われる。有文の叩き面が上面とみられるが、外面に木目が残ることから、製作時には下部であった可能性も指摘されており、その場合倒立成形になる。以上のことから、いずれの例も鉾留の置き太鼓単体を表現したものである。ただし、下部の形状と成形手法が異なり、円筒基部で正立成形の今城塚古墳例と、樽形・両面皮で倒立成形の井辺八幡山古墳例と百足塚古墳例に分かれる。より詳細な検討は別稿を用意しているので、そちらを参照されたい（花熊 2022）。井辺八幡山古墳と百足塚古墳は他の埴輪の特徴や埴輪祭祀のあり方から、今城塚古墳の影響下にあるとみられるが、太鼓形埴輪の特徴の差異は今後の課題といえよう。（花熊）

おわりに

以上、本稿では、今城塚古墳での太鼓形埴輪の発見をうけて、井辺八幡山古墳から出土していた不明形象埴輪片を見直した結果、それらを太鼓形埴輪と推定した。このような単体表現の太鼓形埴輪の出土事例は、現状で今城塚古墳例・井辺八幡山古墳例・百足塚古墳例の 3 例である⁽²⁾。これらが限定された特異例なのか、それとも古墳時代後期の埴輪群構成の中に一定の位置を占める器種であるのか、各地の当該期の埴輪事例の再確認が今後必要となろう。さらに、埴輪配置の中で太鼓形埴輪が担う役割の解明についても今後の課題となる。本稿がこれら諸課題を解明するための契機になれば幸いである。（辻川）

〔付記〕本稿の作成にあたり、同志社大学歴史資料館には資料調査をお許しいただき、若林邦彦・浜中邦弘両先生・土屋千春氏にはご高配を賜った。高槻市立今城塚歴史資料館には今城塚古墳出土例の実見をご許可いただいたうえ、内田真雄・今西康宏・森田克行の各氏ならびに整理員の皆様から貴重なご指導を得た。さらに、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館には、本稿のために紙面を提供いただいた。いずれも記して厚く謝意を表するしだいである。

【註】

- (1) 検討会参加者・本稿執筆者は以下の通りである。金澤舞（和歌山県立紀伊風土記の丘資料館）・佐藤純一（和歌山県白浜町教育委員会）・清水邦彦（茨木市立文化財資料館）・辻川哲朗（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）・花熊祐基（龍谷大学大学院博士後期課程）・松田度（奈良県大淀町教育委員会）。
- (2) 高槻市塚原古墳群でも太鼓形埴輪と目される事例が確認されているとのご教示を花熊氏より得た。当該事例については、花熊氏より別稿（花熊 2022）にて報告・検討されるので、詳細はそれに依られたい。

【参考文献】（著者名・機関名五十音順、刊行年順）

- 犬木努（2019）「岩橋千塚古墳群の形象埴輪配置―構造と論理―への接近―」『磨斧作針』六一書房
- 佐藤純一・清水邦彦・関 真一・辻川哲朗・松田 度（2007）「井辺八幡山古墳の再検討―造り出し埴輪群の配置復原を中心に―」『同志社大学歴史資料館報』10、同志社大学歴史資料館
- 高槻市立今城塚古代歴史館（2019）『継体大王と紀氏―今城塚と紀伊の古墳―』
- 武内雅人・藤井幸司（2000）『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』和歌山県教育委員会
- 花熊祐基（2022）「太鼓形埴輪の諸例とその意義―資料紹介を中心に―」『埴輪論叢』11 埴輪検討会
- 樋渡将太郎（2015）『史跡新田原古墳群 百足塚古墳（新田原 58 号墳） 国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備事業にともなう発掘調査報告書 2』新富町教育委員会
- 藤井幸司（2005）「大日山 35 号墳の調査成果」『日本考古学』19 有限責任中間法人日本考古学協会
- 松田 度（2010）「造り出しにみる埴輪配置の構造Ⅱ―和歌山市井辺八幡山古墳の事例から―」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 森浩一編（1972）『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科
- 若松良一（2012）「井辺八幡山古墳の形象埴輪体系とその解釈」『古代学研究』195、古代学研究会
- 和歌山県立紀伊風土記の丘（2008）『岩橋千塚』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘（2011）『大王の埴輪・紀氏の埴輪―今城塚と岩橋千塚―』

紀伊の船形埴輪

—鳴神団地古墳の出土品—

河内 一浩

1. はじめに-鳴神団地古墳の存在

和歌山市岩橋にある国指定特別史跡“岩橋千塚古墳群”の西隣に鳴神団地が位置する。^{註1}昭和 31 年(1956)から始まった団地造成工事中により大量の埴輪^{註2}が出土した。造成工事の土取り中に玄室の残骸が見られたことから、“鳴神団地古墳”^{註3}と称されたが、和歌山県が実施した調査では古墳として断定できないとの結論に達した。^{註4}また、埴輪が包蔵されていた黒色土が窯業遺構の灰原と考えられ、いつしか“鳴神埴輪窯”として認識されることとなった。

ところが、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館が所蔵する山口コレクションを再整理したところ、鳴神団地の造成現場において露頭している円筒列の写真を発見した。さらに、その撮影された円筒形埴輪が現存することを知った。このことから出土した埴輪は窯跡からではなく古墳に伴うことが確実となったのである(河内 2011)。その成果は、“鳴神団地古墳”として平成 24 年(2012)、立正大学で開催された日本考古学協会にて報告した(河内 2012)。しかしながら未だ周知されておらず、船形埴輪の存在も認識されていないのが現状である。そこで、鳴神団地古墳の存在とそこから出土した船形埴輪について記すために起稿した次第である。



図1 鳴神団地古墳位置図(●が古墳)

(1) 鳴神団地古墳の復元

右の埴輪列の写真裏にメモ書きされた地番は、鳴神字坂戸 251 番地で、鳴神団地造成に際し合筆され今は存在



図2 鳴神団地古墳埴輪列

しない。明治 24 年(1891)の地籍図から現在の鳴神 219 番地にあたる^{註5}ことが判明した。

地籍図からは埴輪列が発見された畑の北側には東西の水路があり、その水路の西側では弧を描く畑地の存在が読みとれる。その形状は前方後円形で、水路は墳丘裾に沿って掘削されたと考えられる。前方部の東側には濠状の畑地が見られ、北側は曲線を描く畦畔は前方部にひろがる濠の北端にも見えなくもない。畦畔は後円部側の周濠の曲線と見る。

昭和 28 年(1953)の航空写真からも前方後円墳に見える畦畔が存在する。古墳は標高 12m の丘陵裾の平坦面に築かれている。周濠を備えるために丘陵尾根ではなく平坦地に選地を求めたのであろう。



図3 鳴神団地古墳航空写真(○の中)

(2) 埴輪からみた古墳の築造時期

工事中に採集された埴輪は、4条突帯5段に復元できる円筒形埴輪で、底部高が突帯間隔より高い規格をもつ。復元できた器高が62cmで、下から2段目と4段目に円形のスカシ孔を組違いに配する。外面調整はタテハケのみで終了する。底部調整は認められない。土師質焼成で無黒斑である。以上のことから埴輪の製作時期は、花山6号墳や大谷山22号墳より古く位置付けされ、5世紀中葉末と考えられる。

形象埴輪には人物のほか、馬や犬といった動物形がある(巽1962)。図4は、『熊野路考古』において巽三郎氏が蓋形の立飾りとして紹介されている破片が今回の取り上げる船形埴輪片である。

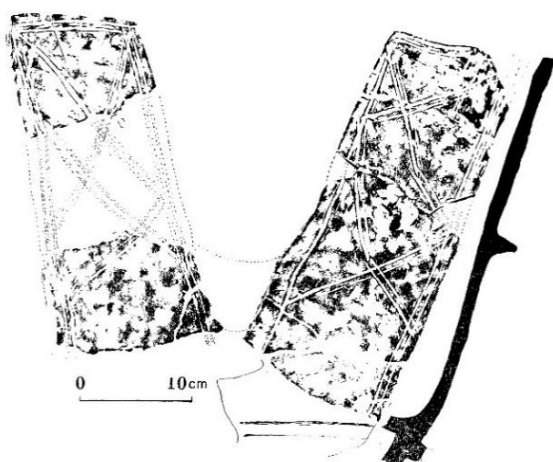


図4 『熊野路考古』記載の蓋形埴輪立飾り

(3) 小結

かつて埴輪窯の灰原と考えられた黒色土は、再検討したところ、周濠の埋土である結論となった。そして出土した埴輪は、墳丘に並べられていたと考えられる。

地籍図・航空写真に見られた畦畔は、周濠の痕跡として残っており、導き出された墳形は前方後円墳と推測に至った。古墳の立地、周濠の存在、量、質的に豊富な形象埴輪から岩橋山塊に前方後円墳の築造が再開される直前の首長墓と位置づけられる。

鳴神団地古墳は、和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に登録されていない。日の目を見ることが少な

い個人が採集された考古遺物を再確認する必要性を痛感した。

2. 船形埴輪の特徴

(1) 破片の認識

船形埴輪と考えられる埴輪は、山口善一氏の採集資料で、巽三郎氏が紹介していることはすでに述べたところである。この破片資料は、平成23年になって紀伊風土記の丘資料館で開催された“大王の埴輪 紀氏の埴輪”で公開された。担当者は疑問視しながらも形状から家形埴輪の千木として紹介している(和歌山県立紀伊風土記の丘資料館2011)。

改めて破片を観察すると、幅14.5cm、残存長45.5cmの長方形の板状を呈し、厚み2cmの法量をもつ。一面には、2本の平行線で縁取り線刻し、その内側に2本の平行線で斜め十字(×状)の文様を上下に2ヶ所に描く。中央よりやや上方に突起を貼り付けている。上端、中央、下端の縁寄りに斜め方向に突いた小孔認められる。反対の面は無文であった。板状の下に突帯が貼り付けられ、その下は緩やかにカーブする。この突帯がフェンダと考えられ、丸味を持つ部分が船底部と解釈している。そして板状部分が



図5 鳴神団地古墳出土船形埴輪

斜め方向に立ち上がる舷側板と判断した。また突帯が貼り付けられた反対の面には板状の粘土板が観察でき、船倉間仕切り板を表現していると考えた。

そのほかに、図5と同じ舷側板と考えられる破片が2点存在する。図4左の破片がそれで、図5と同様の長方形の板状を呈するが、中央部分が欠損する。残存する破片からほぼ同じ法量を持つことが推測できる。2本の平行線で縁取ることやその内側に斜め十字状に線刻することも同じである。突起部分や突帯を貼り付ける部分は欠損しており不明である。

以上の観察から、鳴神団地古墳から出土した板状の破片は、図6に示した一体成形埴輪の舷側板部分と判断する。

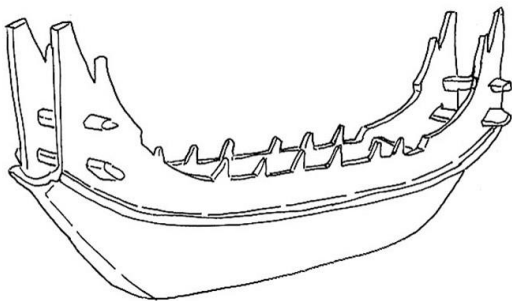


図6 船形埴輪復元図(一体成形船)

3. まとめにかえて

これまで蓋形埴輪の立飾りや家形埴輪の千木と考えられた破片について検討した結果、一体成形の船形埴輪の舷側板と結論付けた。和歌山県において船形埴輪の出土は初めてで、その出土地はかつて鳴神団地古墳と称されたところである。

すでに俎上に載せた山口善一氏の資料より、工事現場で撮影した埴輪列の存在が古墳であることの証明となり、地籍図や航空写真などを検討した結果、前方後円墳の可能性が考えられる。

岩橋千塚古墳群との関連性や船形埴輪を持つ古墳の被葬者についての考察は今後の課題としたい。

【註】

- 1 和歌山市内で最も古く造成が始まった。造成時期は1961年から1969年である。
- 2 巽三郎氏の観察による(巽 1962)
- 3 宮田啓二氏が私信の中で提唱している。

4 田中敬忠氏が調査を実施している。

5 平成23年9月5日に和歌山地方法務局で地籍図閲覧を実施している。

【参考文献】

- 河内一浩 2011 「和歌山市・鳴神埴輪窯の再検討・紀伊の後期円筒埴輪」『堀田啓一先生喜寿記念献呈論文集』堀田啓一先生喜寿記念献呈論文集作成委員会
- 河内一浩 2012 「紀伊・鳴神団地古墳の再検討・山口コレクションの埴輪整理から」『日本考古学協会大 78 回総会研究発表資料集』一般財団法人日本考古学協会
- 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 2011 『大王の埴輪 紀伊の埴輪・今城塚と岩橋千塚』(和歌山県立紀伊風土記の丘開館 40 周年記念特別展図録)
- 巽 三郎 1962 「和歌山県下の形象埴輪に就いて(其の二)」『熊野路考古』2 南紀考古同好会

岩橋千塚古墳群から出土した耳環の蛍光 X 線分析について

金澤 舞

1. はじめに

耳環は、古墳時代後期になると、広く日本列島各地に普及する副葬品の一つである。岩橋千塚古墳群においても古墳時代後期より出土がみられ、伝岩橋千塚古墳群出土資料も含めると、現在総数 71 点の耳環⁽¹⁾が確認されている。筆者は以前、和歌山大学が所蔵する伝岩橋千塚古墳群出土の耳環の検討を行った際、岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環の集成を行い、その法量や材質から時期的な傾向などについてまとめた（石丸ほか 2021：以下、「前稿」という）。しかし、前稿では耳環の材質判断は肉眼観察によるものであったため、科学的な根拠を持ちえたものではなかった。また、表面素材の色調が白色を呈した金色の耳環については、銀環とするか金環とするか判断がつかなかった。そのため、本稿では、耳環の表面素材について⁽²⁾非破壊蛍光 X 線分析法を用いて材質を明確にし、前稿を補完することを目的とした。

2. 調査対象と調査方法

(1) 調査対象

今回分析対象としたのは、岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環 13 点である。腐食が激しいなど耳環表面の金属素材の残存状況が不良なものや、芯材である銅が錆でもろく崩壊の危険があるものなどは分析対象から除外した。

(2) 分析方法

分析にあたっては、和歌山県工業技術センターの協力を得て、非破壊の蛍光 X 線分析法で実施した⁽³⁾。蛍光 X 線分析法は、資料に X 線を照射し発生する蛍光 X 線のエネルギーと数を測定することで、元素の組成及び濃度を分析するものである。こうした分析の特性上、表面金属の錆や腐食による元素の移動や分析箇所の偏りなどにより、本来の元素組成を正確に測定することが難しい場合がある。そのため、本

稿では分析対象資料の錆や腐食部分は避け、可能な限り複数箇所の測定を行った。

分析に用いた装置は、島津エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 EDX-800HS で、分析条件は測定時間：60 秒、雰囲気：大気、X 線管電圧：15kv または 50kv、管電流：100 μ A、測定面積：1 または 3mm ϕ である。

3. 分析結果

各耳環の蛍光 X 線分析の結果は、表 1・2 にまとめた。分析を通して確認できた主要な金属元素は、金 (Au)、銀 (Ag)、銅 (Cu) で、その他水銀 (Hg)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、トリウム (Th)、クロム (Cr)、カルシウム (Ca)、硫黄 (S)、臭素 (Br)、タングステン (W)、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、チタン (Ti) が検出された。

今回の分析の結果、これら金属元素の組成と耳環表面素材の色調との間に、一定の相関性が認められるものがあつた。また、一部の耳環では水銀が検出され、製作技法が推測できるなど、新たな知見を得ることができた。

(1) 色調と材質

岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環の表面は、肉眼観察から①金色を呈し金が主な金属元素とみられるもの、②銀色を呈し銀が主な金属元素とみられるもの、③やや白色の金色を呈し主な金属元素が不明確なもの大きく 3 つに分けることができる。今回の対象資料では、①が表 1-1・2・4・5・8、表 2-10・11、②が表 1-3・6・7、表 2-9、③が表 2-12・13 にあたる。

分析の結果、①には表 1-1・2・8、表 2-11 にみられるように、金属元素の組成で金が 81~92%と高い割合を占めるものと、表 1-4・5 のように金 51~55%、銀 42~46%と前者に比べ銀の割合が高く検出されているものがある。この結果を受け、両者を並べ置いて再度目視による観察を行ったが、前者に

比べ後者の色調がややくすんで見える程度で、明確な判別が困難であった。したがって、表 1-4・5 のような金属元素の組成の差は、視覚的な効果を意図したものではなく、素材の取り扱いを容易にするためや強度の向上など他の背景を想定すべきであろう。今後、分析資料を増やしたうえで検討していくべき課題である。なお、表 2-10 では、金だけでなく銅も高い割合で検出されている。これは、耳環表面素材の正確な金属元素の組成を示す可能性もあるが、表面素材が所々剥離し芯材の銅が露出していることに鑑みれば、銅は芯材に由来する金属元素である可能性が高い。

②は、銀が 91~98%と高い割合で検出され、目視での材質判断と一致する結果となった。

③は、主な金属元素として金、銀、銅が検出されている。このうち、全体に占める割合が最も大きいのは銀で 62~93%、次いで金が 12~22%であり、続いて銅が 3~18%である。銅の割合が比較的高いものがあるが、表 2-12・13 とともに芯材に使用された金属であることから、表 2-10 と同様、分析に一定影響を与えた可能性が考えられる。金と銀の割合については、表 2-13 の一ヶ所の分析値を除き、およそ銀 70%、金 10~20%である。このうち金は、表面素材に含まれると考えるほか、表 2-12・13 とともに表面素材が大きく剥離していることから、鍍金など表面素材と銅芯材間の金属元素を示す可能性も想定される。しかし、表 2-12・13 を観察したところ、これら耳環は銅芯に直接表面素材を張り付け製作されたものと判断されることから、表 1-12・13 の表面素材は、銀に金を少量含む合金である可能性が高いと考えられる⁽⁴⁾。

(2) 製作技法と金属元素

今回の非破壊蛍光 X 線分析法により、表 2-12・13 では主な金属元素である金・銀・銅のほか、水銀が検出された。これは、表面素材に由来するものではなく、水銀を用いたアマルガム法⁽⁵⁾によって銅芯に銀箔の貼り付けが行われた可能性を示すものと考えられている（竹井・藤沢 2021 ほか）。

表 1-6 では、検出された金属元素のうち、鉄が 2%と他の耳環に比べやや高い割合で検出された。これ

は、耳環の芯材が鉄である可能性を示すと考えられる。また、表 1-6 の耳環を目視により観察すると、表面素材の微細な隙間から鉄錆ぶくれ状のものが一部表面に噴き出した状況が確認できる。したがって、鉄を芯材とし、表面素材として銀を張った鉄芯銀張と推測される。

4. おわりに

本稿では、岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環の非破壊蛍光 X 線分析を行い、前稿の肉眼による材質判断の補完と素材が不明確な資料の材質確認を行った。最後に、この分析により得られた主要な成果についてまとめておきたい。

- ・耳環の表面素材が金色を呈すものには、金属元素の組成で金が 81~92%と高い割合を占めるものと、金 51~55%、銀 42~46%と金の割合が高いが銀の割合も高く検出されているものが存在する。こうした差異は目視で判別することが難しいことから、視覚的な効果を意図したものではなく、素材の取り扱いを容易にするためや強度の向上など他の要因が想定される。
- ・耳環の表面素材が銀色を呈したものは、銀が 91~98%と高い割合で検出され、目視での材質判断と一致した。
- ・耳環の表面素材がやや白色の金色を呈するものは、金属元素の構成が銀 62~93%、次いで金 12~22%と、銀を主体としつつも、金を少量含むことが判明し、金銀の合金である可能性が高い。
- ・表 1-12・13 では、金、銀、銅のほか水銀が検出されており、水銀を用いたアマルガム法によって銅芯に銀箔の貼り付けが行われた可能性がある。
- ・表 1-6 は、鉄が 2%と他の耳環より割合が大きく、かつ目視においても鉄錆とみられる表出物が確認できることから、鉄芯銀張りの耳環であると考えられる。

【註】

- 1 前稿（石丸ほか 2021）では、岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環の総数は 66 点と報告した。しかし、その後新たな採集品の銀環 2 点（表 1-12・13）が確認されたことや県立考古民俗博物館（仮称）建設に伴う確

認調査発掘調査により銀環 3 点が出土した（和歌山県立紀伊風土記の丘 2022）ことにより、数量が増加した。こうした新たな資料を含め改めて岩橋千塚古墳群の耳環を検討すると、銀環については前山 B 地区の古墳にやや偏って出土している状況がみてとれ、地区により耳環の材質が異なる可能性がある。今後、資料のさらなる増加を待って検討していく必要がある。

- 2 耳環の芯材については、表面素材が剥離するなど分析可能な資料全てで緑色の銅錆が観察され、材質の主な金属元素が銅である確実性が高いと判断し、今回は蛍光 X 線分析の対象とはしなかった。
- 3 和歌山県工業技術センターでは、金属無機材料担当時枝健太郎主任研究員（部長補佐）に分析機器の使用についてご協力いただいた。また、分析方法や分析結果についても様々なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。
- 4 この資料のほか、岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳環のうち、同様の色調をもつものには和歌山大学紀州経済史文化史研究所が所蔵する耳環 2 点がある（石丸ほか 2021 の図 7-1・2）。これらも、表 2-12・13 と同様に、金属元素の組成をもつ可能性が高い。
- 5 水銀アマルガム法とは、水銀に他の金や銀などの金属を混ぜ合わせて溶かし込み取り扱いやすくし、それを金属などの表面に塗った後、熱によって水銀を蒸発させ溶かし込んだ金属を残す方法である。

【参考文献】

- 石丸彩ほか 2021 「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について（2）—銅鏡及び耳環、玉、陶質土器—」『紀州経済史文化史研究所紀要』第 42 巻 和歌山大学紀州経済史文化史研究所
- 瀬谷今日子 2016 「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代—紀ノ川 流域の古墳文化—』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 竹井良・藤澤明 2021 「山梨県指定文化財稲荷塚古墳出土耳環の製作技法と材料産地推定」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 20 集 帝京大学文化財研究所
- 仲原知之 2014 「前山 B36 号墳の検討—ピロティ移築古墳の調査概要と出土遺物—」『紀伊 風土記の丘研究紀要』第 2 号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 和歌山県教育委員会 1967 『昭和 41 年度埋蔵文化財緊急発

掘調査概報』

- 和歌山県教育委員会 2019 『特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 1976 『紀伊風土記の丘年報』第 3 号
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2022 『岩橋千塚古墳群（前山 B 地区）現地説明会（古墳公開）資料 岩橋千塚古墳群で新たに有力者の古墳を発見！ —県立考古民俗博物館（仮称）建設に伴う確認調査 —』

表1 岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳輪の蛍光X線分析結果一覧①

番号	遺跡/出土地名	墳形/規模(m)	埋葬施設	種別	時期	法量(重量はg、その他はcm)					中実/中空	表面材質(%)					参考文献
						長	幅	縦厚	横厚	重量		金(Au)	銀(Ag)	銅(Cu)	水銀(Hg)	その他	
1	井辺前山6号墳	前方後円/49	横穴式石室	金環	6世紀前半	1.55	1.5	0.28	0.26	3.51	中実	82.3	15.4			ルビジウム(Rb):1.1、トリウム(Th):0.3、クロム(Cr):0.3、鉄(Fe):0.5	和歌山県教委 1967
				銅芯金張	6世紀前半	2.62	2.82	0.49	0.5	10.92	中実	81	15.2	1.5		ルビジウム(Rb):1.4、クロム(Cr):0.3、鉄(Fe):0.6	
2												79.7	158	1.6		ルビジウム(Rb):1.3、カルシウム(Ca):0.8、クロム(Cr):0.3、鉄(Fe):0.5	
3	前山B36号墳	不明	横穴式石室	銅芯銀金張 銀張か	6世紀後半	2.45	2.6	0.25	0.25	5.95	中実		96.4	1.9		鉄(Fe):0.6、硫黄(S):1.1	仲原 2014
4	伝岩橋千塚古墳群(前山B36号墳か)	不明	不明	銅芯金張	6世紀後半か	2.69	2.92	0.65	0.55	29.94	中実	54.3	42.6	2.4		クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):0.5	仲原 2014
																クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):0.4	
5		不明	不明	銅芯金張	6世紀後半か	2.65	2.94	0.65	0.53	30.02	中実	53.8	43.5	1.4		カルシウム(Ca):0.7、クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):0.5	仲原 2014
																カルシウム(Ca):0.6、クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):0.5	
6	前山B101号墳(K-3号墳)	円/12	横穴式石室	鉄芯銀張か	6世紀後葉	1.55	1.75	0.15	0.2	1.16	中実		96.7			臭素(Br):0.6、硫黄(S):0.6、鉄(Fe):2	風土記 1976
																タンダステン(W):0.2、臭素(Br):0.3、硫黄(S):0.7、鉄(Fe):0.7	
7				銀環	6世紀後葉	1.75	1.75	0.2	0.2	1.6	中実	0.2	91.9	0.4		硫黄(S):0.6、鉄(Fe):0.6	風土記 1976
8	前山A87号墳	円/10	横穴式石室	金環	6世紀後葉～	1.8	1.8	0.5	0.4	2.65	中空	88.8	1.3	5		ルビジウム(Rb):1.4、カルシウム(Ca):1、クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):2.2	和歌山県教委 2019
																ルビジウム(Rb):1.4、ケイ素(Si):4、クロム(Cr):0.3、鉄(Fe):0.4	
												87.8	1.2	5		ルビジウム(Rb):1.3、カリウム(K):1.7、チタン(Ti):0.4、カルシウム(Ca):3.4、クロム(Cr):0.2、鉄(Fe):4.7	

表2 岩橋千塚古墳群から出土したとされる耳輪の蛍光X線分析結果一覧②

番号	遺跡/出土地名	墳形/規模 (m)	埋葬施設	種別	時期	法量（重量はg、その他はcm）				中実/ 中空	表面材質（％）				参考文献	
						長	幅	縦厚	横厚		重量	金 (Au)	銀 (Ag)	銅 (Cu)		水銀 (Hg)
9	前山B223号墳 (花木園東部土区 K2号墳)	不明	横穴式 石室	銅芯銀張	6世紀	2.62	2.92	0.56	0.53	10.66	2.7	93.3	2.4		ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.2、クロム(Cr):0.2、硫黄 (S):0.3、鉄(Fe):0.8	風土記 1976
											3	91.9	3.94		ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.1、硫黄(S):0.3、鉄(Fe):0.7	
											2.3	96	0.9		ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.1、硫黄(S):0.4、クロム (Cr):0.3	
10	前山A地区			銅芯金張		1.7	1.95	0.45	0.6	7.26	76.2	0.4	17.7		ケイ素(Si):4、カリウム(K):1 タンタスチウム(W):0.7	
											58.3		40		ルビジウム(Rb):1、タンタスチウム (W):0.8	
											58.3		36.4		ルビジウム(Rb):0.8、ケイ素(Si):3.1、 カリウム(K):0.7、タンタスチウム(W):0.7	
11	伝岩橋千塚古墳 群			銅芯金張		2.75	3.08	0.9	0.73	29.57	89.8	5	2.5		ルビジウム(Rb):1.2、カルシウム (Ca):0.6、クロム(Cr):0.3、鉄(Fe):0.7	
											90	5.2	2.8		ルビジウム(Rb):1.2、クロム (Cr):0.3、鉄(Fe):0.6	
											92.1	5.1	2.4		クロム(Cr):0.3	
12	伝岩橋千塚古墳 群			銅芯銀張		2.98	3.3	0.82	0.8	中実	22.4	62.5	12	2.1	ルビジウム(Rb):0.2、タンタスチウム (W):0.2、臭素(Br):0.4、ヒ素(As):0.2	
											13.3	68.7	15.7	1.4	ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.1、臭素(Br):0.3、ヒ素(As):0.4	
											17	62.3	15.2	1.7	ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.2、臭素(Br):0.4、ヒ素 (As):0.9、硫黄(S):2.4、鉄(Fe):0.1	
13	伝岩橋千塚古墳 群			銅芯銀張		2.57	30.1	0.57	0.73	中実	12.6	71.3	8.3	3.8	ルビジウム(Rb):0.1、タンタスチウム (W):0.1、硫黄(S):3.6、鉄(Fe):0.2	
											17	70.8	3.1	6.1	ルビジウム(Rb):0.1、ケイ素 (Si):2.3、鉄(Fe):0.5	
											0.2	93.3	2.7	0.4	タンタスチウム(W):0.3、硫黄 (S):2.2、鉄(Fe):0.9	



※番号は表 1 の番号と対応する。

写真 本稿で蛍光 X 線分析の対象とした耳環

天王塚古墳横穴式石室出土の雲母片について

瀬谷 今日子

1. 天王塚古墳の概要と横穴式石室の調査履歴

天王塚古墳は、和歌山市東部の岩橋丘陵上に築造された岩橋千塚古墳群の6世紀中葉の首長墓である。墳長88mの和歌山県内最大級の前方後円墳で、後円部中央には玄室高5.9m、2枚の石棚と8本の石梁を持つ壮大な岩橋型横穴式石室を持つ。

横穴式石室は、明治39年(1906)に東京帝国大学人類学教室の大野雲外による調査にはじまり、昭和39年(1967)には和歌山市の委託を受けた関西大学による本格的な調査が行われ、石室内から金銅製飾り金具、玉類、馬具、小札、鉄鏃、装飾付須恵器、土師器が出土した。(関西大学1906)さらに、和歌山県教育委員会による平成29年(2017)及び30年(2018)の発掘調査では、横穴式石室の再発掘調査を行い、この際、玄室内に堆積した土をすべて篩にかけたところ、5000点を超える玉類(ガラス製小玉・粟玉、銀製空玉、メノウ製切子玉、琥珀製棗玉、滑石製白玉、トンボ玉)のほか、魚形歩揺や金銅製三角板飾り金具、須恵器、土師器、新羅系土器、鉄鏃、小札、胡籙金具、馬具等が新たに確認された。

(和歌山県教育委員会2020)

本稿では、報告書刊行後の見直し作業の際、あらたに横穴式石室玄室内堆積土の中に雲母片を確認したため、その報告及び検討を行うものである。

2. 天王塚古墳出土の雲母片

玄室内堆積土内から出土した雲母片は6点で、各破片の法量は以下のとおりである。

1. 1.5cm×1.1cm、厚さ0.4cm。奥壁付近(NE11)排水溝埋土出土。2. 1.2cm×0.8cm、厚さ0.77cm。前壁付近(SW13)出土。3. 0.7×0.5cm、厚さ0.2cm。前壁付近(SW14)出土。4. 0.6cm×0.7cm、厚さ0.11cm。前壁付近(SW13)出土。5. 0.4cm×0.3cm、厚さ0.24cm。前壁付近(SW3)排水溝埋土出土。6. 0.4cm×0.3cm、厚さ0.14cm。前壁付近(SW3)排水溝出土。

いずれも、外形が欠損しているため不整形な形状で、穿孔や金箔貼り及び付着物は確認できない。

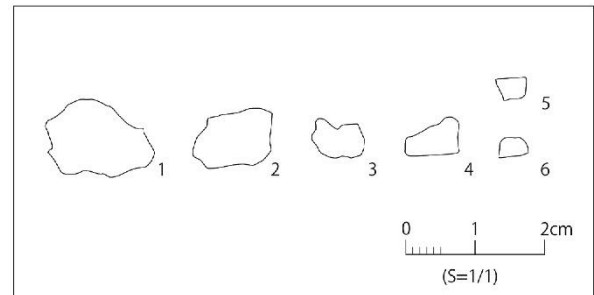


図1 天王塚古墳玄室内出土雲母片



写真1 天王塚古墳玄室出土雲母片

3. 天王塚古墳における雲母片出土の意義

(1) 日本列島における古墳時代の雲母片の出土事例

古墳時代における雲母片の出土事例は、日本列島では、奈良県珠城山1号墳・3号墳や奈良県星塚2号墳、奈良県ウテビ山2号墳、奈良県阪原阪戸遺跡、奈良県飛鳥寺塔心礎出土品、大阪府湯山古墳、大阪府妻鳥陵墓参考地、京都府黒土1号墳、滋賀県和田1号墳及び11号墳、滋賀県甲山古墳、岐阜県船木山古墳群G支群29号墳・K支群103号墳・M支群145号墳、群馬県井出二子山古墳、茨城県風返稲荷山古墳等で報告されている。

その多くが横穴式石室を埋葬施設にもつ後期古墳で、井出二子山古墳では有孔滴水形雲母装飾品が出土しているほか、珠城山1号墳・3号墳や和田山1号墳・11号墳横では石棺内や玄室床面に雲母がまか

れたような状況で出土したことが報告されている。^{註1}
また、祭祀遺跡である阪原阪戸遺跡では遺構から滑石製玉と共に雲母片が出土し、飛鳥寺塔心礎からは玉類（勾玉・トンボ玉・ガラス玉・金環・水晶製切子玉・銀製空玉）や金銅板、様子、不明弯曲鉄器などとともに出土している。

古代東アジアでは、葬送の際に雲母が用いられた事例があり、特に新羅では皇南大塚南墳・北墳、天馬塚、金鈴塚、飾履塚などにおいて、雲母が木棺内に散布された状況や冠の下から見つかっている。このことから、5世紀から6世紀に、新羅の王や王族を中心に埋葬儀礼や葬送儀礼の過程で、木棺を安置する前後に雲母が使用されたことが指摘されている。

（門田 2006）墓室における雲母片の使用は、中国で漢代以降に事例がみられる。雲母は、道教や神仙思想において仙薬の一つとされ、軽身や不老長生、遺骸の保全という効果があったと考えられてきたようである。日本列島における雲母片の使用は、中国での雲母に対する道教における認識が、新羅において変容された後に、移入されたものである可能性が指摘されている。（門田 2006）

（2）岩橋千塚古墳群における新羅系土器の出土

日本列島の横穴式石室における雲母の使用を、新羅との関係の中で考えるうえで興味深いのが、雲母出土古墳における新羅系遺物の出土である。^{註2}

岩橋千塚古墳群では、天王塚古墳と同時期の6世紀中葉に築造された前山A46号墳の墳丘上から新羅系の有蓋高坏が4個体分出土している。これが蓋坏又は高坏を4個又は2個という定数で埋納する新羅における使用方法と共通することから、前山A46号墳では渡来系の人物が葬送儀礼に関与した可能性が指摘されている。（定森 2005）

天王塚古墳においても玄室内堆積土から新羅系土器の破片が出土し、土器は断面が中空の口縁部に小型の椀が取りつき、杯部に約2cm間隔の連続した方形透孔を持つ特徴から、図2のような子持高坏であったと想定される。（和歌山県教育委員会 2020）同様の形状をした器種は国内に類例はなく、新羅の金鈴塚古墳や徳泉里古墳群出土品と類似する。

金鈴塚古墳では、石積木槨内の木棺内に雲母片が散布されたような状態で出土しており、天王塚古墳

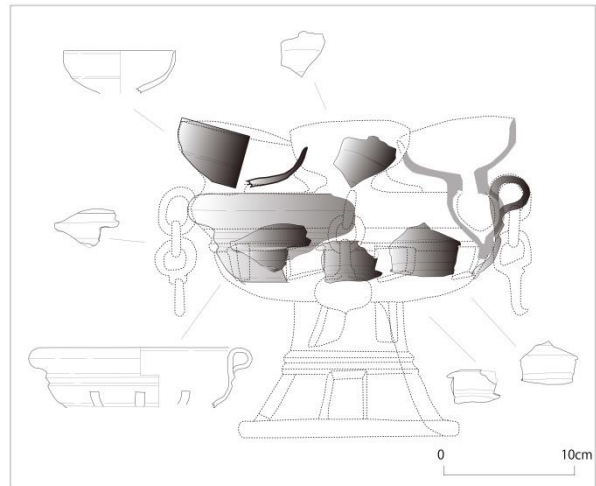


図2 天王塚古墳玄室内出土新羅系土器（子持高坏）
（和歌山県教育委員会 2020）

においても同様の雲母の使用を想定するならば、6世紀中葉頃において、岩橋千塚古墳群では、新羅とのつながりの中で、器物のみならず葬送儀礼や思想においても強い影響を受けていた可能性を想定することができる。

【註】

1. 天王塚古墳出土の雲母片の形状や出土状況からは、雲母片が装飾品の一部であったのか、玄室内にまかれたか等については判断できない。
2. 妻鳥陵墓参考地からは、新羅からの移入品と考えられる母子大刀（三葉形環頭大刀）が出土している。（清喜・土屋 2021）

【参考文献】

- 石橋茂登 2021「飛鳥寺塔心礎出土の雲母」『奈良文化財研究紀要』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
門田誠一 2006「古墳出土の雲母片に関する基礎考察—東アジアにおける相関的理解と道教思想の残映—」『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社
関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』
清喜裕二・土屋隆史 2021「令和元年度陵墓関係調査報告 妻鳥陵墓参考地駒形制札改修工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第72号 宮内庁書陵部
定森秀夫 2005「岩橋前山A46号墳出土の新羅系陶質土器」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会
和歌山県教育委員会 2020『特別史跡岩橋千塚古墳群 - 天王塚古墳 2次・3次発掘調査報告書 - 』

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』

—大谷山地区編—

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加

1. はじめに

和歌山県の郷土史家である宮田啓二氏が著した『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』（以下、「当資料」という。）は、昭和 26 ～ 29 年（1951 ～ 1954）やそれ以前の岩橋千塚古墳群などの状況を知ることができる大変貴重な資料である。そのため、令和 2 年度より有志で当資料の書き起こしを進めている。令和 2 年度は、岩橋千塚古墳群花山地区についての記載内容の書き起こし及び現在の古墳との対照作業を行い、成果を公表した（石丸ほか 2021）。

今年度は、岩橋千塚古墳群大谷山地区について記載された範囲を対象とし、当資料の 1 ～ 24、97 ～ 101、120・121、146 ～ 149 頁^{註1}の書き起こしを行った。なお、本稿の編集は金澤が行った。

書き起こしは、およそ各頁数ごとに分けて掲載し、旧字やくずし字^{註2}、誤字もすべて原文のままとした。文字が判別できないものは『□』と表記し、補

足が必要と思われる箇所には、注記《* 》を付記している。

また、当資料に記載されている古墳番号は、現在把握されている岩橋千塚古墳群大谷山地区の古墳番号（和歌山県教育委員会 20019）と異なっている。さらに、当資料の古墳記載番号も 2 ～ 24 頁に記載されている内容と一致する 1 頁の古墳分布地図（以下、「分布図 A」と呼称する。）と 97 ～ 101、146 ～ 149 頁に記載されている内容と一致する 97・98 頁間の古墳分布地図（以下、「分布図 B」と呼称する。）があり、同一古墳でもどちらの分布図をもとに記載されたかで、記述番号が異なる^{註3}。そのため、混乱を避けるために、先に現在の大谷山地区の古墳番号と当資料での古墳番号との対応を示しておきたい（表 1）。ただし、すべての対応をとることは難しかったため、確定的でないものについては？を付記している。



※古墳に付された番号が古墳番号

図 1 岩橋千塚古墳群大谷山地区の古墳分布図（和歌山県教育委員会 2019 に加筆）

表1 大谷山地区の古墳対応関係

当資料番号		現古墳番号	当資料記載概要	備考
分布図 A	分布図 B			
1	8 9	大谷山22号墳	前方後円墳。ヒョータン形。東西主軸。円筒埴輪片採集。横穴式石室あり。石室床面河原石。石梁三本あり。	「石梁三本」は石梁1本と石柵2枚をさすとみられる。
2	7	大谷山1号墳	分布図A-1(B-8)号墳≪*大谷山22号墳≫の北斜面下に位置。	
3	6?	大谷山2号墳	分布図A-1(B-8)号墳≪*大谷山22号墳≫の北斜面下に位置。深さ50～60cm、3m径の凹みあり。一度目の調査時点では石柵あり。	
4	5?	大谷山3号墳	径6～8mの円墳。横穴式石室あり。東西主軸。厚さ0.2cm、幅0.87mの天井石と石柵あり。石室床面川原石。	
5	4	大谷山4号墳	径10mの円墳。分布図A-4号墳≪*大谷山3号墳≫の東北下稜線上に斜めに並んで存在。横穴式石室あり。玄室長1.9m、幅1.6m。羨道に長さ1.2m、幅0.7mの石材あり、羨門の扉石か。	
6	3	大谷山5号墳	径10mの円墳。横穴式石室あり。石組最も整正。玄室長2.1m、幅1.7m。奥壁及び前壁はほぼ垂直。	
7	2	大谷山6号墳	横穴式石室あり。石室内中央部にA・Bの隔壁石積あり。	A・Bの隔壁石積は後世に積まれた可能性がある(和歌山県教育委員会2017)
8	1	不明	A-7(B2)号墳下柿畑との中間稜線上にあると思われる。径3mの凹みを残す。石を4、5個露出。	
9	10	大谷山21号墳	直径約10mの円墳。北東・南西主軸。石柵の規模:長径1.68m、短径66cmの小児墳。蓋石1枚あり。	堅穴式石室とみられる。
10	11 12	大谷山20号墳	前方後円墳。頂上墳を模して構築された。積石は転用されたため、凹みを残すのみ。	
?	—	—		
—	13	—	古墳の存否不明。石柵残存しない。	
—	14	—	未発? 石柵残存しない。	
11	15	大谷山26号墳	石積なし。長径2m、短径1.5m、深さ1.50m。	当資料記載の規模は凹みの規模か。
12	16	大谷山27号墳	石積なし。長径8.8m、短径1.60m。	当資料記載の規模は凹みの規模か。
13	17	大谷山28号墳	石積なし。長径2.30、短径1.50m、深さ1.5m。	当資料記載の規模は凹みの規模か。
—	18?	大谷山39号墳	現在畑地であるが、古墳が存在したと思われる痕跡あり。	
14	18	大谷山16号墳		
15	19	大谷山17号墳	径8mの円墳。高さ3m。凹み長さ4m、幅1.2m、深さ2m。	
16	20	大谷山38号墳	径6mの円墳。第2稜1号墳≪*分布図A-9号墳(大谷山21号墳)≫に類似。凹み長さ3m、幅0.3m、深さ0.8m。	
17	21	大谷山15号墳	径6mの円墳。高さ2～3m。墳頂に径1m、深さ30cmの凹みあり。未盗掘。	
18	22	大谷山13号墳	径8mの円墳。凹み長さ2.7m、幅1.5m、深さ1m。主軸北東・南西。石積みなし。	
19	23	大谷山14号墳	径6m、高さ0.7mの円墳。横穴式石室あり。奥壁及び側壁北側残存。東に羨道か。	
?	24	大谷山12号墳	径約10mの円墳。長径5m、幅2m、深さ1.2mの凹みあり。石組なし。付近畑地、石垣に転用か。	

2. 宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群
調』書き起こし

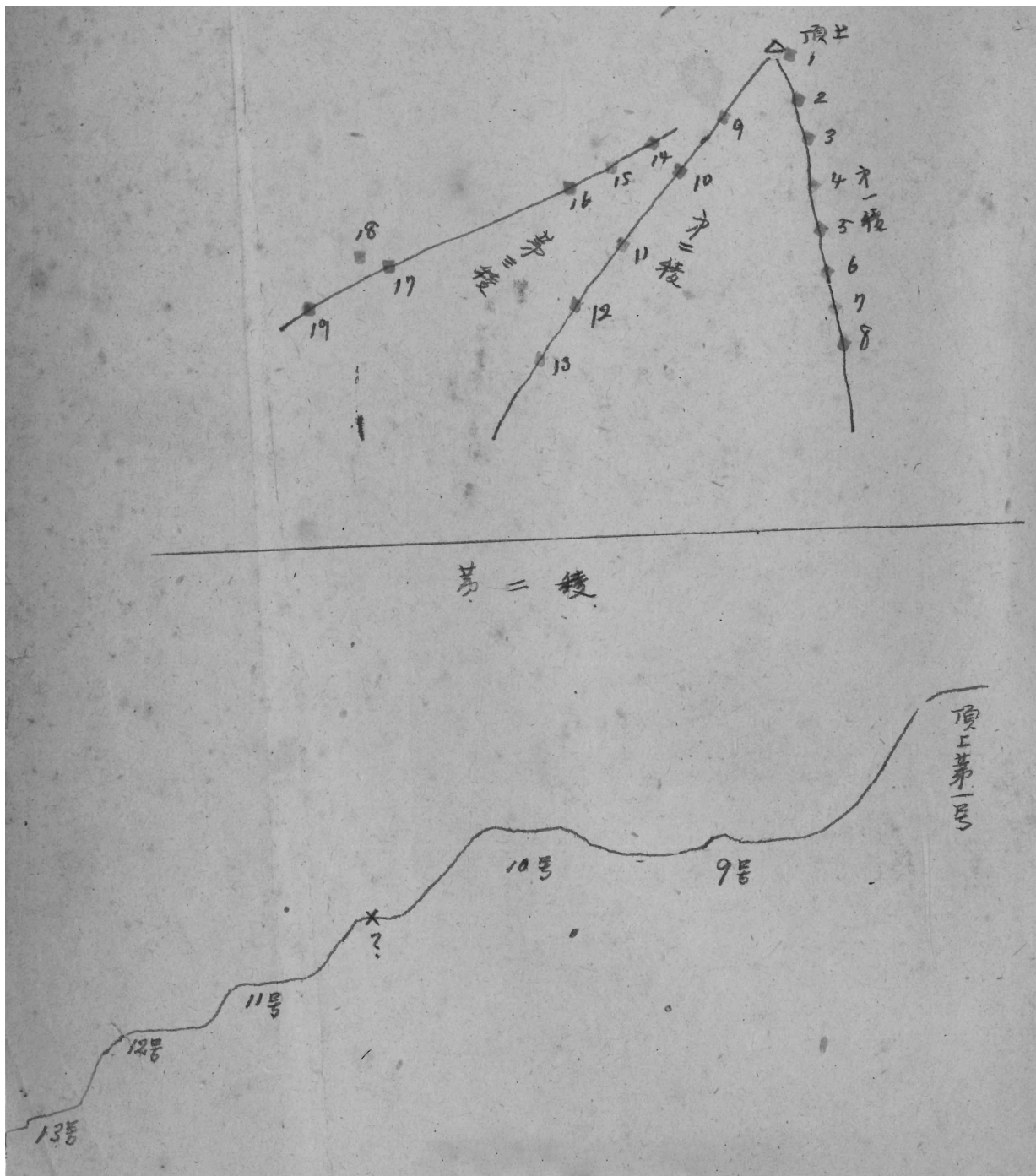
【1 頁】

大目北嶺（御殿山）図



【2頁】

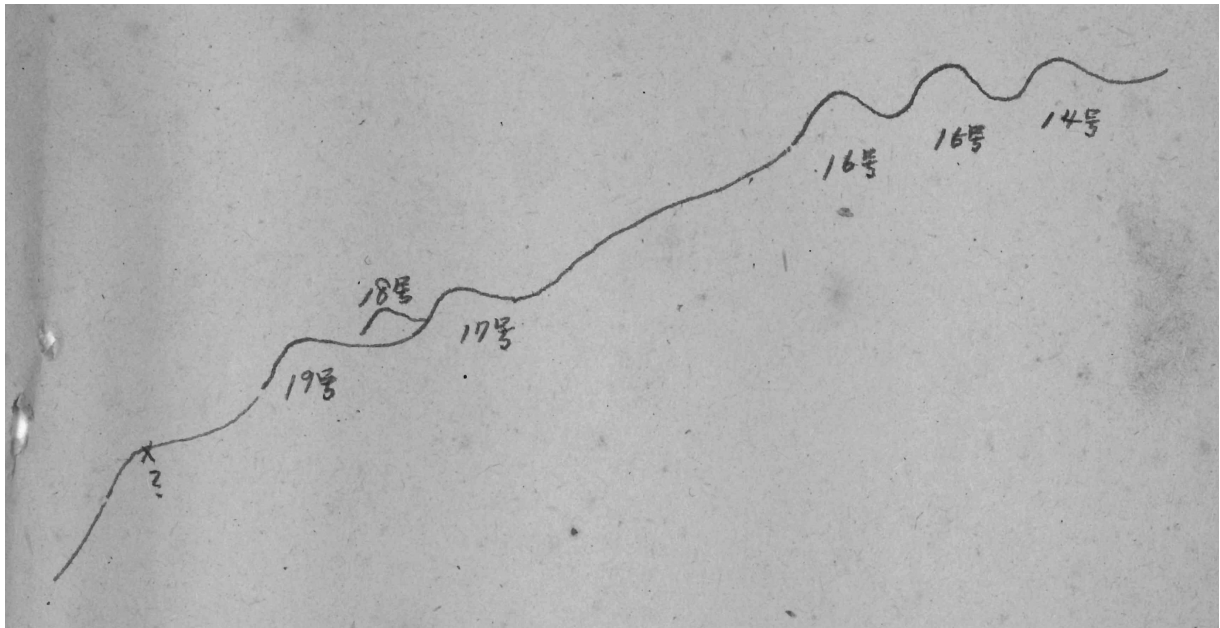
第Ⅰ稜～第Ⅲ稜古墳配置図



10号墳《*大谷山20号墳》以下は殆んど同様階段状をなし 13号墳《*大谷山28号墳》に至り北斜急傾斜をなし、畑地となる 稜角をつくり平地に下る。

現存 計6墳 存否不明1墳 下稜角1墳 計2墳。

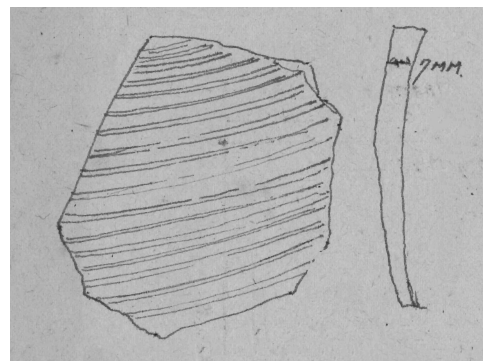
【3頁】



大日北嶺古墳ある三稜中 東南に當るものである。第Ⅱ稜よりこの稜に至るには 12 号《*大谷山 27 号墳》下より山腹を南に回れば山逕がついて 第Ⅲ稜 14 号墳《*大谷山 16 号墳》に達することができる。14 号《*大谷山 16 号墳》— 16《*大谷山 38 号墳》は三墳連続して等間隔に布置し 少々離れて稜線下方に 17 号墳《*大谷山 15 号墳》があり 稜線より離れて少々南下に 18 号《*大谷山 13 号墳》稜線に 19 号《*大谷山 13 号墳》あり その東斜面下に稜角をなす点は古墳か否か不明である。17 号《*大谷山 15 号墳》18 号《*大谷山 13 号墳》南斜面下は只今荒蕪の畑地になつてをり 18 号墳《*大谷山 13 号墳》のみ左右両壁共半分 奥壁を残存するのみで、遺構の完存するのではないのは、石垣に転用されたものである。18 号墳《*大谷山 13 号墳》を除く外すべて 稜線上に存在し

計 6 墳 現存 不明稜角 1 墳及び東稜脚畑地
となつている地点の存否不明。

井邊と鳴神貝塚の中間山寄の道を両嶺中間にとり登る途中、両山脚の抱く西向台地があり、上に小池あり、その下方段々下りにて 数段の田があり、目下その中間道路改修中にて 田の土堤を崩しつゝあり、有機質黒田層上辺に 2 尺許りあり、その土は土路補修用に敷かれた中に



内湾約 20 CM 程度の壺形腹部と想像される朱色土器片、表面に櫛目 弥生式中—末期。

【4頁】

大日北嶺 調査

昭和 27.1.13. 午後、長男淳作と共に行く。

徒歩北南両嶺中間を西側より登り 南側より頂上に達す。途中、西面平地に於ての知見を附加す

この様な破片を数多く認む 且つ、祝部土器 裏面渦状のもの 表面無紋を認ず

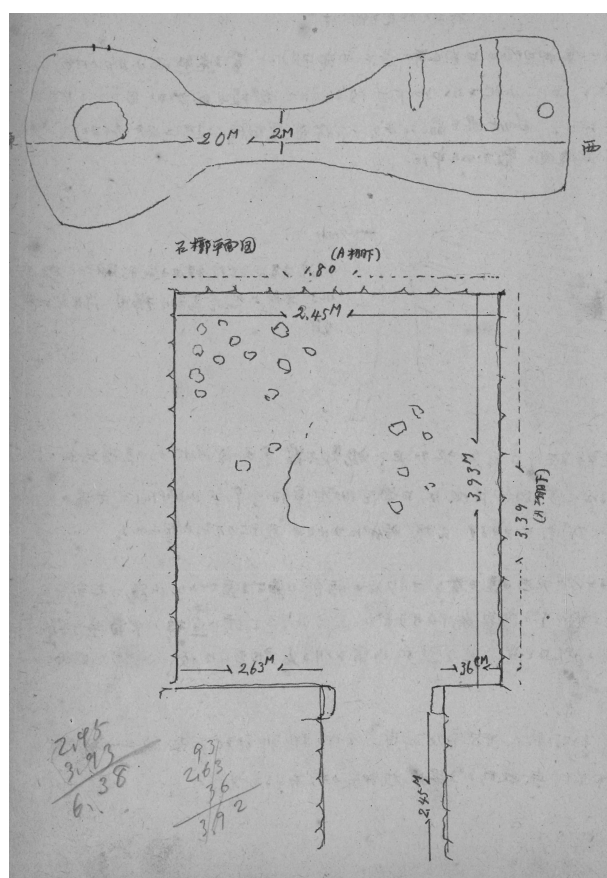
要するにこの西向台地は 日前宮附近遺跡の東辺山脚にして、土器の示すところ弥生式中、末期より古墳時代にかけての住居址の様に見られる。

こゝより池の左辺山逕を登り オイワ谷の稜線に通ずる逕があり 山嶺へ南斜面より真直ぐに通ずる道徑急阪なれども 直ちに頂上墳に達する 本日無風にして暗く 全く昨日と異り 且つ 近在 山柴を刈る為 調査には便、この候を好条件とする。

本日途中に於て 井辺□□西南方平地 鳴神社正南約二丁餘の田に弥生末期無紋形の土器片、祝部系の散布するを見受く。

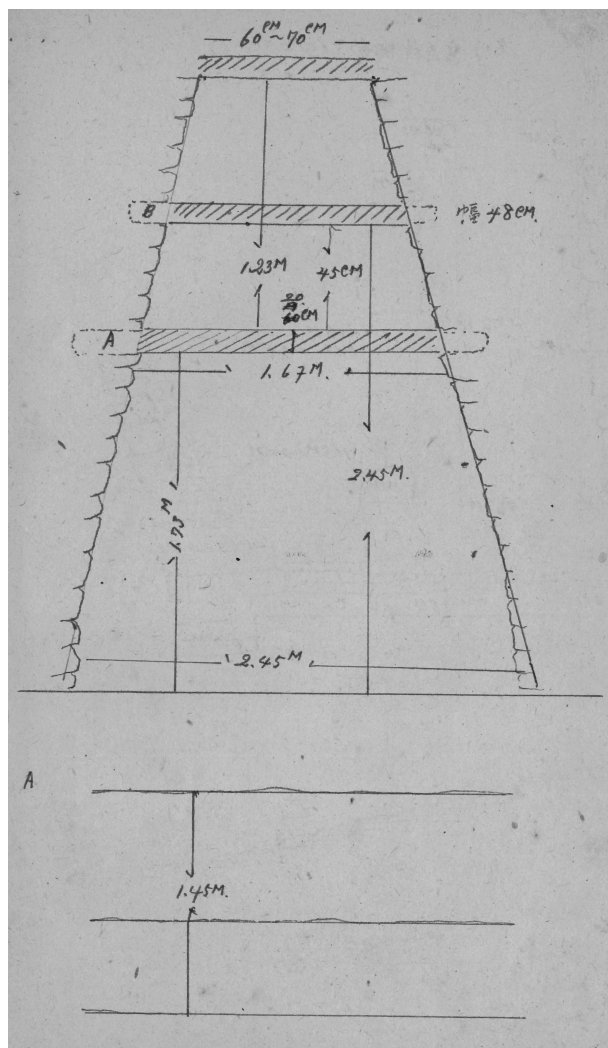
【5頁】

北稜頂上第《*大谷山 22 号墳》

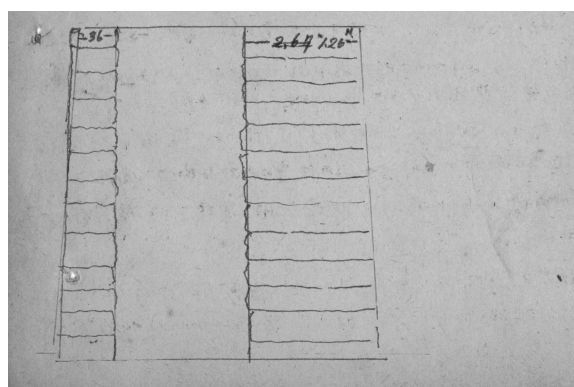


【6頁】

玄室断面図



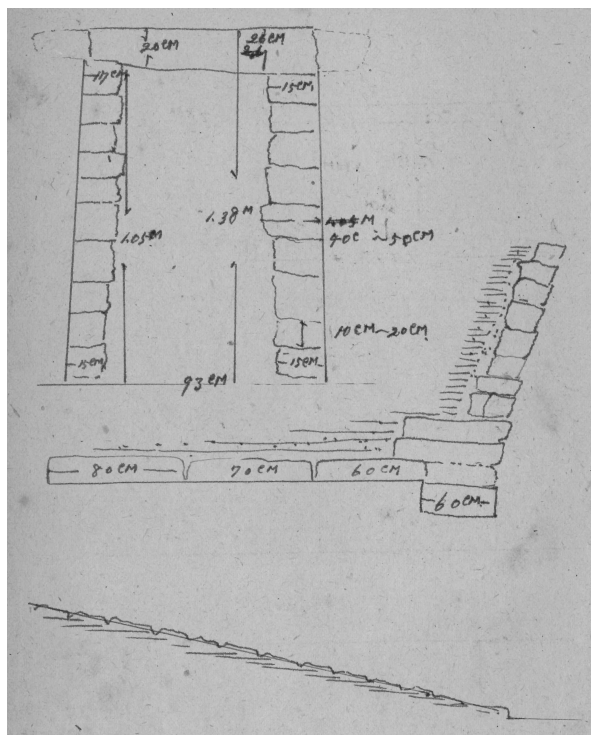
羨道正面図 (入口より見たところ)



【7頁】

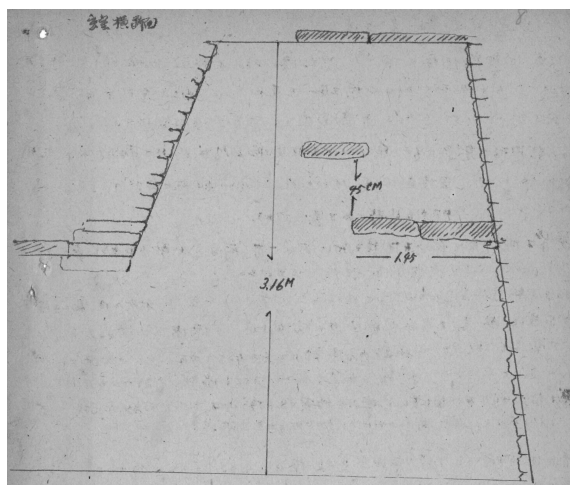
羨道正面図

玄室羨道接触面 (入口より見たところ)

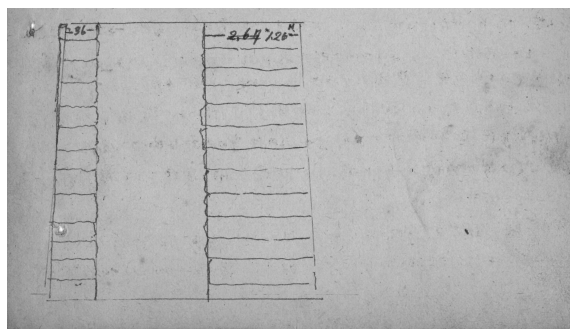


【8頁】

玄室横断面図



羨道正面図（玄室より見る）



【9・10頁】

大日北嶺頂上第1号墳《*大谷山22号墳》

大日南北両嶺相對して頂上に位置する墳である。俗称ヒョータン塚と呼称される通りこれは正にヒョータン形である。両墳主軸正東西なるは頂上の原形利用に方位的正確を加味した如く思はれる。南嶺頂墳主軸正南北と對象的な形である。

前方後円形に基準したものと思うけれども中央幅2Mは21Mの軸に比し又西墳南北径M、東墳南北径Mと比較して餘りに細狭に過ぎ頂上に立つときはこの中央部はあたかも馬背の如き感じである。

眺望は四方に開け、花山頂稜を越して河北一帯西面の和歌山市全体 遠く四国淡路に対しこれは南嶺同様絶佳の眺望である。

私は長男淳作を連れ、調査第二回目をこの墳丘の上に立つた□あけ秋冬の間 満山の笹の黄葉して、深い青さを含む景觀にしばし恍惚とし、この墳塚の如何なる人であつたかを想像したが 案外和歌山市近郊にて人の知るゝ少なく 且つ この頂上に佇2人の殆んど無いといった状態を観光の意味に於ても遺憾とするものである。

最も自然にして 且つ最も美しい笹山の特異性を持つ山は少くとも西和佐古墳一帯を以外にはない 且つ 前山のみにて500町歩に亘る廣域である。

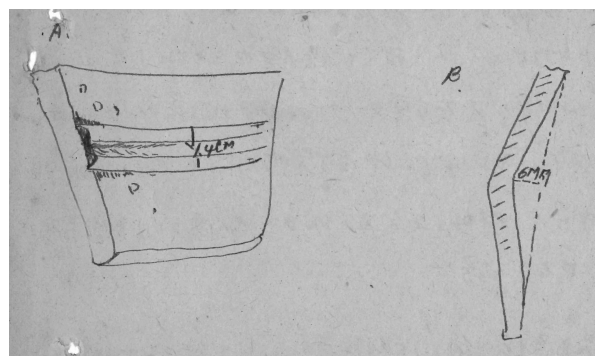
墳丘南斜面下に1段の平坦部があり 構築に當つてこの土を封土となしたゝ、同様東斜面下に於ても1段の平坦部があり、北西部斜面に於てこの形跡の少いことは 南嶺墳に東西に平坦面を持つと對象され、構築以前の原形に於て、□く基礎づけられていたものである。こうした形は山丘墳に於て當然共通する類形を生み 円塚にあつては下方上円の形を意図する形態となり 山稜利用の形は瓢形或はそれに出発する連塚の形態をとる これは一括して後述する。

東西両墳丘共頂上に試掘したあとがあるが、西塚にあつては戦争末期本土決戦の最終段階の壕址があり、且つ、この位置のみではないが蝸穴と称された一人入りの円壕の所々に掘られ、西墳西角 東墳下にもあるゝ 疑念無き様一應記して置く。

それにしても、東塚南斜面中央部より発掘して

羨道扉に正中している盗掘技術には寧ろ敬服いたしたい気持ちである。この盗掘については後述す書抄に記す通り一般的濫掘の明治30年代以前の或時代（恐らく南嶺と前後して明治初年か）にすでに発掘されたものであり、経験者の語るところ こうした大墳にあつては労力が先づ問題であり、羨道面を捜し見當づけるに先心するそうであるが、これには少しの無駄のないに實地につけば何か外部に証蹟のあつたかに思はれるものである。

この墳には、南東面丘下台地に埴輪のあつたに調査にあたつて、南面下段に於て三個を採集し 東段下に二個を採集したに依り証せられ、且つ これらは小破片なる為全形を知るに出来ないが、第二回調査に依り得たものは円筒の凸状帯であるに及び内湾カーブの復原に依り 径35.6CMの大形のものであつたにを察知出来るし、これは朱赤色のものであるが、他の1片に於ては黒心を有する黄色系のものであるにを知り、これは上方に開いた部分を遺すものである。共に厚さ1CM、凸状部に於て1.6CMを数える。この埴輪を持つものは南嶺頂墳とも同様であり 他のものには花山の一墳を除く外あまり類例がなかつた様であり、近年発見になる直川古墳、大谷古墳等の例に徴して周囲圍繞のものではなく地方色としてその一部分に達した様であり、私はこれを塚墳の正面を表示するものと見てゐるが 或はそうしたものを発掘當時にとゞめていたのかも知れない。



【11 頁】

現状に於て羨道口は人一人辛うじて入れる程度であるが、恐らく玄室のこれ程完全に保存されたものも少い。磚築墳に見られる様にドーム型構築であるに南嶺墳と同様であり、種々の手法に依り同時代

相前後して一は南嶺に 一は北嶺に構築されたものの様である。

図録第1図に示す様に 左右壁底部に於て3.93M、奥壁2.45Mで 南嶺頂墳よりは 左右壁にて少々短かく 奥壁に於て長く方形に近い形状である。

殊に注意すべきは 羨道左壁2.63に對し 右壁は0.36Mで 8倍強になつて□《*里?》片寄にあるに南嶺墳よりも更に極端にて これは家屋形を模した石槨構造の入口を正面片寄にしたと私は解している。依而當時家屋の入口を家屋形埴輪について見るに切妻家屋側面片寄に入口を開くものがあり、左様の形を墳墓に移すに 故人の永遠の住家として當然推察し得る□《*至?》にであり、南嶺墳に於てもこのにを記したところである。

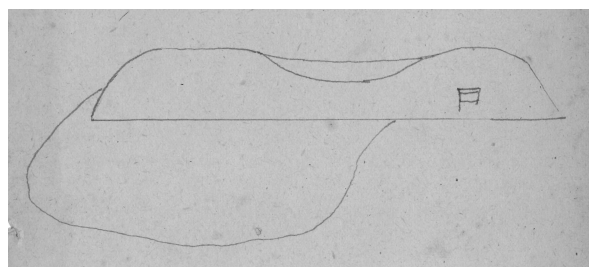
石梁三本を入れる手法も南墳同様である。これら石材は實に立派なものを使用しているが要はこの山自体にこの様な石材を産するに構築を容易ならしめた原因理由ともなるが 石材は麓より運び上げたに疑はないところである。

羨道上（玄《*玄室?》接触面）上方面は南嶺にあつては一枚石を順次持送り 内向カーブを持たせているが、この墳にあつては四枚の枚《*板?》石を積み重ね、その上に小面積にした普通形を用いているに於て異り 又 左右壁カーブが第1石梁（柵）下に於て一見フクラミある様に直上している外南頂墳の様に柵上柵下の急激な変化は認めがたい。且つ 柵下の込石の如きも南墳よりは顕著でなく技術的に手際よく出来ている。

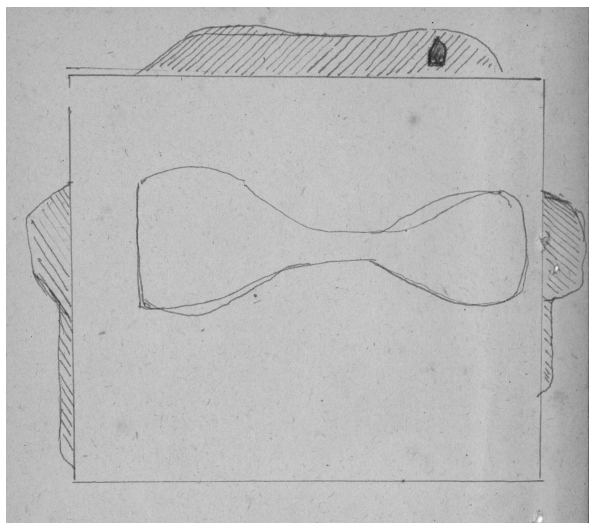
四隅石組は交互差入手法に依り 千数百年の歳月を経ていさゝかの狂ひを生じていない。

【12 頁】

敷石は10cm大の川原石を使用してをる。羨道上蓋石三個、玄室上蓋、三個（四個）。

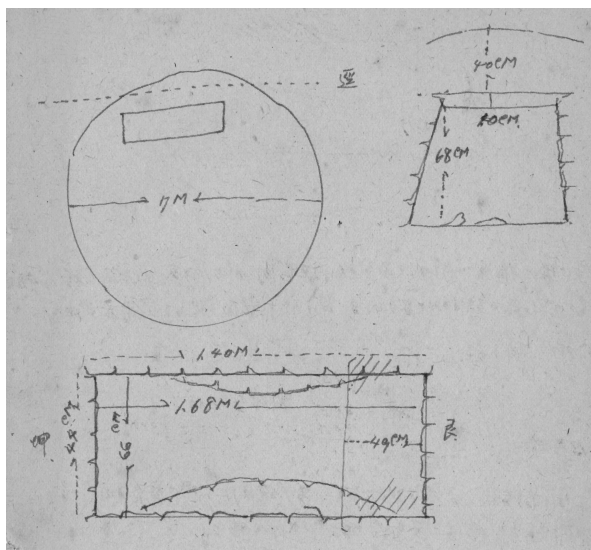


【13 頁】



【14 頁】

昭和27.1.13日 調査
大日北嶺 第二稜
9号墳《*大谷山21号墳》



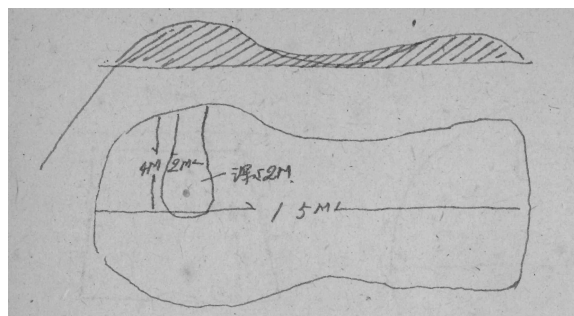
頂上墳の東斜面下 第二稜最初にある直径10M許りの墳である 逕はこの北辺を頂上より降下して通じている。その路傍に沿って ポツリと矩形の穴があり、これは墳丘中心でないのに発掘されているのは 元 こゝに小墳丘が存在していたものと思はれる。東塚は未発掘らしいのである。

長径1.68M、短径66CMの小児墳であり上方に石槨の幅をせばめ この程通有型を示している。中央部で左右壁上部がはみ出しているが これ

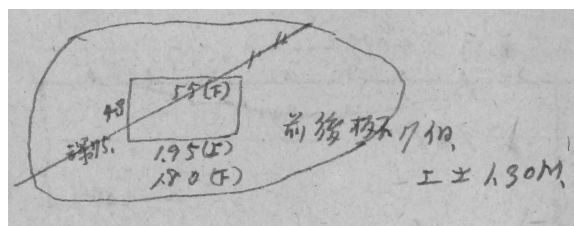
は蓋石を去つた為土圧に依るもので 原形は歪形のものではなかつた筈である。艮坤《*北東・南西》を主軸とし 蓋石一枚を残す。主塚封土高くなく南斜面に向つて頂上部低くなつてゐる。

【15 頁】

10号墳《*大谷山20号墳》



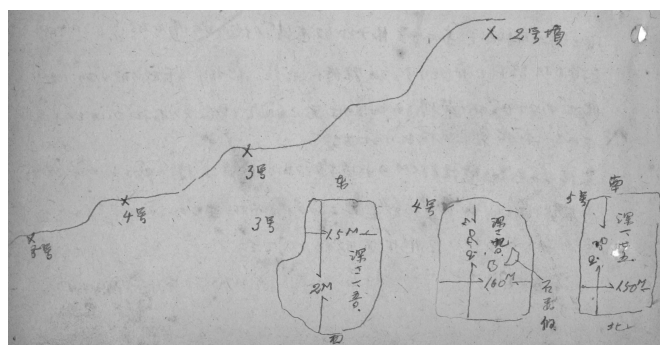
頂上墳に模して構築されたもので前方後円を意図したものである。現状にて積石転用されて その孔跡を残すのみとなつてゐる。中に竹木密生、径はこの墳丘を横切り稜角をなして降下する。



11号《*大谷山26号墳》－13号墳《*大谷山28号墳》

2号墳《*大谷山1号墳》下は階段状4段をなしてをり、第1段には古墳の存否不明である。

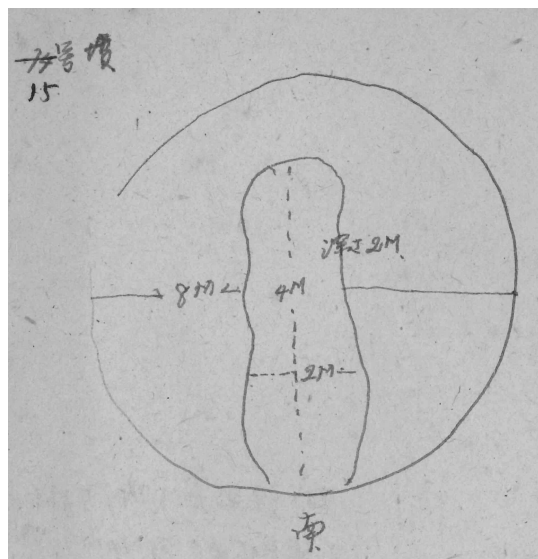
以下第2段に3号墳《*大谷山2号墳》－5号墳《*大谷山4号墳》となる。共に石積なし。



【16 頁】

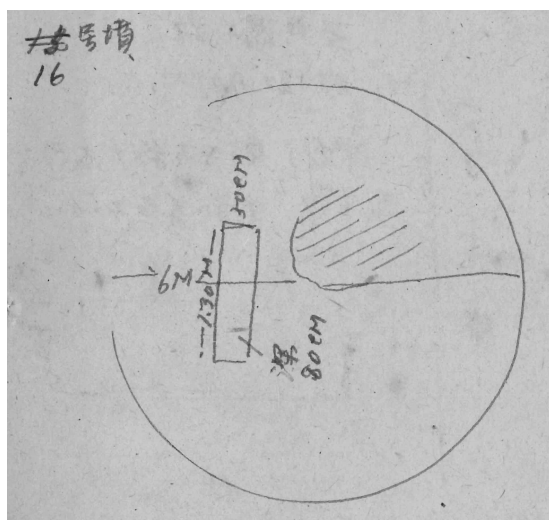
北嶺 第三稜

1415 号墳《* 14 号墳（大谷山 16 号墳）》



南面より発掘せられ現状石組を留めない。竹木密生、封土高さ約 3 M。

1516 号墳《* 15 号墳（大谷山 17 号墳）》



墳頂稍低くなっているが一見未発掘の様である。北寄に長径 1.30 M 幅 50 M 《* CM?》

石槨なき孔を残すのは 壕趾の様にも考えられないが 二稜、三稜間斜面には戦時中の円壕をも残すから 或は當時この墳を利用したのかも知れない。

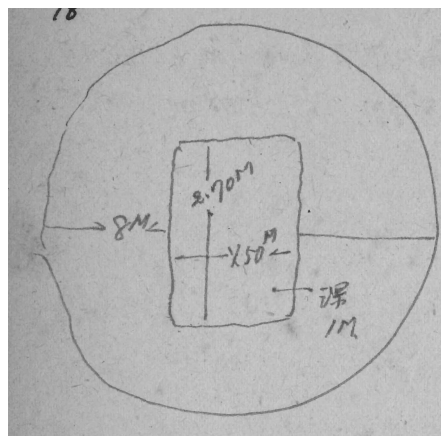
但し 二稜第 1 号の小児墳の例に類似しているから姑く記す。

1617 号墳《* 16 号墳（大谷山 38 号墳）》

径 6 M 許りの封土 1《* 大谷山 22 号墳》、2《* 大谷山 1 号墳》、3 号《* 大谷山 2 号墳》共同様同型同大の円墳 高さ 2 M—3 M 程度 本墳は墳頂に径 1 米許り深さ 30 CM 許りの凹みを有し 未発掘の様に見える。但し この東斜面に 40 CM 許りの石面三個露出するを見受く。

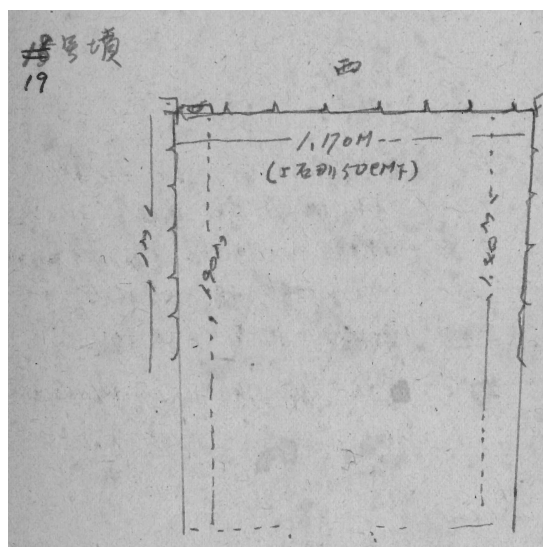
【17 頁】

1718 号墳《* 17 号墳（大谷山 15 号墳）》



主軸艮坤《* 北東・南西》、積石無し。

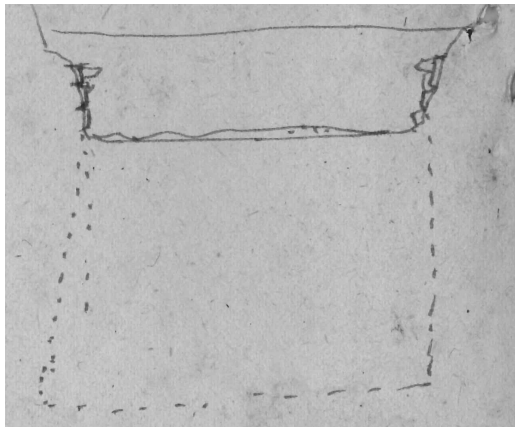
1819 号墳《* 18 号墳（大谷山 13 号墳）》



封土径約 6 M 許り、本稜中石積唯一存在

石組最大 60、厚さ 10 CM 笹密 灌木 疎。封土高さ 70 CM。

本墳は東方を石積左右壁南半を欠く 東方に羨道があつた様である。



1920 号墳 《* 19 号墳 (大谷山 14 号墳)》

封土径約 10 m

東面より掘り抜き 長径5 M 幅2 M許り

中に石組無く 深さ1.20M、附近畑地となり、これら石垣に転用されたものゝ様である。



【18 頁】

大日北嶺 第 I 稜 實調 昭和 27. 1. 26.

白石同伴 午后 寒冷 飛雪、冰雨

第Ⅰ稜調査ハ第Ⅱ回目である。鬼ヶ池西畔より谷間の細逕を登るこのコース急阪にして篠 身丈を浸し、繁茂期に於ては殆んど不可能のコースである。故に東畔より初回のコースをとり 最上辺柿畑西辺より 図示第7号墳に出づるを適當とす。初回に於て、8基を記録しているがこの稜中、石櫛、封土を遺存し、實調に堪ゆるもの四基であり 他は濫掘當時の痕跡に依り 古墳所在を推察するのみで 現状に於ては顕著な封土の存在なく 只 稜角の地形に於て、既掘乃至未掘の形にて存在すると想察し得る程度である。

故に判明せる四基について記す。

第Ⅱ《*大谷山1号墳》、第Ⅲ号墳《*大谷山2号墳》は頂上瓢形墳《*大谷山22号墳》の北斜面下に位置するが、Ⅲ号墳《*大谷山2号墳》も深

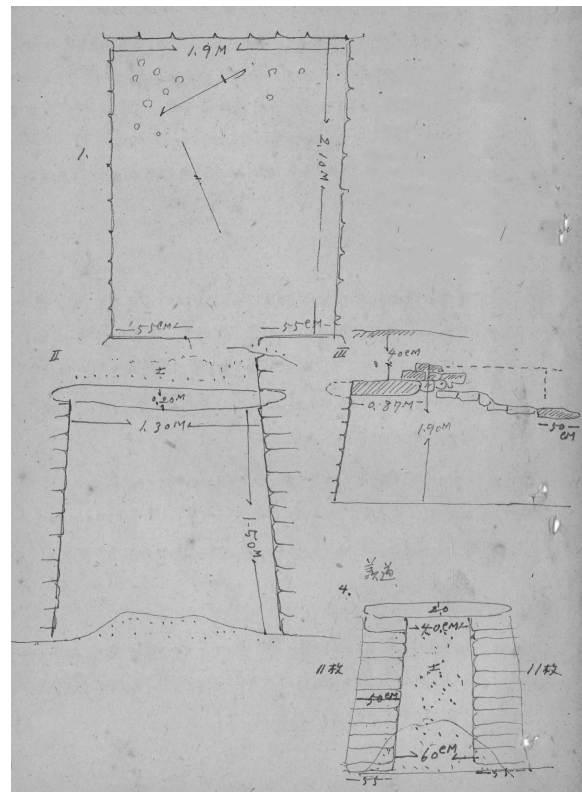
さ5、60CM、3M径の凹地をなすのみで石槨構造の遺存するものなく、地形的に□□に1墳の存在を肯定すべきであるが 其の実証に欠く。(頂上墳構築の際 北斜面下の土を掘つた為 この一劃 平地状を形成したものと見られ、自から一段丘を為す故に 古墳存在の様に見え 発掘放置した痕かも知れない。

第Ⅱ号《*大谷山2号墳》もその下方に接して少々丘状をなし、底《*低?》き封土の様であり、古墳上辺の石材か? その頂点に露出するところより、これを一墳と假定するのみ。但し この位置の樹木疎にして 玄室上に位置するものゝ様に思はれるものである。

第4号墳 《*大谷山3号墳》

鬼ヶ池西畔を登攀するとこの墳に倒達する。本墳は玄室上より発掘され、先ず完全に近く玄室を保存するものである。大様以下古墳と同大の大きさにして、径6 m～8 M程度のものである。

【19 頁】



羨道

西々北290°、大様東西を主軸とする。

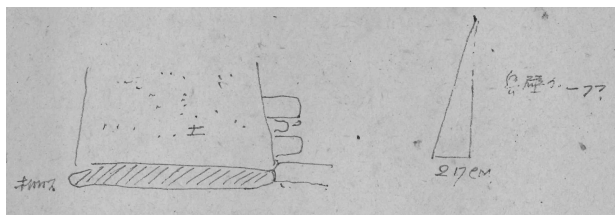
厚さ20CM 幅0.87Mの枚(板?)石を架し、一見天井石の様に見えるけれども

Ⅲ図示す様に現在其の板石の上に更に石組を残存するところからみると明らかに玄室左右両壁上部を欠損している7實を知る7が出来 したがつてこれは棚と見るのが妥當である。

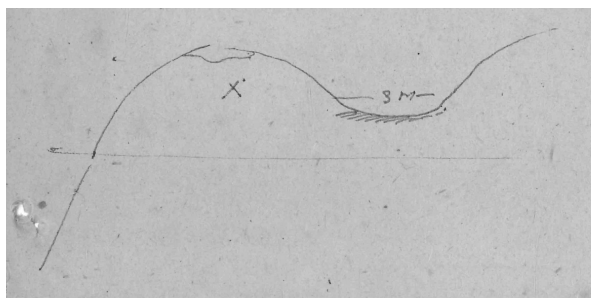
【20 頁】

床底に5cm～10cmの川原石を布く。四隅石組は前後壁にて左右壁を囲むを基準に交互差入法を使用大小適宜組合せ 整正の感強く 最大のもの長さ60CM 厚さ15CMである。

最上辺石より 封土50CMを残す。以下、5《*大谷山4号墳》・6《*大谷山5号墳》・7号墳《*大谷山6号墳》共に封土復原1M程度である7を特色とする。



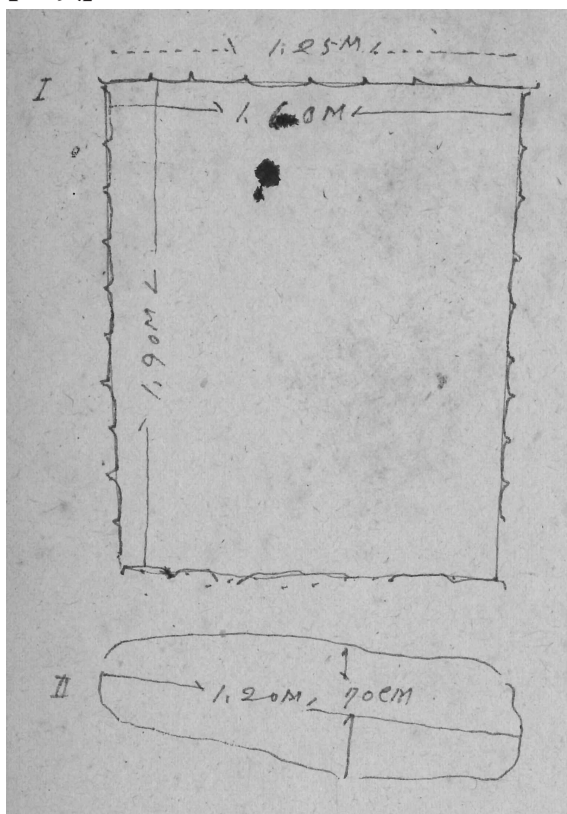
この地点より北は花山を越して 直川方面に対し 西は和歌山市北半を望み 四国淡路に対し、日前宮を南辺とする山麓視界を持つ。東は西和佐方面を望み附近一帯篠密生。



第5号墳《*大谷山4号墳》

第4号墳《*大谷山3号墳》東北下稜線上に雁行して存在。

【21 頁】



羨道は第4号墳《*大谷山3号墳》同様 西々北290°にある7、同様構造、相近接した年代築造の証である 左壁は80CMの高さを現存し 右壁は高さ約1Mを現存する。

奥壁のみは完全に存在。

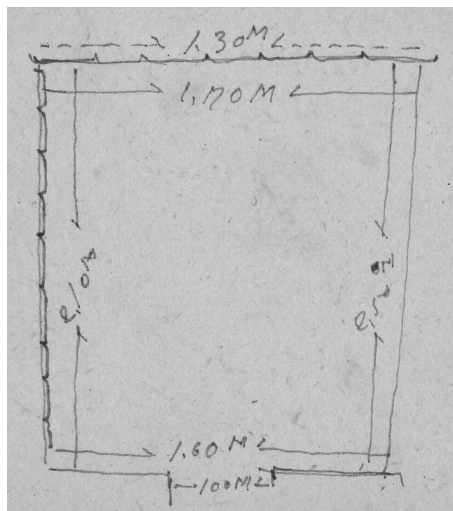
封土薄き7 前墳同様にして上辺石組上70CMを残す。復原1M程度と思はる。

羨道面高さ87CM残存。(右壁辺り)羨道面にⅡに図示する石材を露出。

羨門の石か?

附近にて土師1片あり。

第6号墳《*大谷山5号墳》



石組の最も整正の保存。

右壁現在高さ1.10M現存。

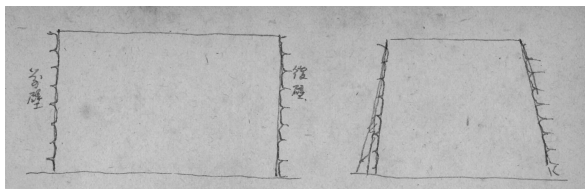
左壁 高さ1.20M現存。

特徴として、

前後壁は殆んど垂直である。

右壁は左壁に比し傾斜が急であるが これは□□
《*南東?》土圧に依るものと思はれ、当初は垂直
の傾向強き石櫛である。

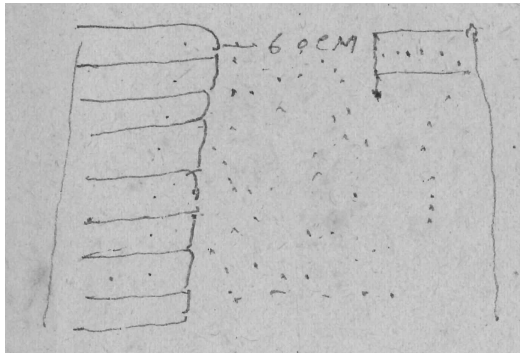
【22頁】



組石極めて整正で比較的大型の石を使用する。

封土85CMを残す。

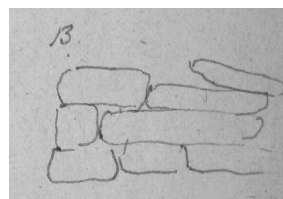
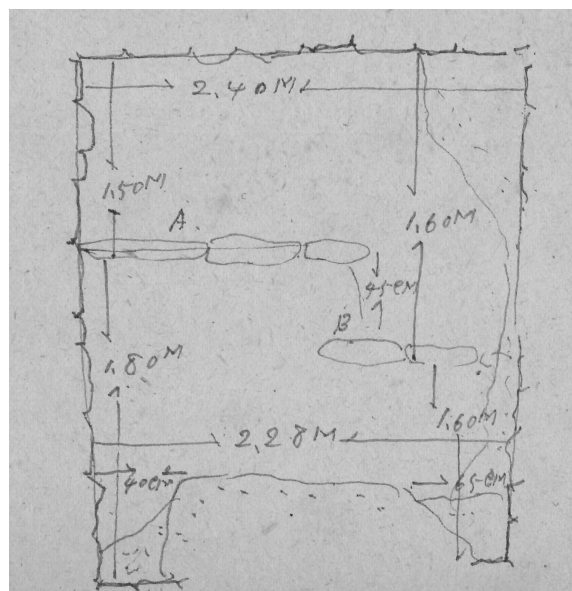
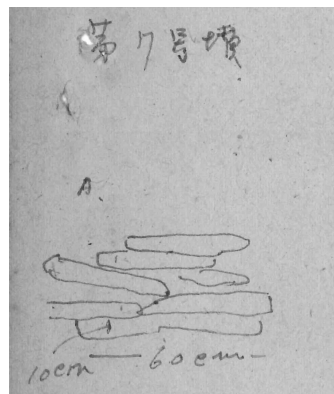
○羨道下辺100M《*CM》、上辺60CM。



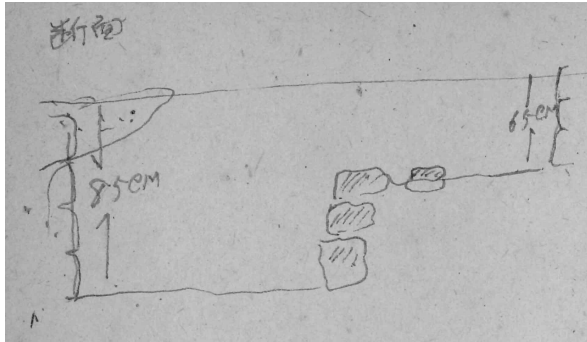
石組ハ前後壁で 左右壁を囲む形

玄室中央には土が堆積している。

第7号墳《*大谷山6号墳》



【23 頁】



本墳は實に構造上特異のもの様思はれる。

奥壁2.40M 右壁は土がかぶさり 上部よりは見られないが その土の下に壁面が残存して居り 左右壁は3M以上である。

すでにこの構造のみに於て他と異ると共に中央部のA、Bの隔壁の存在は明らかに積まれた7が判然してをり 図示する様に一直線ではない。

羨道面は前墳同様であらうと思うが、それが崩土の為に判明しない。

石組は前墳とは全く反対に極めて粗面、封土は右壁上約50CM残存、後壁封土30CM。

第8号墳《*不明》は7号墳《*大谷山6号墳》下柿畠との中間稜線上にある様に思はれ、径3Mの凹室をのこす、附近に石材を露出するが果たしてこれはこの墳の石材であるかどうか分明しない。

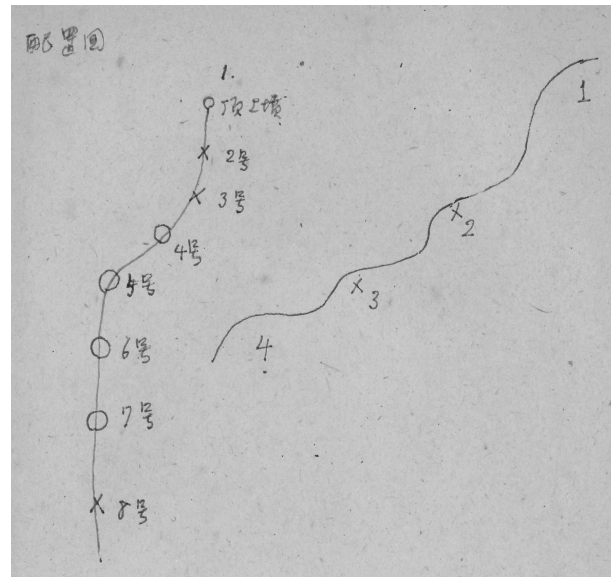
姑く1墳に加え置く。要するに

第1稜中には石槨を止める確証に立ち得るもの(頂上墳を除く)四墳であり、4《*大谷山3号墳》・5《*大谷山4号墳》

・6《*大谷山5号墳》は構造に於ては大同大異構造であるが 6号墳《*大谷山5号墳》の前後壁垂直に近き特質及び 7号《*大谷山6号墳》は他にこれに類するを見受けない。花山車谷の一墳構造と板石を以てするか 積石を以てするか の差あるも隔壁的存在に於て同工である。

【24 頁】

配置図



【97・98 頁】

△ 26、12、20 午後余暇を得て

□身 12…24 の順に調査す

△注意事項

1. 冬期調査すべきにて春夏

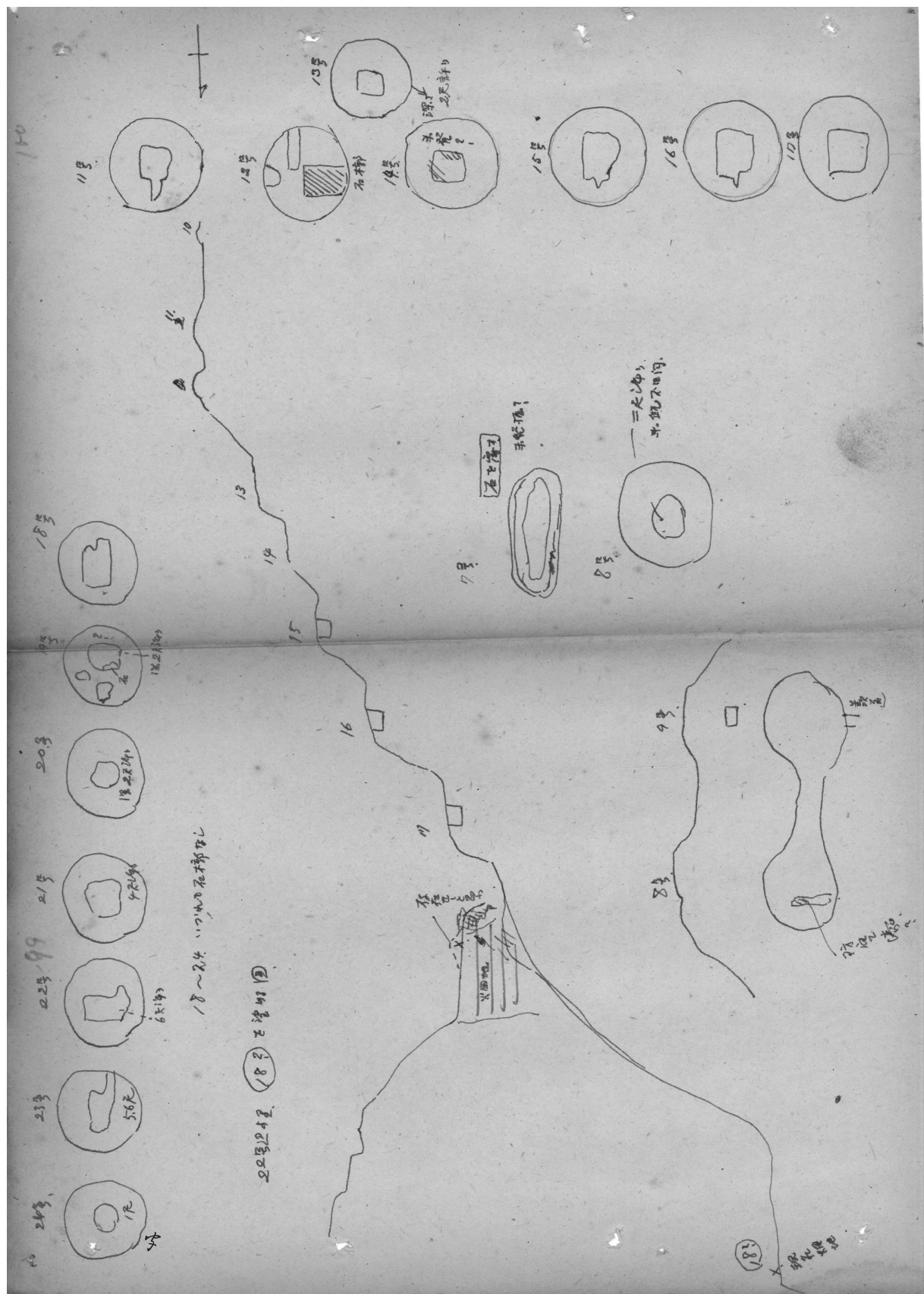
秋初は草木繁□ノ為無理也

□《*殆?》1～7《*不明～大谷山1号墳》の□□し。

昭和 26. 12. 20. 調 宮田 啓二

◎石櫛完形

- 50 -



【101 頁】

第5号墳《*大谷山3号墳?》

山徑東方稜線上にあり。脚が笹原の中に埋まりその東側はオイワ谷頂点にあたり畑地となつてゐる。即ち大日北稜脚に當たる南北径3M、東西約2M、深さ1.50Mの凹地となり低き墳丘がある。石槨はすべて除去されてその痕跡をのこすのみである。

第6号墳《*大谷山2号墳?》

稜線最以下の道路下にあり、少々高くなり1墳の存在を汲むべく□《*未?》掘のもの今姑く記し、一墳に□□す。

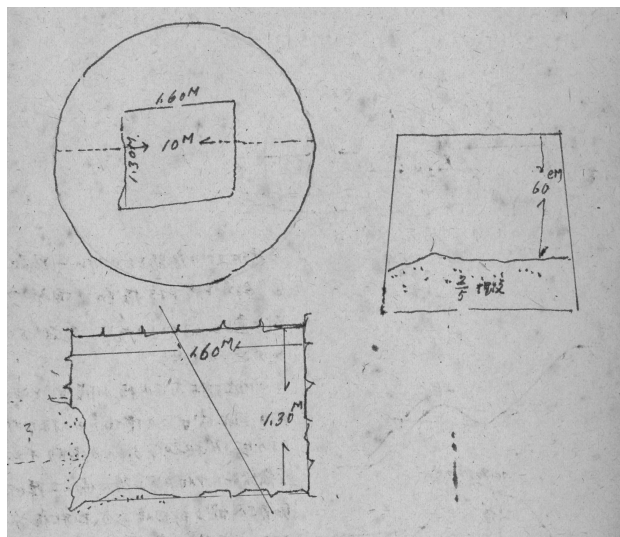
【頁番号なし】

第3号《*大谷山5号墳》

矢一第2号《*大谷山6号墳》西方は一基ある様に思わる→も寅端無し□□記す。

第4号《*大谷山4号墳》

山徑西方稜線に第2号《*大谷山6号墳》同様円塚の明瞭なものである。笹原繁□の中にあり



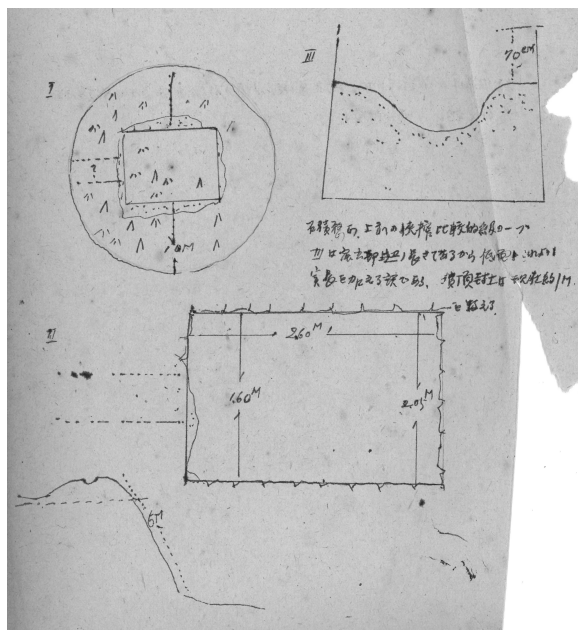
第3号《*大谷山5号墳》

山徑西方稜線に第2号《*大谷山6号墳》墳同様顕著な墳丘を持つものである。現在叢茨の中に玄室内迄灌木密生して調査実査に困難な状態である。石槨稜槨の比較的良好な一つであるがすでに5分の

3程度埋没し、玄室羨道を没しているが玄室羨道長より正面の墳であったことが明らかである。この地点よりは第2号墳《*大谷山6号墳》同様の□□様北一面の視界□□しく制限されている。

石槨□□、上部の□□比較的級カーブ

Ⅲは□出部井辺ノ長きであるから低面をこれより実長を加える訳である。墳頂封土は現在約1Mを数える。



【120 頁】

○○○○○氏《*個人名。以下、同姓同名には同じ記号を用いる》
 字書抄 昭和27.1.12午后

本日午後初めての降雪。古墳実調は雪解けの為に困難となり、○○○○○氏を訪ねたが、偶々同氏は附近倉庫□清中にて旧正月を約し、更に △△△《*小字で確認できない地名。おそらく現在の花山丘陵南東裾附近とみられる。なお、以降、同様の地名は同じ記号で表示する》に赴き○○○○○氏《*個人名》についてずく。同氏は高齢、寒冷の為に離れに居られたが わたしの来訪に依り心よく語られ、私はそれを筆録して夕刻辞去。同氏とは花山古墳調査の際 山上にて初対面なる事 すでに2728号墳《*不明》に於て記した通りである。已に明治30年代発掘當時を知る人 つきつぎに物故して、この人を以て唯一実地の体験者とする。

【121 頁】

大日北嶺頂上墳（俗称ヒョウタン塚）《*大谷山 22 号墳》

これもいつの時代の発掘か分からない。現状に於てあまりにも鮮やかな羨道への堀り割には寧ろ感服するところであり、何か地上の象徴あつたものと思はれる点、同氏もそれを強調するところである。

【146 ～ 149 頁】

昭和廿六年十二月廿日午後自転車を岩橋△△△民家にあづけ 1・・・の順に調査す。

このコースは一号墳《*不明》に至る間逕書きて柿畑となり九折して登り、畑以上は山地に逕なく古墳を目あてとして背丈の笹を押し分けて行くよ里仕方がない

一号墳《*不明》も墳丘には石を（埴輪のあるべき位置）に四五個露出しているのは発掘の際のものであるか否か不明であるが今後の研究を要する。

一帯に笹原である為、自分の歩む範囲外は見當がつかない。十一、二月一四月頃迄が調査の好季でそれ以外は不可能にちかい状態である。

古墳は稜線にそつてあるから上へ上へと見當をつけて登るに都合がいゝがこれら古墳はいづれも相當大きく封土（丘利用）を持つため眞すぐに登ること困難である。右の方に迂回して墳頂に出る様にするのが一番登りよい。

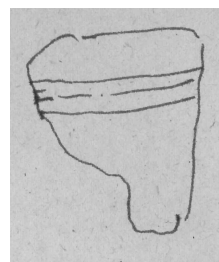
三号《*大谷山 5 号墳》五号《*大谷山 3 号墳？》六号《*大谷山 2 号墳？》は石槨を完全に保存されていづれも天井石を除去して発掘されたものであり石積は巧緻に出来てをり 狂ひはない。蓋石の巨石はすでに破壊されたかいづれも認めない

一見したところ四六号墳《*前山 A46 号墳？》などのそれとは多少構造を異にする様に思う。精査の必要ある七号《*大谷山 6 号墳》八号《*大谷山 22 号墳前方部》辺より細道通じ八号《*大谷山 22 号墳前方部》頂上墳の途中に二尺許りの石を立てたるを認めた。後世の作為かも知れない

頂上の八号九号墳《*大谷山 22 号墳》は両者連結してをり、これら古墳はいづれも山丘利用の為此の両者を勿論頂上を利用しているのだが瓢形につないで人工を施したあたりは可成工事としては念を入

れたものであり、しばらくこの両者を見ていると直観として夫婦塚の様な感がしてならない。全く中央細く（地形利用の為幅広くとるゝは困難）くびれて瓢形をしているのである。八号墳《*大谷山 22 号墳》は墳頂に発掘の形蹟と戦争末期の防空壕（これは多分昭和廿年六月頃であかつたかと思う）の蹟が幅三尺深き四尺位に掘り抜かれてをり一見羨道の様な形に見えるがこの程度の発掘であればこれは未だ発掘されないでいるのではないかと思う。九号墳《*大谷山 22 号墳後円部》は南面より掘り進み、羨道に掘りて石槨は完全に保存されているが 八号墳《*大谷山 22 号墳前方部》も同様南面の構造とすれば未発掘とみるが適當と思はれる 南方には一段の平坦部をつくり、すべてこの頂上よりの眺望はいゝ和歌山市附近一眸の裏にあり、一種懷古の情に堪えない環境である。南面平坦部中央にて埴輪破片三個を採集したが花山 一 号墳と同様封土を作る為に又八九《*大谷山 22 号墳》両方をお堀状を作る為此の斜面の土を利用し且つ下方の形を示さうとしたのであらうか 花山の様に顕著ではなく南の一面を平らにし正面の広場としたと見るが至当であらうと思う 前方後円の意図はあるにしても八九連結の形があるのだから、地形的にこうした形をつくる立面図は寧ろ工事の自立から来ている。埴輪の出るところを見るとかつてはこの南面には、いくらか認められたのであらうが今はその形蹟がない。少々硬質のものである。

□□



九号墳《*大谷山 22 号墳後円部》の東南斜面に一所稍々と高きところあり或は花山 1 号墳の位置に相當するからこれも小古墳であり親縁者の塚墓であるのかも知れない。

六号墳《*大谷山 2 号墳？》から東に下る稜線にある十号墳《*大谷山 21 号墳》は小供のものであるが箱式石棺でなくてこうした小口積の構造はめづらしくこれは他全部の調査を待つて尚一應前後関係を考えるべきである 現在稜線の山逕に沿つて露出しているが封土全体の形からいへば端の方にあたる様に思はれ、未発掘の主墳が存在

するのではないかと思う

十一《*大谷山20号墳》 十二《*大谷山20号墳》は 八九《*大谷山22号墳》を小さくした形であり 全く類似しているがこうした類似はいづれか模倣した¹を意識し又前記夫婦塚的印象も濃いのであるが、どちらかと云へば頂上墳が先に出来ていてそれを模したと見るのが妥当ではないかと思う 地形の撰定にあたっては勿論、八九号《*大谷山22号墳》を最適とするが故に それに引きつづいてこの構築があつたものゝ様に思ふ。

十二号墳《*大谷山20号墳》は発掘にあたって三ヶ所より試みているが 案外に深く玄室の位置しているのをかくまで見事に頂上より発掘しているのには何か掘りどころがあつたものかと寧ろ驚異の気持である。以下、稜線の大きな階段状に構築されてをり、いずれも石櫓を欠くは附近畑地開墾の際の石垣に使用された¹は明確で十七号墳《*大谷山28号墳》に至るまで大体は同じ大きさの構造らしく十七号《*大谷山28号墳》以下は急傾斜となり十八号《*大谷山39号墳?》にあたる位置は現在畑地となつているが地形が北面をなす為當然こゝには一両墳の存在は認めらるべきだと思う。十八号《*大谷山39号墳?》以下廿四号墳《*大谷山12号墳》はいずれも石櫓をとゞめない。畑地はすでに廿四号墳《*大谷山12号墳》に接しているからこれら石垣の構造はこの石を使用したものと見るべく我々考古學的資料としての遺構の存在していないことは遺憾に堪えない。本日□惺の間に調査した始第を備忘し置く、一廿日午後十一時□一

3. おわりに

以上のように、本稿では、宮田啓二氏が大谷山地区について昭和26年(1951)12月~昭和27年(1952)1月に踏査や聞き取りを行った記録を書き起こした。当資料には様々な重要な知見が散見されるが、ここでは特に重要とみられる記載について、検討しておきたい。なお、古墳の名称は現在の名称を用いている。

大谷山3号墳 大谷山3号墳は、現在、径14mの円墳で、埋葬施設は石棚を1枚もつ両袖式の岩橋型横穴式石室であることが知られている(和歌山県教

育委員会2019)。しかし、この古墳ではこれまでに発掘調査等が行われておらず、横穴式石室の実測図面が公開されていないため、石室の詳細な情報は不明確であった。したがって、現在においても古墳の築造時期について明確な根拠をもって言及することが難しい。しかし、当資料19・20頁では、宮田氏の観察に基づく大谷山3号墳の横穴式石室の詳細な図面が提示されている。この図面によると、玄室と羨道が良好に残存することが判明し、玄室は床面で長さ2.1m、幅1.9m、残存高1.9m、石棚を1つもち、床面から石棚までの高さは1.5mである。羨道は玄室前壁中央に取り付き、また、玄門袖石は左右とも平積の1段1石11枚で積み上げられていることがわかる。また、玄室床面には河原石がしかれていたようである。

以上の特徴に鑑みれば、大谷山3号墳の横穴式石室は、萩野谷正宏氏の岩橋型石室の編年(萩野谷2019・2021)及び石室の玄室法量や構造が類似する古墳^{註4}の築造時期から、6世紀中頃に築造されたものと推定される。

大谷山16号墳 大谷山16号墳は、大谷山22号墳が位置する大谷山山頂から東北に派生する小尾根に築造された径26.5m、高さ6mの円墳で、埋葬施設は玄室に石棚2枚と石梁3本をもつ両袖式の岩橋型横穴式石室である(和歌山県教育委員会2019)。平成6年度(1994)に和歌山県教育委員会により発掘調査が行われ、古墳の築造時期は石室の形態等から6世紀中頃~後半と考えられている(和歌山県教育委員会2004)。

当資料における大谷山16号墳の記載で最も気になる点は、横穴式石室の開口時期である。少なくとも平成6年度の調査段階では石室入口が開口し、自由に内部に立ち入ることができたようである。しかし、当資料には大谷山16号墳の石室の詳細な記録はなく、16頁に「南面より発掘せられ現状石組を留めない。竹木密生、封土高さ約3M。」と記載されているのみである。ここからは、発掘痕跡からすでに盗掘を受けていた可能性が想定されるものの、石室自体が開口していた状況は読み取れない。したがって、宮田氏が現地を確認した昭和27年から和歌山県教育委員会が調査を行った平成6年度ま

での間に、大谷山 16 号墳の石室は開かれたものと推測される。こうした石室の開口時期は、出土古墳が不明確な伝岩橋千塚古墳群出土資料を検討する上で、極めて重要な情報となる。今後、いつどのように大谷山 16 号墳の横穴式石室が開口されたのか、情報収集に努めていきたい。

最後に、末筆ながら昭和 26・27 年において、現在把握されている古墳全てをすでに認識され、かつ大谷山 1～6 号が所在する尾根では、現在以上の古墳の可能性がある地点を積極的に把握されるなど、各古墳を自らの足で実際に踏査し、観察所見をまとめられた宮田氏の労苦には改めて敬意を表したい。当資料は今後も大谷山地区の古墳を検討する上で、重要な基礎的資料となるだろう。

【参考文献】

- 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之
2021「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群 調』—花山地区編—」『紀伊風土記の丘 研究紀要』第 9 号
- 萩野谷正宏 2019「岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』219 古代学研究会
- 萩野谷正宏 2021「近畿の群集墳 2 紀伊地域」『群集墳研究の新視角』六一書房
- 和歌山県史編纂委員会 1983『和歌山県史』考古資料
- 和歌山県教育委員会 2004「岩橋千塚古墳群」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成 14 年度—』
- 和歌山県教育委員会 2007『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- 和歌山県教育委員会 2004『和歌山県埋蔵文化財調査報告書』—平成 14 年度—
- 和歌山県教育委員会 2017『岩橋千塚古墳群—大谷山 4・5・6・39 号墳発掘調査報告書—』
- 和歌山県教育委員会 2019『特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画』

【註】

- 1 頁数は、当資料上部に鉛筆書きで記載されていたものである。
- 2 旧字やくずし字などで特に難しいものについては、現代の日本語との対応を示す。「𪛗」は聞、「𪛖」は事、「𪛗」は後、「𪛖」はひらがなを繰り

返すときに用いる記号「々」、「當」は「当」に対応する。

- 3 記載されている日付をみると、1～24・120・121 頁と 97～101、146～149 頁では踏査時期が異なり、前者より後者の方が古い時期に踏査された記録であることがわかる。したがって、分布図 A・B の古墳番号の差異は、踏査時の番号の振り方や古墳とするか否かの認識の差に起因していると考えられる。
- 4 玄室の法量や石棚をもつなどの構造が類似する岩橋千塚古墳群の古墳は、大谷山 14 号墳、前山 A23 号墳、将軍塚古墳前方部横穴式石室、知事塚古墳後円部横穴式石室などがあげられる。

安原朝日出土の埴輪について

—山口コレクションから資料紹介—

河内 一浩

1. はじめに

「山口コレクション」とは故山口善一氏が採集された考古資料で、現在和歌山県立紀伊風土記の丘資料館に所蔵されている^{註1}。寄贈された資料は、縄文時代から中世に及ぶコンテナ 96 箱分である。資料の採集地は山口氏が在住していた和歌山市内を中心とするが、近隣の岩出市や海南市まで足を伸ばしておられる。

その中には古墳時代の資料も多く含まれ、特に円筒形埴輪は大量に採集されている。寄贈された 96 箱の内、32 箱が埴輪資料で、コレクションの約 3 分の 1 を占めている。埴輪の採集地は、整理ケースの箱書きやメモから表 1 に示した通りである。このうち大谷古墳の埴輪は、報告書(樋口他 1959)に記載され、鳴神や花山古墳群出土の形象埴輪は、伊勢田進氏^{註2}をはじめ巽三郎氏^{註3}、羯磨正信氏が資料紹介しているほどの優品がある。

山口資料の中には調査できない古墳や今まで埴輪の出土が知られていないところもある。和歌山市の安原朝日の円筒形埴輪もその一つである。

2. “安原” から出土した埴輪

コンテナ No70 に「安原村朝日城野」と書かれたラベル(図 1)が入った円筒形埴輪や朝顔形埴輪の破片が 127 点あった。

ラベルは、縦 6 cm、横 3.5 cm の厚紙で、周囲はハサミで切ったような曲線を描い

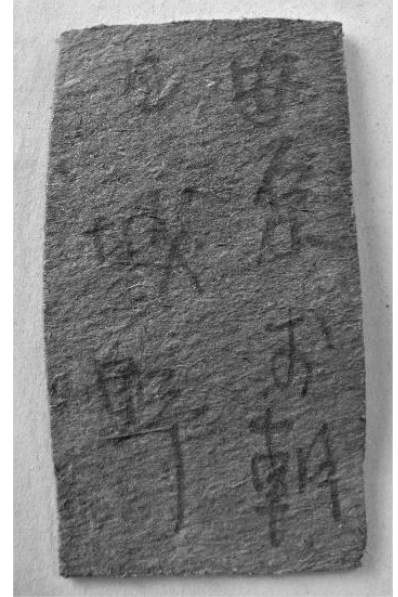


図1 ラベルの文字

ている。また裏には「30 年 6 月 1 日」とメモがある。このことから関西大学考古学研究室が実施した再整理の際に、朝日出土の埴輪を入れていた紙箱を切り抜きラベルとしたと推測する。^{註4}

旧市町村	遺跡名	資料名	箱数	コンテナNo.
和歌山市	大谷古墳	円筒形埴輪、蓋形	4	5, 13, 21, 25
和歌山市	花山古墳群	円筒形埴輪、蓋形、朝顔	3	12, 40, 57
和歌山市	岩橋千塚	円筒形埴輪	3	26, 54-2, 70
和歌山市	大谷仮4号墳	円筒形埴輪	1	63-3
和歌山市	朝日	円筒形埴輪	1	70-11
和歌山市	鳴神	動物埴輪、人物埴輪	2	54-4, 82-2
和歌山市	関戸遺跡	円筒形埴輪	1	70-2
採集地不明		円筒形埴輪、形象	17	49, 51, 53, 55, 56, 71, 76, 77, 78, 79, 80, 84, 85, 86, 87, 88, 89

総数 127 点から図化できる破片は写真 2 にある 42 点である。図化はすでに終わっているが今回すべて提示することができないので概略を述べることにする。^{註 5}

抽出した 42 点は部位が判る破片で 1～4 の 4 点が円筒形埴輪の口縁部で、端部内外に肥厚する断面形態を呈する。5、6 の 2 点が朝顔形埴輪の口縁端部片である。以下、胴部片であるが円筒形か朝顔形を確定することができなかった。7、8、13、14、16 の 5 点には、突帯に接して円形スカシ孔が認められる。

23、36、37 は、いずれも突帯はない胴部片である。36、37 の破片の長辺は 7.5 cm を測る。23、36 の外面にはタテハケが見られ、外面調整が分かる唯一の破片である。

その他の胴部の破片には突帯が確認できる。突帯断面の形状から 2 種類に分類できる。一つは台形ではなく、突帯上辺が下辺より突出度が高い形状を呈する。9 から 33 が該当する。いま一つは、台形状を呈し、34、35、38～43 が該当する。

127 点の破片には底部片は見当たらなかった。そのため、埴輪の出土地には円筒列が遺存している可能性がある。

焼成は土師質焼成で黒斑が認められない。また須恵質や半須恵質の破片は存在しない。

色調は、赤褐色と橙色に大きく二分できるが、後者の方が量的には多い。

胎土に白色砂や赤色粒が目立って含まれる。

以上のことから窖窯焼成の埴輪と認識でき、古墳時代中期以降の製作時期となる。外面調整にはヨコハケが全く見られず、確認できた外面調整はタテハケであった。底部片は全く認められなかったので、底部調整等は不明である。突帯は台形を呈している断面形態を持つことや M 状の断面形態が見られない。このことから埴輪の製作時期は、古墳時代中期末から後期初頭に位置付けられる。

円筒形埴輪の口縁部断面が外方に肥厚する形状は、かつて筆者が紀伊型とする円筒形埴輪に類似する（河内 1998）。同様の例は鳴神団地古墳の円筒形埴輪にも見ることができる（河内 2011）。

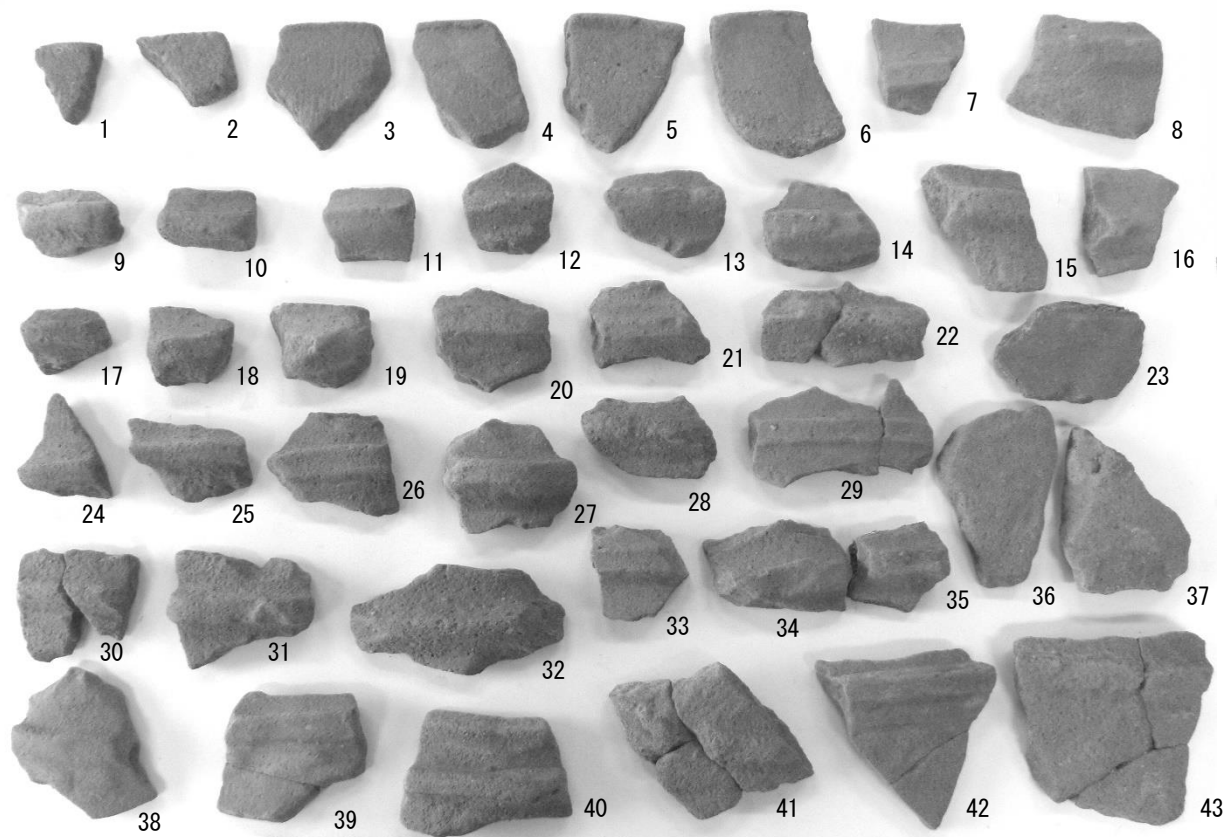


図 2 朝日出土の埴輪

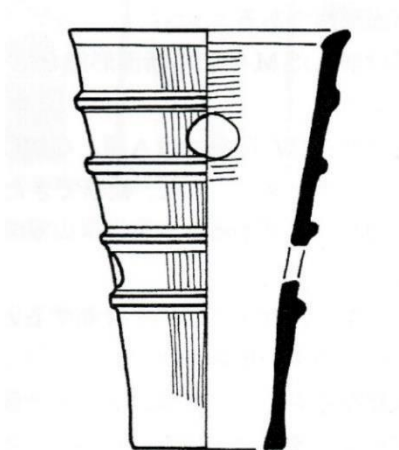


図3 鳴神団地古墳の円筒形
埴輪（復元図）

外面調整にヨコハケを施さない安原朝日の例は、鳴神団地古墳と同様に紀伊型とは言えない。

3. 埴輪の出土地

ラベルにある「安原村朝日」は、和歌山市朝日に該当し、和歌山市の南東部に位置する名草山の東にある独立丘陵が出土地と考えられる。この丘陵の西端にある赤津1号墳がかつて“朝日古墳”と呼称されていることを知った。

和歌山県教育委員会の『埋蔵文化財遺名表』（和歌山県教育委員会 2020）によれば、和歌山市の朝日に所在する赤津古墳群は、5基の古墳で構成され、標高約30mの最も高所に1号墳が築かれている。開壟時に箱式石棺が発見され、人骨と須恵器の杯が出土している以外は詳らかでない。副葬品と考えられる杯についても現在行方不明である。

なお、羯磨正信氏が『紀伊考古図録』の中で組合せ式石棺の単独古墳が海草郡安原村朝日にあったことが報告されている。図録の第17図Dに石棺の写真も掲載されている（和歌山県教育委員会 1955）。画像が悪く写真からはその構造等を知ることができない。

また、『埋蔵文化財遺名表』や『紀伊考古図録』には赤津1号墳あるいはその周辺においての埴輪の出土については記述がまったく無い。

同じ丘陵には平成6年に城ノ前1号墳が新規に発見された（和歌山市文化体育振興事業団 1997）。同

図3は、筆者が破片から復元した鳴神団地古墳の円筒形埴輪である。庭部高の高い4条突帯5段であるが、安原朝日では底部がみられなかったが、同じ形態の可背性がある。

外面調整にヨ

古墳は石室構造や出土遺物から築造時期が7世紀前半と考えられている。

埴輪を樹立する古墳が丘陵の一角に発見される可能性は無いとは言えないが、山口善一氏がラベルに記した「朝日」と羯磨正信氏が報告した箱式石棺の存在から赤津1号墳が今回報告する埴輪の出土地としておきたい。

4. まとめにかえて

山口コレクションにある安原朝日出土の埴輪は、和歌山市朝日にある赤津1号墳から出土資料と判断した。箱式石棺を埋葬施設とする古墳であるが、墳形や規模についてはわかっていない。

石棺から出土した須恵器が不明であるので、古墳築造時期を確定できない。しかしながら、今回紹介した円筒形埴輪から古墳時代中期末から後期初頭の年代を与えることができた。

今後はさらなる検討を加え、箱式石棺墳に伴う埴輪の様相や系譜の問題など明らかにしたいと思う。

最後になりましたが、掲載にあたり和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の蘇理剛志さんや資料調査では萩野谷正宏さんには大変お世話になった。記して感謝の意を表します。

【註】

- 1 山口コレクションは、平成16年度に御子息の山口右二氏から紀伊風土記の丘資料館に寄贈され、中村貞史氏によって内容確認・台帳整備が進められ、平成21年3月25日に所蔵者山口右二氏から寄贈手続きを完了した（和歌山県立紀伊風土記の丘 2009）。
- 2 伊勢田進氏は、昭和28年7月初旬に和歌山市の県立図書館において開催された考古学展で列品されている岩橋千塚古墳群から表採された形象埴輪を『若木考古』に資料紹介している（伊勢田 1952）。
- 3 巽三郎氏が山口善一氏資料を紹介する報告が下記の雑誌に記載されている。
 - ① 巽三郎 1962「和歌山県下の形象埴輪について(一)」『熊野路考古』1 南紀考古同好会
 - ② 巽三郎 1962「和歌山県下の形象埴輪について(其の二)」『熊野路考古』2 南紀考古同好会
- 4 羯磨正信氏は、『紀伊考古図録』（和歌山県教育委員会

1955)の中で、「花山古墳出土のもので現存長 37 cmの挂甲を表現したと考えられる小型埴輪で、二重の線と 2 個の押突点は、挂甲の小札を糸か革で威した痕を示したものである。」と報告している。

5 コンテナには「関西大学考古学資料カード」が入っていることから整理の際に処分した紙箱をラベルとしたと考えた。カードには「安原・朝日／(字)城野」と書かれている。

6 朝日出土埴輪の実測作業は、2012 年 1 月 8 日から数度実施している。実測にあたり紀伊風土記の丘資料館の学芸員のみなさんにお世話になった。

【参考文献】

- 伊勢田進 1952 「和歌山発見の埴輪」『若木考古』17
- 巽三郎 1962 「和歌山県下の形象埴輪について (一)」『熊野路考古』1 南紀考古同好会
- 巽三郎 1962 「和歌山県下の形象埴輪について (其の二)」『熊野路考古』2 南紀考古同好会
- 河内一浩 1988 「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集刊行会
- 河内一浩 2011 「和歌山市・鳴神埴輪窯の再検討ー紀伊の後期円筒形埴輪ー」『堀田啓一先生喜寿記念献呈論文集』堀田啓一先生喜寿記念献呈論文集作成委員会
- 樋口隆康、西谷真治、小野山節 1959 『大谷古墳』京都大学文学部考古学研究室
- 和歌山市文化体育振興事業団 1997 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 4』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2012 『平成 22 年度紀伊風土記の丘年報』第 38 号
- 和歌山県教育委員会 1955 『紀伊考古図録』
- 和歌山県教育委員会 2020 『埋蔵文化財地名表』

熱田神宮所蔵獅噛大刀出土古墳について

—伝紀伊出土の信憑性—

河内 一浩

1. はじめに

筆者の測量野帳№408 の平成 29 年(2017)3 月 27 日のページに“伝伏虎城付近から出土している獅噛環頭大刀”のメモがある。^{註1}内容は、穴沢啄光、馬目純一両氏の「獅噛環刀試考」(穴沢他 1979)の論文に掲載された昭和 52 年(1977)現在の出土集成目録からの忘備メモである。加えて、『常陸梶山古墳』(大洋村教育委員会 1981)の報告書に掲載されている「梶山古墳出土獅噛環式環頭大刀をめぐって」の一文を書き写している。

伝伏虎城付近出土の大刀は、現在愛知県名古屋市の熱田神宮宝物館が所蔵されており、詳細を「獅噛環刀試考」の著者の穴沢さんに問い合わせたところ、大刀は平成 29 年 5 月 31 日まで公開されているとの案内と参考文献である『中日新聞』のコピーをいただいた。

すぐさま筆者は現地へ向かい、穴沢さんの紹介で熱田神宮文化部文化課の課長を訪ねた。お会いしてその来歴を伺ったところ、熱田神宮宝物館では、環頭大刀の保存箱に和歌山城付近より出土と記された付箋があるのみで、詳細不明であるとのことであった。この日は、獅噛環頭大刀の観察を実施するとともに出土地の検討を進めることになった。

本稿はその忘備録でもある。



図1 熱田神宮宝物館近景

2. 熱田神宮の伝紀伊出土大刀

平成 29 年 4 月 28 日から同年 5 月 30 日まで熱田神宮宝物館にて 5 月平常展「熱田神宮宝物展」の「コーナー展示 熱田の武器武具」において獅噛式環頭大刀と双龍環頭大刀の 2 点が展示されていた(熱田神宮宝物館 2017)。資料の実見は、同年 5 月 27 日に実施し、図 2 はその際野帳に記した略図を基にトレースした図である。^{註2}

大刀は、環頭部と刀身部が分離しているが獅噛式の柄頭は形態がよく保存されている。環部には走龍文が見られ、外面の金装も鮮やかに遺存している。柄頭筒金具は八角形で、帯金具とともに比較的残りが良い状況にある。その法量は、柄頭部の現長が 9.8 cm で、鞘拵部の現長が 81.5 cm である。舶載品と思われる。

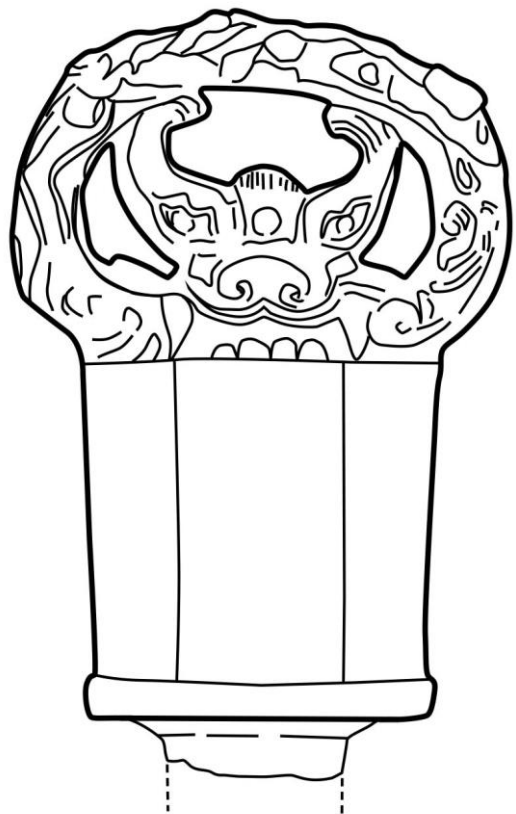


図2 熱田神宮宝物館所蔵の獅噛環頭

双龍環頭大刀は、獅嚙式環頭大刀と同様、和歌山城付近より出土したものとされ同一古墳の副葬品かは不明である。保存処理のX線調査で、柄頭部と刀身部は後世別のものを継ぎ合わせていることが判明している。把の金装は鮮やかに遺存している。龍を透かし彫りにした環頭の内には二匹の龍が向かい合う形で表現されている。

また把の鞘口金具には二重の連珠文の間に半円文を二段に刻み、環頭部と同じように金張りが観察できる。

3. 出土した古墳について

上記環頭の出土地については、穴澤さんからご教示を得た『中日新聞』の昭和 52 年(1997)7 月 19 日付け夕刊の記事から大略を知ることができる。

記事によれば、①熱田神宮宝物館が所蔵する環頭は愛知県在住の画家が寄付したものであること。②環頭は、その画家の両親が明治 36 年 4 月に和歌山市の伏虎城の近くにある古墳発掘品を所蔵していた。ということが分かった。

確定はできないものの、伏虎城とは和歌山城を指し、その近くの古墳で明治時代後半に出土したとなると、考えられるのは和歌山市にある岩橋千塚古墳群の発掘品であると推定するに至ったが、副葬されていた古墳の特定はできなかった。

ところが、令和 3 年になって宮田啓二氏の花山古墳群など踏査や聞き取り報告が紀伊風土記の丘の学芸員によって紹介された(石丸他 2021)。その報告に花山 9 号墳から環頭大刀が発掘されていることが記載されていた。^{註 3}

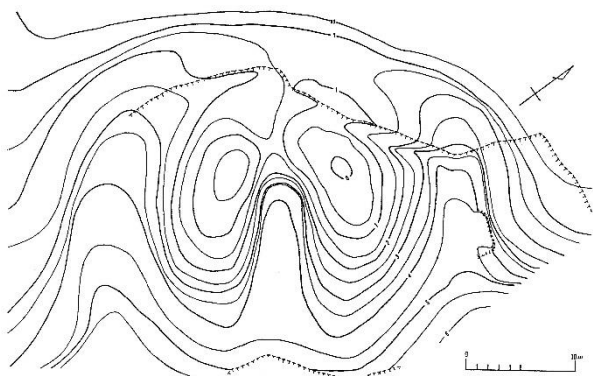


図3 花山9号墳墳丘図(『岩橋千塚』より)

花山 9 号墳は、花山丘陵の中央に位置し、花山 12 号墳から南に延びる尾根に存在していたが昭和 40 年に墳丘崩壊のため消滅している。図 3 は、昭和 39 年に関西大学考古学研究室が実施した墳丘測量の実測図である(関西大学考文学部古学研究室 1967)。報告書には、径約 30m の円墳であり、その周囲に幅約 4m、深さ約 1m の空堀の存在を記している。崩壊前の墳丘は、南では約 5m の高さがあり、南東方向に開口する全長 7 m 以上の横穴式石室の残骸を確認している。石室は、「1.35m の羨道幅を持ち、天井石が 3 枚残存していた。羨道、玄室前道、玄室からなる平面プランを呈する。羨道左右壁に玄室前道の南端から 1.15m 部分に柱石があり、扉石を立てるための 15 cm 程度の出っ張りが認められた。幅 85 cm を測る玄室前道をもち、玄室の幅は約 2.8m を測る。」と記録にある。^{註 4}

宮田メモにある花山 9 号墳も高さ 10m の大円墳と記し、明治 30 年代の発掘状況の聞き取りから西に開口する横穴式石室を描いている。さらにメモには、「玄室には 60 cm ほどの高さがある板石の仕切りがあり、遺骨がのった板石が存在した。」という。さらに、「副葬品は羨道に多数の土器が配置され、羨道壁にそって刀剣類が認めた」とある。

宮田氏のメモに花山 9 号墳の埋没していた長剣直刀一振があり、図と聞き取り文を以下に引用する。

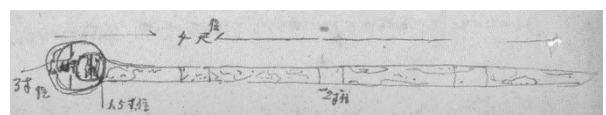


図4 獅嚙環頭聞き取りによる宮田氏のメモ図

「図は発掘者の語るところにしたがい、(宮田が※筆者註)大要を描写したものであるが、柄頭は径 3 寸の(外力)縁の 両側方より二龍の対向図様があり、その内円に径 1.5 寸のマリ状をなした球面に鬼面を刻していた。マリ状のものは中空で、刀身は真直であり且つ銹化していたが折れてを(お※筆者註)らず幅 2 寸許りの青銅鍍金の帯が 3 ヶ所にあり総 長は四尺許り。この帯金具は、偏六角形をなし、その下に木片の腐朽付着していた。(六角)形を成していた帯金具は(鐔力)については記憶な

く且つこじりにあたる部面の金具は無かつたと語っている。」

以上であるが、二竜とあるのが双龍環頭のことで、鬼面が獅嚙式の環頭であろう。

したがって、熱田神宮宝物館が所蔵の環頭は花山9号墳の発掘品と考えると誤りはなかろう。

5. まとめにかえて

熱田神宮宝物館に所蔵されている獅子嚙大刀と双龍大刀が和歌山県出土という伝聞から、いくつかの資料を検討することにより和歌山市花山にあった花山9号墳の出土品であることが追及できた。今回その来歴が判明した経緯を忘備録として留めておく。

また筆者は、刀剣類は専門外なのでいずれ武器研究者による調査報告を待ちたい。

最後になりましたが、掲載にあたり和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の蘇理剛志さんや金澤舞さんには大変お世話になった。また、佐賀大学の藤井康隆先生には何かと刺激やご教示をえています。記して感謝の意を表します。

【註】

- 1 このメモが書かれた経緯が野帳には無いが、この2ヶ月後に穴沢さんからお手紙をいただいていることから出土地の問い合わせにメモした可能性が高い。
- 2 野帳№413 に記録。柄頭部分と大刀の全体図を描いている。観察は写真撮影していないため色鉛筆による彩色図となっている。
- 3 宮田氏関連資料は、和歌山県立紀伊風土器の丘が所蔵されており、令和3年12月3日に資料調査を実施した(野帳№589)。調査にあたり金澤舞さんの手を煩わせた。
- 4 『岩橋千塚』には墳丘が崩壊した後に大野嶺夫氏が崩壊した土砂から須恵器の杯と鉄刀を採集されていることを報告されている。

【参考文献】

熱田神宮宝物館 2017「5月平常展-熱田神宮宝物展-」『熱田神宮宝物館だより』№217 熱田神宮宝物館
穴沢啄光・馬目順一 1979「獅嚙環刀試考」『信濃』31-4(信濃史学会)初版。1985年改稿版が、斎藤忠編集 1987「獅

嚙環刀試考(改稿版)」『日本考古学論集』8(吉川弘文館)に所収。

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・中原知之 2021

「宮田啓二「昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調」『紀伊風土記の丘研究紀要』第9号和歌山県立紀伊風土記の丘資料館

大洋村教育委員会 1981「梶山古墳出土獅嚙式環頭大刀をめぐって」『常陸梶山古墳』

関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会

〈追記〉

脱筆後、筆者の花山ファイルに大野嶺夫氏の撮影なる花山9号墳の羨道部の写真があるのに気づき、参考までにここに紹介しておく。



雑賀崎の漁業史（1）

— 一本釣り漁師への聞き取り調査から —

池田 佳祐 萩野谷 正宏

はじめに

雑賀崎は和歌山市の西南部に位置し、雑賀山の南斜面に漁村集落が展開し、その南側に雑賀崎漁港が位置している。

本稿執筆者の一人である池田佳祐は、現在雑賀崎で漁業と宿泊業「新七屋」を営み、漁船「健勝丸」で小型底引網漁を行うとともに、雑賀崎の歴史や伝統文化を研究する。池田の祖父・健一氏（昭和7年11月生）は、曾祖父とともに12歳から20歳頃まで「サゲブネ」（写真1）によるタイ一本釣り漁に従事していたが、その後は底引網漁へ転換し長年にわたり漁業を営んだ。底引網漁は現在の雑賀崎の主要な漁法となっている。また、昭和20年代まで西は九州から、東は志摩半島の浜島までの旅漁を経験しており、当時の出漁の詳細や、漁法、雑賀崎の「カタフネ」や「連中」と呼ばれる制度についての情報は、当該地域の漁業史を知るうえで極めて貴重である。

このため、和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員萩野谷正宏・蘇理剛志と共同で聞き取りを行った。その成果は、和歌山県立紀伊風土記の丘特別展『海に挑み、海をひらく—きのくに七千年の文化交流史—』（2021年）の展示及び展示図録で公表されている。

今回の聞き取り調査は2021年6月8日に実施し、その後同年8月から2022年3月に萩野谷が聞き取り記録の整理を、池田が健一氏の漁業歴の作成作業を実施した。本稿は、このうち聞き取り記録の詳細を報告し、若干の考察を加えるものである。以下、「」は池田健一氏の発言内容であるが、項目別の整理と一部ご発言への補足を（ ）書きで行っている。

1. 聞き取り記録

五島列島の出漁について

「二十歳（昭和20年代）のとき、漁船に電気チャッカー（電気着火式エンジン）を購入した。国からお金が出て。これが付いたので、九州の五島列島に行こうとなった。宇久島に三か月ほどいた。3月末ごろから6月中頃まわったくらいまで。（餌となる）小エビを（網で）引いて、宇久島へ行ったり。（自分が五島列島に行ったのは）その一年のみであった。西ノ丁、中ノ丁（など全丁）で「カタフネ」（の制度）があり、「ナカマブネ」（船団）で行った。釣った魚は宇久島の港へ卸した。タイは安いのでキロ100円くらい。九州から帰ってきたときに、底引網漁をやろうとなった。」

「五島列島（への出漁）のときは、電気チャッカーで。ひいおじいちゃん（健一氏の父）も1年しか行っていない。当時雑賀崎では（船は）10杯くらいあったが、毎年五島に行くような人はいない。いても2、3回くらいだったろう。」

「（五島列島へは）広島沖をって、九州へ行った。鳴門抜けて（徳島

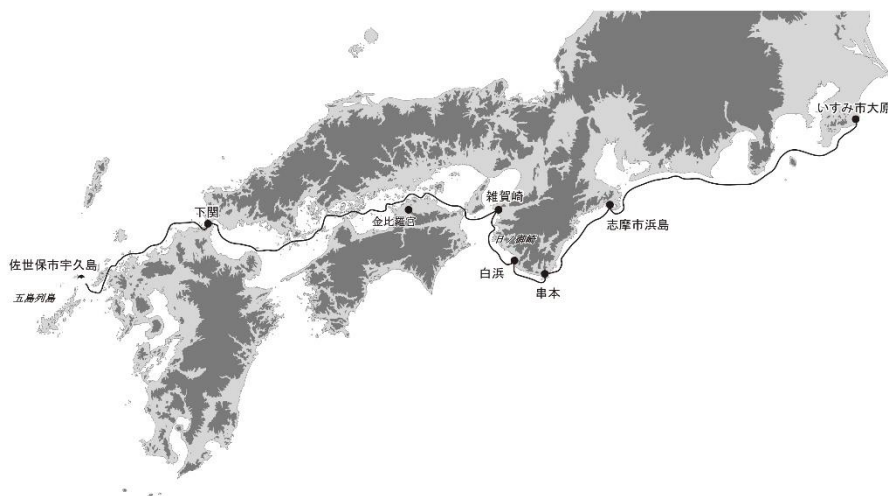


図1 雑賀崎の一本釣り漁師の出漁ルート(昭和20年代) ※原図作成:池田佳祐

県撫養のあたりで) 泊まって、高松で泊って金毘羅さん(金毘羅宮)へ参ろうかって。参ってから、(塩飽諸島を抜けて)、広島(の島)ばっかしをとおる。島に碇を打って。ずっとまっすぐ進んだら山口県下関で休憩して、福岡の北をずっとやってくるだろ、ここで泊ったんよ。ずっと下へ抜けてきて、宇久島へ。旅もえらかった。機械(電気着火式エンジン)は長いことかけるといかんから、休憩して、一週間ほどかかった。櫓を押したら1か月くらいかかるのでは。」

紀中・紀南・志摩方面への出漁について

「日御碕、田辺、白浜へタイ釣りに行った。19歳のころ、伊勢湾、(志摩半島の) 浜島まで一本釣りに行った。自分はそこまで。時期はいつでも釣る。

3月から6月が桜ダイ、普通の時は釣れない。多い時は30から40キロほど釣れる。寒い時もタイ釣りに行った。

三重県側には頻繁に行った。寝泊まりをしながら、土地で魚を売る。船に寝泊まりし、船の中でご飯を炊いた。体は水で拭いた。

一本釣りの船は2人。電気チャッカーが付いてからは2人で乗った。櫓を漕がなくていいから。(櫓船の場合は) 一人は「センドウ」で、ほかに「ナカノリ」「トモノリ」がおり、僕は「トモノリ」。「ナカノリ」はご飯を炊いたり、魚炊いたりする役目。「トモノリ」は櫓をもち船が流れないようにする。船は真ん中に生簀がある。

(志摩半島の) 浜島へは、2か月ぐらい行く。船は「サゲブネ」という。タイを釣るときは、餌を引くために小さい網が必要になる。網は長さが短く、櫓船

で引っ張った。エビの大きさは3センチくらい。カワツエビ(サルエビ)が魚はよく食うが、そんな小さい網は入らないから、ジャコを餌に使う。浜島は、友達がこっち(和歌山側)ばかりではあかんから。

新宮の沖や、(熊野市) 木本でメダイ、タイ、ハマチ、ブリをよく釣った。また下(東)へ行こうかとなった。白浜の沖でタイ釣って、すさみ沖でアカッポ(アカハタ)、メジロ(ブリの出世魚の呼称)を釣る。由良の衣奈で泊まり、そこからこっちでアカッポ釣ったり、メイチ(メイチダイ)を釣ったりした。メイチは朝の暗がりと晩。朝から晩まで櫓でこぐと、しんどかった。

機帆船が棚をあけて(櫓船を)引っ張ってくれる。12時のご飯時に魚をさばいてわたすと(その後機帆船から網を)離されてしまう。また次のが来ると、引っ張ってもらふ。そのころは櫓船だった。朝から晩まで風ない時は櫓をこぐのはしんどかった。電気チャッカーになってからは機械で走った。」

「日ノ御碕へ行くにも風なかったら櫓でおした。ちいと風きたら帆をひいて楽だったけど。日ノ御碕は、(日帰りではなく) あちこち泊った。魚が喰わなくなったら場所をかえる。何日間もかけて漁をした。一回出たら、10日でも20日でも行った。印南沖やら。機帆船でつないでもらい帰ってくる。

(つないでもらうときは合図で) 網をあげた。機帆船に網で引っ張ってもらうために(対価として) 魚をあげた。網を離されたら、(機帆船が) 来たら引っ張ってくれと頼んだ。

魚はあっち(出漁先)で売るし、生簀で持って帰ったり。売ることが多かった。やっぱり生簀にいと死ぬから。(日御碕までの時間は) 帆や櫓でいくから。半日ではきかない。時間は風の加減で違う。風の加減がよければ、一日もかからない。朝出たら、2時ごろには着いている。」

「漁師の活動範囲は、自分で好きなだけ。日御碕ばかりの人もいれば、それから下に行く人、僕なら(志摩半島の) 浜島まで行った。そこから千葉県まで行く人もいる。そのころは機械が大きかったから千葉まで行った。」

漁具の管理と漁法について

「カブラ」(一本釣り用の釣針)は鉛で、手作りだ



写真1 一本釣り師のサゲブネ(人物は池田健一氏の父)

った。材料は鉛を溶かし型にいれる、真ん中を切って、ひもを中に入れて叩いて製作した。針とひもは、温めている時に切る、それで針とひもをつける。それから叩いた。テグスに錘を入れて「もむ」。竹（製の道具）でもんで。そのままでは口が開いているから、もむとまん丸になる。みんな勉強やったよ。

テグス（写真4）はナイロン（製）。僕らははじめからナイロンだった。柿渋で染めておいといて、学校行って、戻ってきてからまた道具を。糸は40尋もあれば30尋もある。深さによる。」

「アオリイカの釣り（写真3中・右）は、片方の手をつかって（仕掛けを）引きながら、もう片方で櫓をもって、船をこぎながら釣る。タイを釣るときの深さは、30尋の底になったら、タイは、そこにはいない。20から25尋くらいのところにいる。イカは浅いところにいる。」

「これ（写真3左上）は別の魚を釣る道具。アジとかサワラとか。船を止めて、糸をたぐる。」

底引き網について

「底引き（網）をはじめたのは21歳。九州から帰ってきてから。」

「底引き（網）は、エビやいろいろ入っているか

ら。タイは安くなってきた。昔でもキロ100円。

うちの丁（池ノ丁）で10杯、中ノ丁5杯、西ノ丁で6・7杯、東ノ丁で3杯くらいが底引き網（船）に変わっていった。そこからぼちぼち増えて103杯に増えた。その頃は一本釣りもようけあった。底引き網も年いってやめてきた。

「カタフネ」、「ナカマブネ」の習慣は、今はなくなった。（佳祐氏の）父親のころまで。みんな他人同士、都合悪くなると喧嘩。そんな時分からやめていった。他人同士でも「ナカマブネ」でやった。業種がかわるとそのつながりも変わる。」

「連中」「朋輩」について

「友達は、中ノ丁でも東ノ丁でも知っている。もともと「連中」。若者組、みんなかたまって、うちに来て一杯飲んだり、遊んだり。「連中」は、同じ丁の同じ年ごろばかり、入ろうかとなって。18歳ぐらいから。学校卒業して、漁師やってから。

女性の仲間は「朋輩」と言う。「連中」は屋号をつける。うちは「新七連中」となる。（「連中」の制度は佳祐氏の）父親の世代が最後だ。現在61歳。40年くらいまえまで、「連中」や「朋輩」の習慣はあったな。

「カタフネ」は「連中」とは別。九州行ったのはみんな他人同士。「ナカマブネ」でいった。中ノ丁なら中ノ丁、西ノ丁なら西ノ丁で丁ごとに5人なりがかたまってやった。「ナカマブネ」は船に泊った。水がほしい時、よそで洗濯するときは、井戸水を組んで船に置いといてやった。昔はしにくかった。（出漁先の）あっちで釣って、こっちで釣ってとやってたら、釣りすぎたらおまえらけんかになる。ナカマブネなら、なにもゆうことないで。それでようけ（たくさん）かたまって行った。」



写真2 池田氏所蔵の漁具
（左下：タコ釣用 中下4点：カブラ（タイ用釣針））



写真3 池田氏所蔵の漁具（左上：サワラ用 中・右：アオリイカ用）



写真4 池田氏所蔵の漁具（ナイロンテグス）

「学校行きもって苦労したよ。僕は5年生のころから、ずっと釣りについていった。印南沖やら、小さい頃からは行った。僕は「ナカノリ」で魚を炊いたり、後ろで「トモノリ」が（櫓を）押して。

家の船は、父子ともう一人雇った。「ナカマブネ」の他は他人。タイを釣らないとお金にもならないし、苦労した。漁師も難しかった。釣らなんだらお金にならん。それで場所を変えたり。」

千葉方面への出漁

「(当時千葉方面への出漁する漁師がいたのは)アカッポやらメダイがよう食うから。東京のほうは「アカッポ」は売れなんだ。(関西では売れるが) 向こうでは売れない。行って一週間でもどっていった。釣っても売れやんかった。勝浦とか(いすみ市) 大原とか。売れやんなら金にならん。行って、あっちで亡くなったりした人もいる。僕らよりだいが上の世代では。関東に移り住んだ人もいた。

雑賀崎のひとは、千葉でもどこでも行った。そうやってひらいてきた。

一番遠くまで行った人は、千葉県まで。千葉県までは(船)10杯ほど。同じ宿にいる。そのときは、今と違って、雑賀崎でアジ、イサギとかよう釣れたけどな。こっちもぼちぼち食わんから、あっち(関東)で釣れるっていうから、いっぺんいってみようかなと。行ったけど、釣っても売れやんということで。」

2. まとめ

以上の聞き取り記録からは、戦前から戦後にかけての遠方への出漁の様子や、昭和20年代における小型船の動力化と底引き網漁への転換など雑賀崎における漁業史の一旦を垣間見ることができる。

雑賀崎の近代の漁業については「雑賀崎漁業組合調査」(大正6年10月末)に詳しい記録がある(『和歌山市史 第八巻』昭和54年発行)。これによれば、雑賀崎における一本釣りの漁法は江戸時代にさかのぼるとされ、伝承によれば、当初は手繰網漁から縛網漁に移行し、その後延縄漁に移るが、調査時の大正期より二百年前頃に一本釣り漁に転じたとされる。大正期の一本釣り漁の対象魚種は、タイ・サワラ・アジ・サバなどであった。当時よりその漁労技術は

「其漁撈ノ手挽ト経験ハ夙ニ天下ニ宣伝セラルル」ものであり、全国にその名を知られていた。また、一本釣りを主体にしつつもイワシの巾着網や縛網、磯建網を兼業していたようだ。

また「雑賀崎漁業組合調査」の「出稼出漁の起原」には「明治十二年頃組合員漁船数隻土佐ニ出漁セシヲ嚆矢トシ、明治二十年四月福岡・佐賀・長崎ニ遠航出漁ヲ開始シ、三重南牟婁郡及徳島県海部郡方面の出漁ハ、接続又ハ対岸ノ事トテ其起原百年前ニアリ」とされる。調査当時の大正期には福岡・佐賀・長崎・徳島県沿岸や三重県沿岸への出漁が常例となったとある。

このように、雑賀崎漁民の出漁は江戸時代以来、明治・大正期に盛んであった。したがって、今回池田健一氏から伺った昭和20年代頃の五島列島や紀伊半島各地への出漁体験は、伝統的な旅漁を生業とした最後の世代の話として、極めて重要である。

今後も、漁業歴の報告や、聞き取りの継続により、雑賀崎の漁業史について考察を深めていきたい。

末筆ながら、聞き取りにご協力いただいた池田健一氏に御礼申し上げます。



写真5 網の手入れ(左)と船上での魚の下処理(右)風景



写真6 聞き取り風景 (右 池田健一氏)

【資料紹介】 柳川コレクション資料目録（3）

—陶磁器類を中心に—

蘇理 剛志

本稿は、平成 27 年度に海南市黒江の柳川和一郎氏と柳川泰彦氏のご厚意により当館に寄贈いただいた同家の生活用具及び商い用具の中から、現段階で整理の終わった資料の目録と写真の一部を掲載するものである。

なお、本稿はさきに平成 27 年度『研究紀要』第 5 号所収の藤森寛志報告（2017）、令和元年度の同紀要第 9 号所収の蘇理報告（2021）の続編であり、目録の資料番号もこれに継ぐ形で、ID〔柳川-213〕以降の経過を別表のようにまとめた。

とくに今回は、寄贈コレクションのうち柳川家で使用されていた陶磁器類を重点的に整理し、過去の整理調査の成果を含めて陶磁器資料の概要が紹介できるようにした。

1. 柳川家旧蔵の陶磁器類

現在整理中である柳川家旧蔵の生活資料の点数はおよそ 300 点を超えるとみられるが、そのうち陶磁器類の総計は前回・今回の整理で 84 件あることが確認できた。これは、柳川コレクションの資料中で主要な群をなす漆器類に次ぐ規模の群をなしており、主として柳川家の普段の生活や年々の行事の場において使用された生活道具として位置づけられるものである。

それら陶磁器類の数を便宜上用途別に分類すると、次のようになる。なお、資料中には一箱に数種類の器が収められる場合があるが、その際は容量の多いものに換算した。

・皿・鉢類	34 件	
・碗・丼類	20 件	
・猪口・酒器類	14 件	
・茶器・菓子器	9 件	
・花器類	4 件	
・その他	3 件	合計 84 件

これらのうち最も多いものは皿・鉢類（34 件）である。柳川家旧蔵の皿は、大きさや用途によって大皿、中皿、小皿と呼ばれるほか、皿に盛られる料理によって膾（なます）皿、すし皿、さしみ皿、漬物皿などと呼ばれたことが収納する箱書きによって判る。

それぞれの皿は、使われる場面にあわせて大きさや図柄を選びながら使用されたが、多くは数点～20 点程度の揃い物であり、行事や宴会などで使用された有田焼（伊万里焼）や九谷焼などの高級な磁器皿も含まれる。

普段使いの皿鉢類は数種類を一括して木箱に収めるなど〔柳川-228〕して、それぞれ元の箱から少しずつ取り出して使用に備えた形跡もみられる。

碗・丼類（20 件）についても多くは磁器で、皿類と同様に普段用と宴会用が混在する。一般的な飯茶碗は少なく、高級な蓋付き茶碗や蒸茶碗が残っていることから、各時代に宴席などでの会食に使用するため誂えたものが伝来すると考えられる。これらは、先に整理した漆器の碗や折敷と組み合わせて様々な食事の場面に応じた使用がなされたと思われる。

猪口・酒器類（14 件）は、食器にも使用される猪口やぐい飲み、盃洗などで、儀礼や行事に用いたほか、盃は記念の贈答品としても用いられた。このうち珍しい蒸留器「らんびき」については後述する。

茶器・菓子器類（9 件）は、茶道具、煎茶器一式、急須、湯呑み、銘々皿、菓子器などがあるが、これらも漆器と組み合わせて使用されたと考えられる。

中には江戸末～大正期に作られた摂津の古曽部焼の品が数点伝わるなど、柳川家代々の家人の好みなども反映されている。

花器（4 件）は、家内を飾る生け花などに使用された器、または慶弔の贈答品である。

このほか、その他（3 件）として陶製の汁注ぎ、普段用に用いた皿や丼、茶碗、盃などの食器類（雑）、昭和 20 年代製の磁器灰皿などがある。

2. 注目されるもの

柳川コレクションの陶磁器類には、納められた木箱の一部に内容物の名称のほか年号が墨書されているものがあり、柳川家の生活用具の変遷をたどるための歴史資料としての価値も持っている。

また、箱書に年号がない場合も、江戸期の柳川家の屋号である「岩出屋平兵衛」が墨書されたものは、近世まで遡るものである可能性が高い。

(1) 江戸後期～明治期の肥前系磁器

年号のある磁器のうち、最も古いものは天明 8 年 (1788) 箱書銘のある膾皿 [柳川-132,150] である。皿の見込みには松の古木に籠を乗せる老人の図、周縁に芭蕉や橘のある楼閣を描く染付八角膾皿が合計 19 枚収められている。木箱には「天明八年申九月吉日／膾皿貳拾人前内／岩出や平兵衛」の墨書があり、もとは 20 枚あったことが確認できる。

この頃は、柳川家 3 代目にあたる初代平兵衛 (1726～1791 年没) が在世した時代である。柳川家は、当代から「岩出屋平兵衛」を名乗り延享・寛延のころ (1744～51) から椀や折敷など黒江で生産される漆器を商っていた (柳川 1969)。この膾皿は、そうした時代に入手したものであることが判る。なお、旧柳川家資料には同年に作られた漆器の金柑絵銘々盆 [柳川-201] も伝わっており、この頃に同じく用いられた生活道具の一つであると考えられる (蘇理 2021 参照)。

柳川家など黒江で商っていた漆器は、江戸送り船で輸送されたほか、江戸中期から明治 30 年代まで有田郡箕島 (宮崎) を拠点とする陶器商人がこれを仕入れ、廻船により九州方面に輸送・販売した。さらに宮崎商人はそれで得た利益で肥前国伊万里湊において有田焼 (伊万里焼) の磁器を仕入れ、江戸期は紀州藩の庇護のもと関東方面で陶器商いを行う販路をもっていた (紀伊風土記の丘 2021)。

柳川家に伝わったこの天明 8 年銘膾皿も小品ながら手の込んだ良質な伊万里焼であり、黒江と伊万里とを結ぶこうした商慣行の流れにおいてもたらされた品である可能性が高い。

なお、柳川家の陶磁器にはこれ以外にも近世後期から明治期にかけて 19 世紀の年号を箱書銘にもつ磁器など 25 点を数え、この中に有田焼の染付や色絵

磁器が含まれる。ただし箱書の無いものの中にも、状態からみて同時代の有田焼と思える磁器がまだ数点存在し、今後も調査が必要である。

(2) 蒸留器らんびき

柳川家に伝わった陶磁器のなかでも珍しい品物として、家庭用小型蒸留器である「らんびき」がある [柳川-098]。箱書には「蒸留器／明治廿三年第壹月于之／柳川氏」とあり、1890 年に柳川家にもたらされた。

「らんびき」は、西洋で用いられたアランビック蒸留器 : Alambic が和語転訛した名称で、江戸時代から明治時代にかけて薬油や酒類を蒸留するために日本でも用いられた。日本製のらんびきは陶製の器が三段重ね構造になっているのが特徴である。このうち最下段は「加熱槽」で抽出原料と水を入れて火鉢などで加熱する。ここから水蒸気とともに上昇した精油やアルコール成分が、穴の空いた中段を通過し、冷水を入れた最上段の「冷却槽」の底部に当たって冷やされ、中段にある「回収槽」に露となって樋に溜まり、管を通して外に置いた容器に流れ込む仕組みになっている。

らんびきは高さ 39 cm あり、器具の全面に梅花文様が描かれ、座敷の調度にも相応しい華やかな印象があるが、抽出液を大量に精製するのには適していない。らんびきは主として家庭用のバラ水などの化粧用香水や植物精油、古酒を用いて蒸留酒を製造したことが知られ、医家や薬種屋、上流家庭の茶席などで使われたが、柳川家での使用法は現在のところ不明である。

らんびきの製造地は不明だが、和歌山県下ではこの資料以外には確認されておらず、明治期の商家の暮らしの一端がうかがい知れる資料となっている。

3. まとめにかえて

以上、今回は柳川コレクションのうち陶磁器類を中心に小括したが、柳川家に残されたこれらの資料は黒江の漆器商いと営んだ当家の江戸時代後期から昭和 50 年代に至るおよそ 200 年近い一商家の暮らしの一端を垣間見る内容を持ち、紀北地域の町場の生活の変遷を知ることができる貴重な資料群となっている。

紀伊風土記の丘には、柳川家4代目平兵衛(二代)の代にあたる文化4年(1807)に建てられた旧柳川家住宅が移築保存されているが、この陶磁器類も柳川家の家人の暮らしを長く支えてきたものであり、時代ごとの家人の配慮のほか、嗜みやゆしみも感じさせるものである今後も、これらの資料を詳しく調査することによって、黒江商人(あきゅうど)の暮らしぶりが窺い知れるようになろう。

なお、同コレクションには、このほか衣食住の生活用具、商い関係の道具が残される。今後も、継続的にそれらを種類別に調査・整理・報告をしながら、柳川コレクションの民俗資料としての価値づけと、資料に関する保存と活用について考えていきたい。

参考文献

柳川和一郎 1969 『海南市黒江川端通り 一商家のことども』 私家版

和歌山県文化財研究会編 『重要文化財 旧柳川家住宅(主屋・前蔵)／旧谷山家住宅移築修理工事報告書』 1971

藤森寛志 2017 『【資料紹介】柳川コレクション資料目録(1)』 『紀伊風土記の丘研究紀要』第5号

蘇理剛志 2021 『【資料紹介】柳川コレクション資料目録(2)一漆器類を中心に一』 『紀伊風土記の丘研究紀要』第9号

県立紀伊風土記の丘 2021 秋期特別展『海に挑み、海をひらく一さのくに七千年の文化交流史一』 展示図録

表 柳川家資料目録(No.213—259)

ID	名 称	素材	点数		時 代	西 暦	備 考
			件	点			
柳川-213	膾皿	磁	1	10	—	—	箱書に「山形屋伴助」、002と同一(古伊万里か)
柳川-214	膾皿	磁	1	8	—	—	002・213と同一(古伊万里か)
柳川-215	すし皿	磁	1	12	天保2年	1831	1枚欠損あり(古伊万里か)
柳川-216	すし皿	磁	1	13	天保2年	1831	215と同一(古伊万里か)
柳川-217	井(染付井)	磁	1	3	文政2年	1819	
柳川-218	焼物皿	磁	1	11	天保2年	1831	
柳川-219	色絵皿(古伊万里金縁錦絵鯉皿)	磁	1	20	—	—	(古伊万里か)
柳川-220	猪口、湯呑、碗蓋	磁	1	19	—	—	(古伊万里か)
柳川-221	中皿(染付八稜花皿)	磁	1	10	—	—	(古伊万里か)
柳川-222	中皿(染付八稜花皿)	磁	1	10	—	—	221と同一(古伊万里か)
柳川-223	蒸茶碗(錦絵蒸茶碗)	磁	1	10	明治32年	1899	115と同一
柳川-224	中皿(藍中皿)	磁	1	15	—	—	(古伊万里か)
柳川-225	小皿2種(菊・富士)他	磁	1	40	明治10年	1877	
柳川-226	猪口(松竹梅)	磁	1	15	明治32年	1899	(古伊万里か)
柳川-227	中皿(錦絵中皿、葡萄栗鼠)	磁	1	19	明治35年	1902	
柳川-228	食器類(雑)	陶・磁・プラ	1	42	明治～昭和	—	大皿、井、茶碗、碗蓋、盃、小鉢、蓋物、かわらけ、貝合せ、香炉、カップ、シュガーボット等
柳川-229	煎茶碗(唐竹茶碗)	磁	1	44	明治12年	1879	
柳川-230	小皿(三寸五分)	磁	1	31	明治32年	1899	
柳川-231	井鉢(るりやき井鉢)	磁	1	3	—	—	
柳川-232	蓋付き茶碗	磁	1	10	—	—	
柳川-233	三つ井(雑)	磁	1	3	—	—	箱違い?「南京井」ツ入り
柳川-234	三つ井(錦絵井)	磁	1	3	明治33年	1900	
柳川-235	猪口	磁	1	18	—	—	箱違い「御膳箱」寛政3年
柳川-236	蒸茶碗	磁	1	5	—	—	
柳川-237	猪口(錦絵)	磁	1	14	明治10年	1877	

ID	名 称	素材	点数		時 代	西 暦	備 考
			件	点			
柳川-238	猪口(雑)・箸置(扇)	磁	1	21	-	-	
柳川-239	猪口(雑) 他	磁	1	13	-	-	
柳川-240	花瓶	磁	1	1	-	-	
柳川-241	蓋付き茶碗	磁	1	10	-	-	
柳川-242	蓋付き茶碗(蘭模様南京茶碗)	磁	1	9	明治25年	1892	
柳川-243	空箱(小皿二十枚)	磁	1		明治38年	1905	
柳川-244	爛徳利(雑)	磁	1	7	-	-	栓3つ付き
柳川-245	花瓶(御所車耳付花瓶)	磁	1	1	-	-	三山窯
柳川-246	盃 色々(雑)	磁	1	52	-	-	
柳川-247	灰皿	磁	1	5	昭和25年	1950	
柳川-248	煎茶器(九谷焼)	磁	1	7	-	-	
柳川-249	向付皿(舟形)	陶	1	4	-	-	
柳川-250	茶漬碗蓋 他	磁	1	26	嘉永3年	1850	
柳川-251	茶漬茶碗(雑)	磁・陶	1	9	明治39年	1906	
柳川-252	急須	陶	1	1	-	-	備前焼か、箱違い(染付)
柳川-253	雑器類(茶器、銅器、棗他)	陶・磁・銅・漆	12	21	-	-	陶磁器5件(248の同類品含む)、銅製花入、銅仏、銅製蓋置、貝香合、棗等
柳川-254	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の1)	磁	1	40	昭和58年	1983	
柳川-255	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の2)	磁	1	—	昭和58年	1983	254と同一品、未開梱
柳川-256	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の3)	磁	1	—	昭和58年	1983	254と同一品、未開梱
柳川-257	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の4)	磁	1	—	昭和58年	1983	254と同一品、未開梱
柳川-258	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の5)	磁	1	—	昭和58年	1983	254と同一品、未開梱
柳川-259	皿・小鉢(錦絵揃皿小鉢:6の6)	磁	1	—	昭和58年	1983	254と同一品、未開梱



【柳川-150】 膳皿 (天明 8 年)



【柳川-218】 焼物皿 (天保 2 年)



【柳川-221】 中皿 (染付八稜花皿)



【柳川-223】 錦絵蒸茶碗 (明治 32 年)



【柳川-098】 らんびき (明治 23 年)



【柳川-098】 らんびきの各部品

紀伊風土記の丘松下記念資料館の建築をめぐる

—理念と意匠、その誕生の秘密—

田中 元浩

1. はじめに

紀伊風土記の丘は、特別史跡岩橋千塚古墳群とその周辺環境を保全・管理するため、昭和 47（1971）年 8 月 2 日に開園し、令和 3（2021）年には開園 50 周年を迎えた。そして、紀伊風土記の丘とともに築 50 年が経過した松下記念資料館は、そのメインエントランスとして、また園内の中心施設としてこれまで多くの来館者を迎え、考古資料や民俗資料を展示してきた。

松下記念資料館は、海草郡和佐村（現和歌山市禰宜）出身である松下幸之助の寄付を受けて建設された。設計は、倉敷を中心に伝統的な街並みと調和する近代建築を追求した浦辺鎮太郎の手による。また、設計理念には、大阪府日本万国博覧会（以下、70 年大阪万博とする。）の基本構想を手掛けた西山卯三を中心に策定された『「紀伊風土記の丘」基本計画』（マスタープラン、以下、基本計画とする。）が根底にある。建築には岩橋千塚古墳群との景観の調和が図られるとともに、古墳群や考古学に関わる多くの意匠デザインが取り入れられている。

紀伊風土記の丘の建設については、これまでも、紀伊風土記の丘の沿革をはじめとし（紀伊風土記の丘 1972）、建設初期から県担当者として関わった小賀直樹がその経緯と経過まとめている（小賀 2010）。そのほかにも紀伊風土記の丘開園 40 周年時にまとめられた写真集（紀伊風土記の丘 2012）、中村浩道による基本計画についての紹介がある（中村 2017）。

しかし、松下記念資料館については、建築に関する紹介があるが（浦辺 1972、西山 1973、栗田 1973、平田 2019）、現代建築であるがゆえに当時の理念や意匠、建設時の背景を検討した研究は多くはない。

そこで、本稿では開館 50 周年を迎えたこの機に紀伊風土記の丘に残された開館に係る当時の図面や資料、関係者への聞き取りに基づき、松下記念資料館の建築や意匠、建設に関わるエピソードを紹介したい¹。

2. 建築としての松下記念資料館

（1）松下記念資料館の建築

松下記念資料館の設計は、同時代のポスト・モダニズムとは一線を画し、新旧調和の実践を図る作風を持つ浦辺鎮太郎が代表を務める浦辺建築事務所による。浦辺鎮太郎の当時の代表作には、「倉敷国際ホテル（1963 竣工）」、「倉敷アイビスクエア（1974 竣工）」などがある。また、博物館施設などでは「倉敷考古館増築（1957 竣工）」、「大原美術館分館（1961 竣工）」、「西条市立郷土博物館東予民芸館（1968 竣工）」、「大佛次郎記念館（1978 竣工）」、「横浜開港資料館（1981 竣工）」なども手掛けており、建設時には西日本を代表する建築家であった。

松下記念資料館は、建築面積 1592.5 m²、鉄筋コンクリート造平屋建一部地階の建物である。地階のピロティ階は幅広の大空間となり、柱間間隔が最大で 11.52m となる。高床の構造となるが、これは建物のデザインというよりも出水による文化財への被害を避けるための工夫がなされた。古墳の横穴式石室内部を表したピロティ階の中央には、建設時に発見された前山 B36 号墳の横穴式石室が移築され、常設展示室の吹抜け天井からのトップライトにより石室が照らされていた。実物の古墳を活かした幻想的な空間という点で、象徴的な場所となっている。さらにピロティ階から古墳群へと通り抜ける奥の階段の上には、半円形の舞台が築かれ、その背後には古墳群の稜線を望むことができる。1 階南の中央部分には展望用テラスがあり、ここから古墳群を望むことができる。また、室内に目を転じると中央の展示ケースが見渡せるようになっており、このテラスが配置上、重要な位置を占める。

1 階の常設展示室（第 2 展示室）の中央には、八角形の吹抜けを中心とした左右対称の常設展示室が配置される。この八角形の吹き抜けとトップライトについては、「倉敷市倉敷公民館（1969 竣工）」との共通点が認められる。



写真1 松下記念資料館竣工写真（正面、当館蔵）

常設展示室は、吹き抜け天井が高くトップライトからの彩光に、ミクライトの白塗り天井と壁に垂木を模した桧合材が配され、木部と漆喰をイメージした仕上がりとなる。こうした展示室内部の表現はほぼ同時期に竣工した「黒住教新霊地新道山大教殿

（1974 竣工）」と類似する。また展示室の床は「倉敷国際ホテル」と同様の黒色のアスファルトブロックを敷き並べ、天井の明と床の暗の対比を作り上げている。

（2）松下記念資料館の設計理念

松下記念資料館の設計に際しては、事前に紀伊風土記の丘建設委員会²（以下、建設委員会とする）からの次の4点の条件があった。「設計にあたっては「風土記の丘」の風土環境にふさわしく全国に誇りうる建物にすること。①和風造り②建物はできるだけ低く③地形の切り込みはできるだけさける④色彩をよく考えること」（会議資料）である。

そのため、建物の最大の特徴はその外観にあり、水平かつ低い正面観を見せるデザインとなっている。中央の常設展示室には、天井高 4.8m の大空間を設けるが、周囲には事務室、体験学習室、学芸員室や収蔵庫などの天井の低いバックヤードを配することで、正面の間口 46m に対して軒高 3m と低く抑えている。このため、正面から建物を見上げた場合、大屋根の軒によって、中央部分の屋根が見えないという視覚効果を得ることに成功しており、外に小さく、内に大きく建てられている。また、建物の地盤面を前面道路まで掘り込み、東西に土堤を築いた高床として低く見せている。こうした外観によって、古墳群への視線を妨げず、周囲との調和を図ることに成功している。

また、外装は型枠の板目が残るコンクリート、大

面取りされた柱や、長押を思わせる水切りによって近代的なコンクリート造りながらも和風造りを表現している。大屋根部分は、浦辺の作品と同様に壁底を彷彿とさせるデザインとなる。その他、地元産の結晶片岩・玄昌石（天然スレート）などの石材、丸太の半割材、アルミキャスト（鋳物）や銅板などの金属などを用いて素材そのままの質感で仕上げている。とくに外壁は、結晶片岩を用い小口張りにすることで外観を緑で表現している。

このように、松下記念資料館は、壁を緑、底を黒で彩ることで“黒と緑”による独特の色彩を表現している。前半期の作品の“黒と白”や後半期の作品の“赤と白”といった浦辺の手掛けた建築には見られない配色となっている点にも注目できる。

（3）松下記念資料館の意匠

松下記念資料館には、岩橋千塚古墳群や考古学に関する様々な意匠デザインが取り入れられている。

高床建物と横穴式石室 1階は鉄砲水を避けるため、高床建物としている。当時の県担当者によると弥生建築も高床であるため、高床には抵抗がなかったという。さらにピロティ階は横穴式石室と同じ両袖式の平面形を持ち、東西には間知石積みの石垣を設けて、石積を表現している。ほの暗い横穴式石室の玄室を再現しており、天井の梁は岩橋型横穴式石室に特徴的な石梁をうかがわせる。

社寺建築 また、板壁を彷彿とさせる型枠の木目が残る外装のコンクリートの荒々しさ、中世建築のような大面取りされた RC の打ち放し柱や、押長押のような水切りの表現は、社寺建築を思わせる。当時の施工責任者に聞くと、型枠は使われなくなった木製電信柱を製材し作ったものだという。建物の設計に当たっては建設委員会のメンバーである建築史の

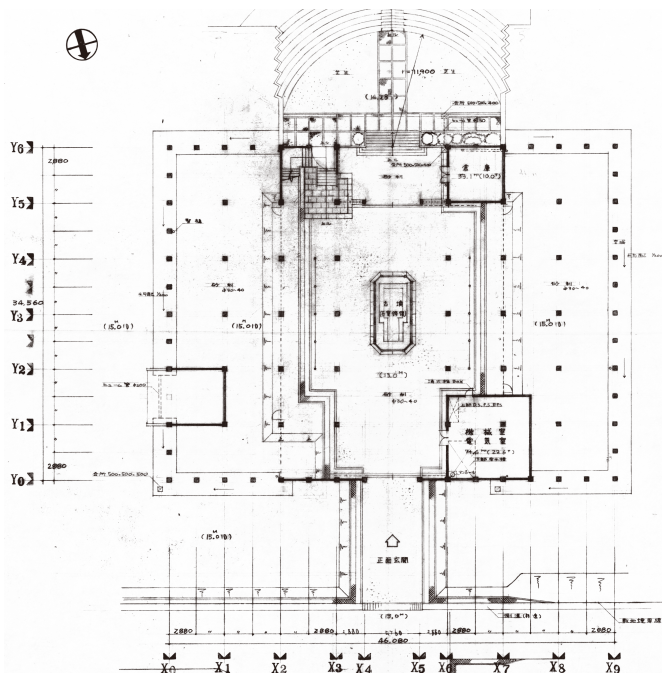


図1 ピロティ平面図

伊藤延男が会議にて和風造りを提案しており、浦辺は後に伊藤の協力があつたことを記している点からも、社寺建築の意匠を取り入れたことがうかがえる。

岩橋型横穴式石室 外壁の結晶片岩の石積みは、岩橋型横穴式石室の石積みを表している。石材は、当時、第26回国民体育大会（黒潮国体）に向けて整備されていた紀三井寺競技場へのアクセス道路となる新毛見トンネルの掘削で発生したものをを用いている。施工責任者からの聞き取りでは、石積については当初職人が整然と積み上げようとしたが、乱れや大小の不揃いさを残すように現場にて指導があり、人工的な石積とならないように配慮がなされたようだ。先に石積が行われたテラス付近と後に行われた建物両側面では、石積の違いが見て取れる。

有本銅鐸 松下記念資料館の窓には、和歌山市有本から出土した有本銅鐸（当館蔵）の文様をモチーフにしたアルミキャスト製の面格子が取り付けられている。中央に四頭渦文を配し、その間に綾杉文が入り、上下には連続鋸歯文帯を巡らせ有本銅鐸のB面の鈕の文様を意匠としている。設計図面には、四頭渦文のみが描かれていることから、建設に関わった県担当者の一人であり、有本銅鐸の発見時に対応した小賀直樹から文様について詳細なアドバイスがあり、現在の意匠となったとみられる。

また、屋外灯カバーは銅板を溶接したもので、面

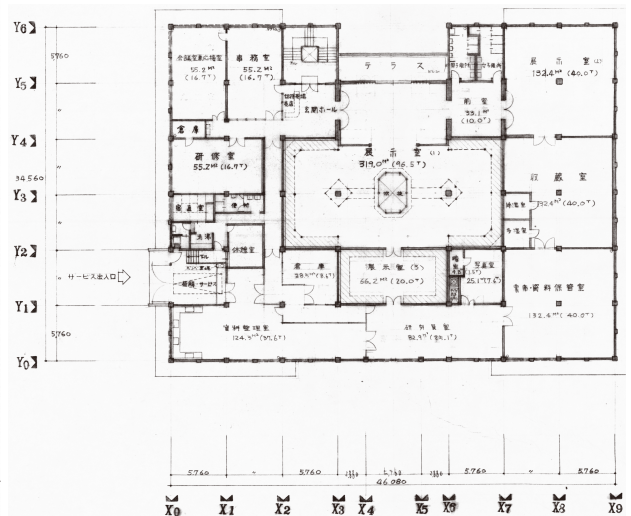


図2 1階平面図

格子と同様、有本銅鐸の四頭渦文を打ち抜き表現する。上部と文様の周囲には、打ち出しを重ねた鎧目模様で仕上げている。この屋外灯カバーは松下電工製であり、南東の玄関へ上がる階段とトラックヤードに今も設置されている。

勾玉・垂木 常設展示室の入口の左右には、勾玉を模した大理石オンガダライト製のボーダーが存在する。このボーダーは、常設展示室の入口から巾木を伝って、常設展示室を一周し、再び入口へと戻るように配され、展示室の導線を表している。また、常設展示室の天井は、吹き抜け天井を中心に放射状に配された木部によって古代建築の垂木を表現する。柱は大面取りされており、外装とも一致する。モル

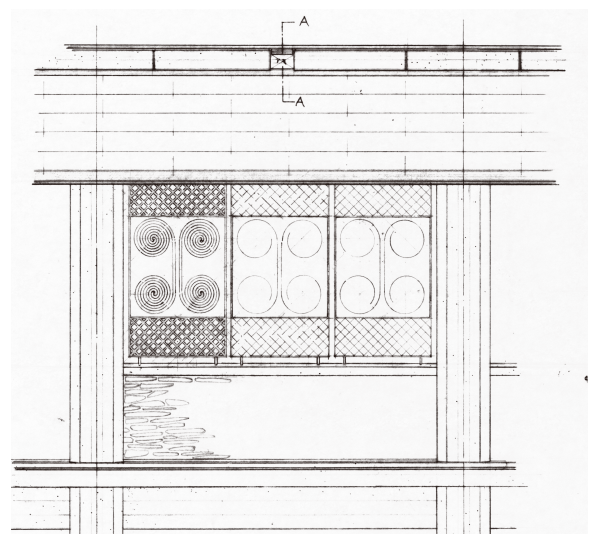


図3 面格子詳細図（矩計図詳細図より）

タルやアスファルトを使いながらも木製の建材を用い素材を全面に押し出すことで和風を表現しているのだろう。

3. 松下記念資料館の誕生の秘密

(1) 紀伊風土記の丘基本計画

基本計画は、70年大阪万博の基本構想に関わった西山卯三氏が中心となり、その指導のもと地域計画建築研究所（アルパック）によって昭和43（1968）年11月に策定された。浦辺の設計にも基本計画の視点が継承されており、松下記念資料館と関連する箇所について紹介する。

基本計画では、園内の施設の配置が検討され、資料館は紀伊風土記の丘の主要施設として、「社寺の中門をイメージしたようなメインゲート」（会議議事録）として位置付けられている。

配置の最大の特徴は、資料館つながる進入路と駐車場の位置にあり、「駐車場位置については、山（岩橋千塚古墳群）の全体を眺望しながら園内へと至る予備的な印象を与える必要がある」（基本計画）として県道付近に配置された。また、歩道を中心とした幅広の樹林帯をもつ進入路は幅員20m、緑地帯8mで計画され、「神社の参道のようなもの」であり「車は駐車場に原則としてとどまり…観光客はバスストップあるいは駐車場より歩いてアプローチするわけであるが緑豊かな並木道、ところどころにハニワの彫刻が点在する印象深い進入路としたい。」（基本計画）とされた。このように、当初、駐車場は現在よりもさらに北の県道付近に計画されており、基本計

画では全長660mであった。来園者は駐車場より緑豊かで埴輪が並ぶ散歩道を自らの足で進み、資料館にアプローチするよう計画されている³。

こうした配置により、進入路は現代と古代が交錯する空間となり、散歩道を歩きたどり着いたメインゲートが資料館なのである。さらに近代的な交通手段を排除し、歩道のみで会場に連絡する手法は70年大阪万博でも用いられ（平田2019）、「近代化に対する人間らしさ」が重視されている。それは建設当時に目指された理念ともつながっているといえる。

(2) 基本計画から基本設計へ

基本計画で検討された配置は、駐車場予定地の買収が困難となること、さらに進入路の距離が長く、車での進入が困難という県側の判断により、変更を余儀なくされる。駐車場位置は現在の位置となり、進入路も450mと短くなってしまった。また、マイカーが交通手段の主流となる当時の状況から、進入路は樹林帯をもつ歩道12mと中央の車道9mへ変更されていた。

こうした中、松下記念資料館の基本設計を行うこととなった浦辺は、進入路の設計を元に戻し、車道4m、樹林帯をもつ歩道を16mへと変更する。基本計画の理念を引き継ぎ、車道中心から歩道中心の進入路へと変更したのである。後に浦辺は、「マスタープランの本意を可能な限り読み取り」、「アプローチ道路は、資料館への雰囲気をもつ理由に、マスタープランの歩行者中心に戻した」としている（浦辺1972）。

また、資料館の基本設計では、古墳群や周囲の景観への配慮すること、大屋根をもつメインゲートと

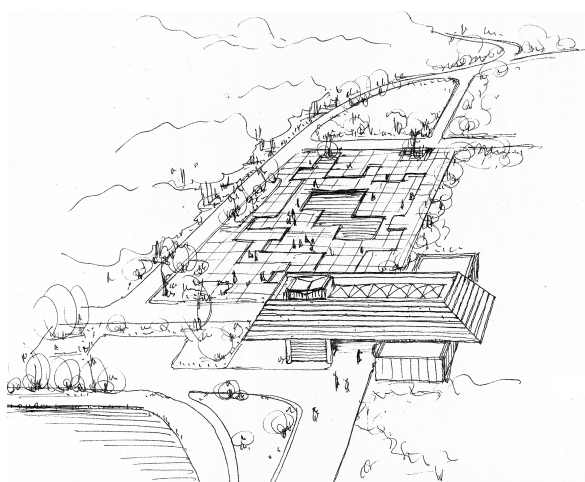


図4 基本計画イメージパース(昭和43年)

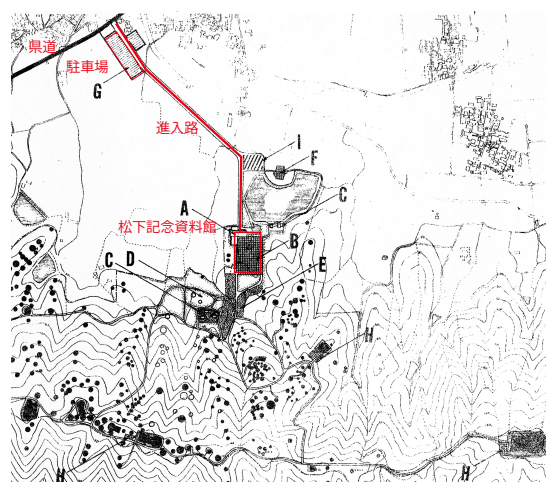


図5 基本計画配置計画(昭和43年)

しての資料館の外観やピロティ階を設け、上部に展示室を設けることを踏襲するなど、基本計画のイメージを多く引き継いだ。建設の中でやむをえず変更された点がある中、当初意図された基本計画の本意を汲み取り、基本設計が行われたといえる。

（３）設計者の選定——通の書簡——

和歌山県内における著名な建築家による近現代の公共建築は少なく、松下記念資料館は貴重な事例である。しかし、設計者に浦辺鎮太郎氏が選ばれた経緯については、知られていなかった。

そこで、紀伊風土記の丘に残された資料について調査を進めると、松下幸之助からの書簡の写しがあり、その手掛かりを得ることができた。書簡は、B5版の４枚に縦書き活字で記される。昭和 45（1970）年 4 月 8 日付けで、松下電器産業株式会社会長松下幸之助から和歌山県知事大橋正雄へ宛てられたもので、「松下幸之助」のみ直筆の署名がある。

書簡の内容は、前半は紀伊風土記の丘の建設計画への賛同の意とともに、資料館の完成に期待が記されている。一方、後半については、資料館の設計者の選定にあたり「浦辺鎮太郎先生を候補者のお一人に加えていただければ」（書簡）として浦辺を推薦している。この書簡を受け、「紀伊風土記の丘」資料館建築設計監理委託の指名競争入札が行われるが、浦辺建築事務所以外は、寄付者の意向を尊重するとして、入札を辞退している⁴。そして、選考の結果、浦辺建築事務所が設計者に選ばれることになる。

後に西山卯三は松下記念資料館について「マスタープランによる設計のものとは、かなりちがった形のものになっている。しかし建築施設としては立派なものがつくられた」と回顧し、設計は松下幸之助の依頼によると述べている（西山 1973）。

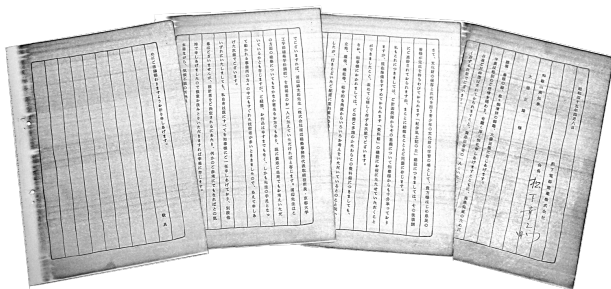


写真2 松下幸之助書簡

しかし、関係者への聞き取りからは、別の点も明らかとなった。実は当時の建設委員会のメンバーや県担当者も浦辺による設計を切望しており、寄付者である松下幸之助がこれらの意見を代表し、書簡が作成されたとみられる。当時、浦辺は西日本を中心にその仕事が認められており、建設委員会からもその経験と実績から浦辺を推す意見があったようだ。また、「日本を代表する資料館となるよう、松下さん生家の代わりとなるような資料館を作りたい」という思いが当時の県担当者にあったようであり、松下記念資料館の設計は、関係者も含め一致した意見で浦辺に託されたとみられる。現在も入口には松下幸之助が揮毫した「松下記念資料館」の金属切文字があり、静かに来館者を迎えている。

なお、あまり知られてはいないが、松下記念資料館とともに和歌山県埋蔵文化財収蔵庫（以下、文化財収蔵庫とする。）についても、浦辺の設計によるものである。現在も収蔵庫として機能しており、「瓦葺の収蔵庫」として関係者には知られている。この文化財収蔵庫は、紀伊風土記の丘の敷地内に昭和 49 年（1974）8 月 9 日に竣工した。

建築は鉄筋コンクリート造の平屋建で、床は松下記念資料館と同様に高床となる。外壁はベニヤ型枠を横長に用い左右対称となるように配することで、校倉造りを思わせるような外観としている。屋根は、日本瓦を葺いた切妻屋根を置屋根として載せ、蔵を彷彿させる。設計時には文化財収蔵庫が進入路に対して直角になるように配置されており、両建物が和風を模した近代建築という点からも、関連する作品となるよう意識して作られたことがわかる。

4. おわりに——紀伊風土記の丘と松下記念資料館——

以上のように、松下記念資料館の建築や意匠、建設に関わるエピソードを紹介した。その建設理念にあるように岩橋千塚古墳群の景観との調和が目指されただけではなく、意匠デザインには古墳群や地域の歴史と風土への敬意が至る所に払われていることがわかる。設計者だけではなく、関係者・施工者の意見を取り入れつつ建設が進められ、和歌山県立紀伊風土記の丘に相応しい資料館となっている。“黒と緑”で表現された松下記念資料館が他の浦辺の作品

とは異質であると評する意見もあるが、地域ごとの景観との調和と歴史や風土の特性をうまく引き出しながら設計された点で、やはり浦辺の作品であるといえる。

また、松下記念資料館は、和歌山県誕生 100 年の年に竣工した。この年は、第 26 回国民体育大会（黒潮国体）が開催された年でもあり、紀伊風土記の丘と松下記念資料館の建設は、県を挙げた一大文化事業であったことがわかる。松下幸之助揮毫の金属切文字、新毛見トンネルの結晶片岩や廃線となった市電の敷石⁵など当時を物語る資料も含まれており、松下記念資料館は和歌山県の近現代史を象徴する記念碑的な建築として評価できる。

令和 4（2022）年 2 月 17 日、紀伊風土記の丘松下記念資料館は文化財保護法第 57 条第 1 項の規定により文化財登録原簿に登録され、登録有形文化財となった。

謝辞

本稿の作成及びスポット展開催にあたり、次の諸氏・諸機関にご高配並びにご教示を賜った。末筆ながらご芳名を記し、謝意を表したい。

河本二郎、小賀直樹、島本智也、清水宏通、角野豊、武部吉宏、中村貞史、中村浩道、仁科薫、平野明香里、平田隆行、御船達雄、西山卯三記念すまい・まちづくり文庫、株式会社浦辺設計、パナソニック株式会社、

【註】

- 1 本稿は、紀伊風土記の丘開館 50 周年記念として令和 3（2021）年 8 月 29 日から 9 月 19 日に開催したスポット展「松下記念資料館展・デザインとモチーフ、その誕生の秘話に迫る -」開催時の調査成果に基づき、その後に関係者から得られた情報を加えたものである。
- 2 紀伊風土記の丘建設委員会は、異動などによりメンバーの変遷があるが、末永雅雄（関西大学教授）を委員長とし、西山卯三（京都大学教授）、伊藤延男（奈良国立文化財研究所建造物室長）、杉山信三（奈良国立文化財研究所平城宮調査部長）、松下幸之助（松下電器産業株式会社会長）、山口孫一（県文化財研究会会長）、栗栖安一（民俗）、巽三郎（考古、史跡）、羯磨正信（考古）、

田中敬忠（史跡）らによって構成された。

- 3 基本計画では樹林帯には埴輪の彫刻を並べる計画であったが、開館後には並ばなかった。ところが、数年前、紀伊風土記の丘基本計画を目にした職員が、進入路に埴輪を並べることにしたのだという。
- 4 当時の指名業者をみると、浦辺建築事務所以外は、県内の設計事務所であり、有名建築家の所属する設計事務所ではない。
- 5 松下記念資料館のアプローチやピロティには、市電の敷石が用いられている。和歌山市民に「市電」として親しまれた南海和歌山軌道線は、昭和 46 年（1971）3 月 31 日に廃線となる。この石敷きは当初設計にはなく、施工を担当した島田組の寄付により設置された。

【参考文献】

- 栗田 勇 1973「松下記念資料館」『現代日本建築家全集』12 浦辺鎮太郎・大江宏 三一書房
- 浦辺鎮太郎 1972「紀伊風土記の丘松下記念資料館」『新建築』1972 年 3 月号 新建築社
- 小賀直樹 2010「岩橋千塚の保存と紀伊風土記の丘の建設」『坪井清足先生卒寿記念論文集・埋蔵文化財と研究のはざままで -』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 地域計画研究所 1968『「紀伊風土記の丘」基本計画』
- 中村 浩 2017『「紀伊風土記の丘基本計画」を巡って』『國學院雑誌』第 118 卷 11 号
- 西山卯三 1973「乱開発の中のささやかな努力」『自然と文化』第 12 号 日本ナショナル・トラスト
- 平田隆行 2019「紀伊風土記の丘松下記念資料館」「遺跡へのリスペクトとその現代的「再演」建築家浦辺鎮太郎の仕事 倉敷から世界へ工芸からまちづくりへ」学芸出版社
- 松隈洋・笠原一人・西村清是編著 2019『建築家浦辺鎮太郎の仕事 倉敷から世界へ工芸からまちづくりへ』学芸出版社
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 1973『紀伊風土記の丘年報』第 1 号 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2011『開館 40 周年記念写真集 写真に見る紀伊風土記の丘』和歌山県立紀伊風土記の丘、和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会
- 和歌山県教育委員会 1972『「紀伊風土記の丘」建設概要』『建設委員会議事録』、『各年度紀伊風土記の丘建設一件綴』

昭和45年	1970年	2月2日	紀伊風土記の丘建設委員会環境整備部会（第1部会を名称変更、紀伊銀行4階第1会議室） 昭和45年度工事、資料館建設について、進入（取付）道路および駐車場の位置変更（県道沿いから進入道路中央の現在形へ）について説明。1.進入道路については、車道・歩道を区分け付道路を構築し、緑地公園とする。また、用地買収により進入道路の入口、中央、終端部分に広狭の差が生じる。2.駐車場の位置変更、3.資料館の建設について議論。	資料館の建設についての条件：松下幸之助氏個人で「風土記の丘」建設事業のためご着簡くくださったものであるから建設にあたっては「風土記の丘」の風土を壊さないで済む全国に於ける建物にすること。①和歌山の2建物ではできるだけ低く③地形の切り込みはできるだけ④色彩をよく考えること⑤資料館の展示物を整理し魅力のあるものとする等と協議すること。	
		2月25日	和歌山県文化財審議会より「大谷山古墳群の保存について」建議の提出。		
		2月25日	「紀伊風土記の丘」建設委員会 経過報告、進入（取付）道路および駐車場の位置変更（県道沿いから進入道路中央の現在形へ）に伴う事業計画の変更について了承を得る。		
		3月15日～9月13日			日本万国博覧会（70年大阪万博）開催
		4月5日		大橋知事あて松下幸之助氏書簡。松下幸之助氏より設計者の選定に際して浦辺鎮太郎氏を選定候補者として加えるよう依頼。	箕島高校野球部、全国高等学校野球選手大会で優勝
		4月8日			
		4月30日	県文化財専門審議会考古部会（共済会館）開催 修復古墳について図面提示。羽軍塚古墳修復工事について議論、修復事業においては墓道の復元が議論される。その後、掘削調査方法による修復を行うことに。		
		5月31日	紀伊風土記の丘建設委員会環境整備部会（県民文化会館5階第1会議室） A46号墳の古墳整備について議論、墓道のトレンチ部分にかけたの壁面露出部分について整備方針の意見。修復箇所がわかるようにプロット図による土留めとする（併井）。	展示計画案の提示。＊「浦辺にやつてもええよばい」、基本計画との乖離について指摘し、良いものを作るべきだという旨のメモあり（委員から事務関係の意見あり）	
		6月10日	紀伊風土記の丘建設委員会用地部会（第2部会を名称変更） 和歌山県文化財審議会の建議書について議論。大谷山周辺で住宅団地の開発計画があり、開発計画の変更と土地購入について提案。予算確保が難しく、調整区域であるため今後の開発について賛成部会、関係部局と協議することなどが話し合われた。	資料館については現在、設計中であるが、整備事業は昭和45年度中の完了予定で進める。	
		6月16日	県文化財専門審議会民俗資料部会（紀の国会館）開催 十分な展示スペース、全国の研究書を集めた図書室を完備すること。資料館の展示は考古主体の紀伊の原始古代文化の展示とし、民衆を含めて過去の生活の変遷を示す。	「風土記の丘」に建設する資料館の設計は大坂の浦辺設計事務所依頼していることを報告。資料館の棟組は紀州に關係のある形を考えている。展示については松下氏の意向により、古代文化中心となる。	
		7月	前山B36号墳発掘。墓道の右壁・玄室の奥壁を欠き2～3段の構えを残した石室を検出。	環境整備部会、文化財専門審議会考古部会での審議の結果、資料館ピロチ・中央部に移築元し、展示室から自分でできる資料として活用されることに。	
		7月11日		浦辺建築事務所と契約締結	
		7月4日	「紀伊風土記の丘」建設委員会環境整備部会（紀の国会館）開催。 設計工程：7月10日基本設計完了、8月20日設計完了、9月1日着工、昭和46年5月1日竣工。展示期間について夏を過ぎたからの展示を行うように附し期間について説明。和歌山の文化の顔となる人物を選び館長任命を急ぐ。	基本計画を基に進入道路からみてなるべく建物を低くする。却屋割についてはなるべく広域に利用できる。A案とした資料館計画面図の提示。造成地のまま建設すると後背の土壌となるハイレイアウト部分を察すおそれがあるので、できるだけ地盤面を下げ、奥に入れることが望ましい。	
		7月8日前後	前山B36号墳発掘調査（大野徳夫氏主導）	資料館建設予定地内に破壊された古墳（前山B36号墳）があり、現状保存が移築・修復するか議論。前山B36号墳と資料館の位置図の提示。文化財専門審議会考古部会での検討を行うことに。	
		8月15日	進入道路について車道を4mに変更し、緑地帯・歩道を増加させる。 「紀伊風土記の丘」建設委員会賛成部会（紀の国会館）開催。		
		8月20日	大谷山周辺の保全の必要性は原則的に同意であるが、県単独で実施することなく地元民や住民の協力が得られないか検討することに。	紀伊風土記の丘・松下記念資料館新築工事設計図・内説明図書、特記付録書の提示。展示室以外の工事設計図の完成。	
		9月15日		紀伊風土記の丘・松下記念資料館新築工事設計図・内説明図書、特記付録書の提示。展示室以外の工事設計図の完成。	
		11月2日		「紀伊風土記の丘」松下記念資料館新築工事設計図・工事請負契約を株式会社島田組と締結。	和歌山県民文化会館完成
		11月5日		紀伊風土記の丘・松下記念資料館起工式、浦辺鎮太郎氏手記あり	
		11月17日		展示室内装飾の追加。紀伊風土記の丘・松下記念資料館新築工事設計図建築追加工事図面	
昭和46年	1971年	3月		資料館について6月中旬に完成、7月24日オープン予定を示す。	
		3月6日	「和歌山県立紀伊風土記の丘設置および管理条例」制定。		南海電鉄市内軌道線（市職）廃止
		3月11日	紀伊風土記の丘建設委員会（県民文化会館5階大集会室）開催。 駐車場位置の変更に伴う基本計画の一部計画変更について承認。 説明、皇位の宝地開発の抑制について、風致地区など開発を防ぐよう検討することに。		和歌山市公署監視センター建設
		3月31日	進入道路、駐車場、展室隣地等工事完成。		和歌山県立博物館開館
		4月1日	紀伊風土記の丘建設事務室改組。専地に開設する。		
		4月22日			
		5月31日	紀伊風土記の丘建設委員会環境整備部会（県民文化会館5階第1会議室）。	展示方法について議論。	
		6月21日	紀伊風土記の丘資料館展示企画委員会設置。資料館展示企画委員会を設置。	開園式、資料館開館8月に決定。	
		7月5日～19日		前山B36号墳移築工事の集結。「紀伊風土記の丘」ピロチ部古墳移築工事実施（株式会社島田組）	
		7月15日		紀伊風土記の丘・松下記念資料館新築工事完成。	
		8月1日	紀伊風土記の丘建設事務室を解消し、紀伊風土記の丘管理事務所発足。		
		8月2日	紀伊風土記の丘開園式		
		9月5日			第26回国民体育大会（黒潮国体）開催
		10月25日	天皇・皇后陛下下行幸啓		
		10月28日	神護宮、西院殿下お成り		

子供たちが提案する体験学習の可能性

—西和佐小学校「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」の取り組み—

萩野谷 正宏 竹内 宥介

はじめに

和歌山県立紀伊風土記の丘と和歌山市立西和佐小学校は、新しい博物館建設に向けた計画づくりに関連したワークショップと、小学校授業の学習単位とを連関させた博学連携の取り組みを令和元（2019）年より度実施している（萩野谷・竹内 2021）。令和2（2020）年度には、新たな教育普及プログラムの開発に関連したワークショップ「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」を、第5学年の国語科授業「自分の考えを提案する意見文を書く」「考えを深める話し合い」の学習単位において実施した。

これは、児童が自ら体験学習イベントを発案・計画して、議論を経て実現可能なプランを組み立て、試験的にこれを実践する内容であり、本稿はこの取り組みを報告するものである。

執筆は、3・5章を紀伊風土記の丘萩野谷正宏が、4章を和歌山市立西和佐小学校教諭竹内宥介が行い、1・2章は両者で協議して執筆した。

1. 実施に至る経緯

和歌山県立紀伊風土記の丘では、現在、考古資料及び民俗資料の保存と活用のための新しい博物館を建設するための計画づくりを進めており、令和元（2019）年度から新博物館の基本計画を策定するための作業を行っている。このなかで、当館が実施してきた教育普及活動についての課題を整理し、新博物館で取り組むべき新規の体験学習プログラム案についても検討を行っている。

そこで、紀伊風土記の丘を遊びや学習の場として日常的に利用している子供たちが、紀伊風土記の丘が実施する体験学習イベントに対してどのような印象をもっているかを知ること、そして、子供たち自らがイベントを考案して実践することは、現在及びこれからの紀伊風土記の丘の諸活動にとって有益であると考えます。

一方、西和佐小学校では、令和元年度に実施し

た新しい博物館に必要な施設を考える「紀伊風土記の丘 夢計画」に引き続き、子供たちが日常的に利用する紀伊風土記の丘や岩橋千塚古墳群の魅力に児童が気づき、地域への誇りをもつことにつながるような学習活動を行うことを検討した。

以上から、ワークショップ「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」を、西和佐小学校と紀伊風土記の丘の共催で開催することとした。

2. 「夢イベント計画」の概要

ワークショップは令和2年10月の複数回の打ち合わせを経て、以下の内容で実施した。

（1）「夢イベント計画」の作品制作

令和2年11月の授業では、紀伊風土記の丘開館後約50年間の入館者数の推移を説明し、紀伊風土記の丘の各種体験学習イベントについて紹介した。

児童たちは、近年の入館者数が減少傾向にあることについて驚くとともに、例えば「ふどきっず」などのイベントについては、「難しそう」「疲れそう」「楽しくなさそう」「知られてないのでは」という感想が述べられた。そこで、紀伊風土記の丘の利用者を増やす目的で、より楽しいと感じる体験学習イベントを自分たちで考え提案し、意見文としてまとめることとした。

11月の複数回の授業では、5年A組・B組で3～4人のグループに分かれてイベント案を企画し、イベントの名称や内容、効果や課題などについて説明した提案書及び意見文、その内容を描いた絵画による「夢イベント計画」を制作した。作品を全16作品であり、その概要は表1のとおりである。

（2）イベント案の実現性についての議論

その後、提案されたイベント案の中から最終的に一つを選択し、その有効性を確認するために年度内に試験的にイベントを実施することとした。イベント案の選択にあたっては、児童たちが話し合いを重ねるとともに、学校と紀伊風土記の丘の両スタッフ

でその実現性について協議を行っている。

その過程において、各クラスでまずは2つの作品に候補を絞り、双方の立場から課題や解決策について議論を行う時間を設定した。選択されたイベント案は、B組では「火おこしで作ろう！はにわ・まが玉キャンディー！！」と「みんなで楽しく最後まで残れ！逃走中」、A組では「わくわく楽しい火起こし体験&春祭り！」と「さがしまわれ！スタンプラリークイズ」である。

ここでは、各々のイベント案の長所や短所、実現性や安全面・衛生面にかかる課題と解決策、そしてどのような学びにつながるのか、などについて話し合われた。

例えば、「逃走中」では、児童が走り回ることにより来園者にとり危険ではないか、という課題には、走らないことをルールとし、「ハンター」に見つかった場合には古墳や紀伊風土記の丘に関連するクイズが出題され、不正解なら捕まるという設定にするなどの安全面に関する議論が真剣になされた。

上記授業にはB組担任の竹内教諭、A組担任の木次教諭とともに、紀伊風土記の丘の萩野谷と迫間素啓専門員が同席し、必要に応じてアドバイスを行っている。児童たちは、自分たちの考案したイベントが実現するかもしれないという期待をもちながら、真剣な議論が行われていた。

(3) イベントの試験的实施

上記の議論の結果、4つのイベント案については、いずれもイベントとして実現の可能性があることから、これらから一つを選択するという当初の方針を変更し、それぞれの長所を織り交ぜたうえで一個のイベントにまとめあげた計画をつくることとなった。このため2クラスの代表者により委員会をつくり、そのなかで具体的な検討がなされることとなった。

その結果、最終的にまとめられた「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」は、園内で「逃走中」と「スタンプラリークイズ」を組み合わせた「クイズ&逃走中」、体験広場で火起こし体験後にマシュマロ等を焼く「火起こし&バーベキュー」体験、復元竪穴住居内での「まが玉キャンディーづくり」の三つから構成される複合的なイベントとした。

準備は小学校・紀伊風土記の丘の両スタッフで協

議しながら進め、令和3年3月10日に試験的イベントを実施した。イベントは各所にスタッフを配置して感染症対策や安全面に十分配慮しながら、おおむねスケジュールどおり進行することができた。その内容の概要は、表2のとおりである。

まず「クイズ&逃走中」では、クイズ問題を解きつつ園内各所に潜む「ハンター」の存在にはらはらしながら、子供たちは民家や古墳群をめぐった。ハンターに遭遇した場合には捕まるのではなく選択式の難問のクイズが出され、不正解の場合は減点される。ここではグループごとのチームワークが試された。

「火起こし&バーベキュー」体験では、容易には着火せずその難しさを知るとともに、実際に起こした火をもとに焚火で食料を焼くという古代体験らしい経験をすることができた。

「まが玉キャンデーづくり」は、竪穴住居の竈では容易に砂糖が溶けず、竈の火加減に困難を伴った。ガスコンロを併用してようやく飴状となり勾玉状の型に流し込んだが、理想通り勾玉の形になった飴はわずかであった。発想はすばらしく、なんとか飴も完成したが、実際のイベントとして実現するためには、クリアしなければならない課題が多いことを知った。

十分な議論と事前準備をして臨んだイベントの試験的実施の結果、思い通りに進んだ点と、そうではなかった点の双方がみつかった。これもまた、重要な成果である。

3. 学芸員の視点からの「夢イベント計画」の意義

後日、児童たちから紀伊風土記の丘へ丁寧なお礼状をいただき、夢イベントに対する感想や子供たちの思いが述べられている。その一部を紹介したい。

「逃走中はドキドキしたりワクワクしたり色々な表情になったけどクイズとかがすごく楽しかった」

「逃走中はハンターがどこにいるかわからずドキドキしたので楽しかった」

「山に登ったり大変でしたがハンターの問題に
正解したときはうれしかった」
「火おこしではいろんな食ざいをみんなと食べ
れてすごかったのしかった。このイベントがま
たやるなら必ず行きます」
「火起こして大変なんだな」
「(勾玉の) あめを食べたらちょっと苦かった
けどおいしかった」
「また夢イベントをやりたい」
「イベントが実現されたらとてもうれしい」
「ちゃんとしたイベントになったら、大切な友
達全員をつれて、たってきます」
「古墳は今まで大切にされていたから僕たちが
学べたので、これを生かして大切にしていき
たい」
「もう一回、風土記のことを学びたい」

そこには、自ら考えたイベント案が机上だけの提
案にとどまらず、実践することができたことに対す
る喜びにあふれている。それと同時に、体験イベ
ントのなかに遊びの要素が盛り込まれつつも、クイズ
や体験学習を通じて古墳や文化財のことを現地で学
び、さらにこれらへの関心が高まっている様子が看
取された。

また、「夢イベント計画」全体を通じて、とかく
我々学芸員が忘れがちな子供たち独自の視点を学ぶ
ことができた。表1の提案されたすべてのイベント
を通覧すると、その内容は多彩であるが、すべてが
屋外での活動を主体とするという共通点があること
に気づく。そこには「歩く」「走る」「逃げる」など
体を動かす要素が多分に含まれている。一方、学芸
員の考える体験学習イベントは、「勾玉づくり」や
「埴輪づくり」に代表されるように屋内で制作活動
をするモノづくり体験が主であり、そこから学習に
つなげていくことが多い。ここに、子供たちにとっ
て魅力的と感じるイベントと、学芸員の考えるイベ
ントとの間で内容に乖離が生じ、結果的に冒頭の
「難しそう」「楽しくなさそう」などの感想につな
がったと推測される。これは一見単純なようだが、
学芸員として見落としがちな事からであり、今回の
ワークショップで子供たちから学んだ視点である。

今回実施したイベント案を、実際に紀伊風土記の
丘の教育普及活動の一環である体験学習イベントと
して実現するためには、安全面の確保や職員の人員
体制などの課題に対してさらなる検討を重ねなけれ
ばならない。しかし、子供たちが自らイベントを提
案し、これを実践してくれたことは、当館にとって
重要なケーススタディとなったことは間違いない。

4. 教員の視点からの「夢イベント計画」の意義

つづいて順序は前後するが、「夢イベント計画」
の作品制作の過程で、児童自身にどのように変化し
ていったのか、「夢イベント計画」の意義につい
て、竹内より教員からの視点で述べたい。

ここでは今回の授業を計画した目的や、子供たち
が成長した部分、考えが変容した部分について述べ
たい。

本学年の子供たちは、明るく活発である。授業中
においても、意見発表・交流を積極的に行うことが
できる。一方で、文章を書くことに対してモチベー
ションがない児童もいる。また話し合う活動におい
ても、たくさん意見を出して考えを「広げる」こと
はできても、それらを比較するなかで「まとめ
る」、「深める」という点で課題がある。そこで、今
回は「自分たちがやりたいイベントを考える」、「学
芸員さんを説得する意見文を書く」、そして「イベ
ントを実現するためにはどうすればよいか話し合い
をまとめる」、「体験する」という学習活動を設定し
た。「自分たちがやりたいイベントを考える」過程
では、子供たちは目を輝かせて「やりたいこと」を
提案した。

休憩時間には運動場で鬼ごっこをし、給食も残さ
ずもりもり食べる子供たちからは、「体を動かす」
「何かを食べる」という意見が多数出た。また「紀
伊風土記の丘の魅力を伝えたい」と思う児童から
は、「クイズ形式」で学べるようなイベントをした
いという意見がでた。

次に「学芸員さんを説得する意見文を書く」過程
では、一生懸命に文章を推敲したり、反対意見を予
想し、その解決策を提案したりする論の進め方をで
きるようになった子供たちの姿がみられた。そして
「話し合いをまとめる」過程では、予想していた反

対意見に対して反駁をしながら、学芸員さんにイベントの実現が可能であるということを伝えることができた。

最後に「体験する」過程では、自分たちが苦勞して考えた分、イベントを楽しむことができたようである。たくさん体を動かし、クイズで風土記の丘について学び、そして、美味しいものを食べる今回のイベントは非常に満足度が高かったように思える。

「またやりたいと思いました!」、「このイベントが実現される日が楽しみです!」などという意見からは、子供たちの風土記の丘への「愛着」がさらに増したことが窺える。また今回のように イベントづくりに主体的に参画できたことは、これからの地域社会を支える子供たちにとって、非常に良い経験となったように感じる。

5. まとめにかえて

令和元・2年度の二か年にわたりワークショップに参加してくれた子供たちは、本年度(令和3年度)に第6学年となり、この春小学校を卒業する。新型コロナウイルス感染症対策のため、思うように休日のイベントを開催することができず、博学連携の

ワークショップも開催できなかった本年度、時折資料館へ来館してくれる彼らの姿をみると、提案内容が公式イベントとしていまだ実現できていないことに申し訳なく思う。

現在の紀伊風土記の丘にとって、そして将来リニューアルが予定されている新しい紀伊風土記の丘にとっても、子供たちが提案した体験学習とその実践の意義は大きく、大きな可能性が秘められている。その視点を十分に活かし、今後の教育普及プログラムの開発に取り組んでいきたい。

近い将来、彼らが友人や家族と実現されたイベントへ参加してくれる日が来たとき、はじめて地域に根差した博物館として本当の約束を果たしたということができようか。地域の“宝”である古墳群や文化財を未来へ守り伝えていくために必要なのは、大規模な施設や最新の設備ではなく、人と人とのつながりなのだから。

末筆となりましたが、本活動にあたり、西和佐小学校の教員や児童の皆様をはじめ、多くの方々にお世話になりましたことを感謝申し上げます。



図1 作品例1

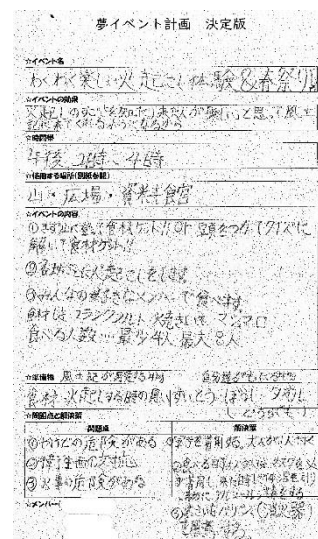


図2 作品例2

	提案されたイベント名称	概要
1	さがしまわれ！スタンプラリークイズ	園内のスタンプラリー。3枚のクイズで答えの番号スタンプを押し、資料館で景品をもらう。
2	わくわく楽しい火起こし体験&春祭り！	園内でクイズに答え食材を手に入れる。その後火起こし体験後に食材(焼き芋・マシュマロなど)を焼く。
3	にげろ！かくれろ！全体おにごっこ	園内全体でおにごっこをしながら、5つのクイズ問題を解く。クイズから風土記の丘について学ぶ。
4	カードで学ぶ古墳マラソン	園内をマラソンで一周しタイムを競う。各ポイントで合計7枚のカードを受け取る。カードで古墳や資料館について学ぶ。
5	鬼滅の刃&指スケートボード	園内各所にアニメキャラクターがあり、紀伊風土記の丘について解説。指スケートボードで遊ぶことができる。
6	こわいおぼけやしき？キレイなイルミネーション？どっちを選ぶ？	おぼけ屋敷とイルミネーションを二つのエリアで実施。前者では各所に配置された暗号を解き、後者ではクイズを実施。クイズ問題は古墳や埴輪について。
7	どっちを選ぶ？イルミネーション+おぼけやしき！クイズを解いてゴールせよ！	「ちよいこわ」(イルミネーション多めのお化け屋敷)、「げきこわ」(怖いお化け屋敷)を選択し、各エリアでクイズ問題を解き、資料館で採点。クイズの景品は古墳形クッキー。
8	クイズで学ぼう！！紀伊風土記の丘	園内各所で埴輪・古墳関連のクイズ問題を解き、資料館で答え合わせ。景品は埴輪クッキー、古墳キーホルダーなど。
9	火おこしで作ろう！はにわ・まが玉キャンディー！！	火起こし具で着火させ、フライパンにより砂糖を溶かし、埴輪・勾玉型の型に流し込んでキャンディーを制作。課題は衛生面や火事で、解決策はマスク、消化設備など。
10	逃走中 ～風土記編～	復元竪穴住居から前山A地区付近で「逃走中ゲーム」を実施。ミッションは「宝箱に入っている勾玉を探しハンター放出を阻止せよ」など
11	仲間を信じて走れ！！～逃走中～	「逃走中ゲーム」で、紀伊風土記の丘に関するクイズが出題。逃げ切れた場合に缶バッジをプレゼント。
12	みんなで楽しく最後まで残れ！逃走中	「逃走中ゲーム」で、ミッションは紀伊風土記の丘や古墳に関連したものを想定。
13	だれが最後まで残れるかな？逃走中イベント	「逃走中ゲーム」で、紀伊風土記の丘に関するクイズが出題。逃げ切れた場合に缶バッジをプレゼント。
14	にげろ！おいかけろ！風土記けいどろ大会！！	定員15名で「けいどろ」ゲームを実施。風土記の丘に関連するクイズからスタート。復元竪穴住居を「牢屋」とする。
15	絶叫！風土記できもだめし！？	夜間に園内の古墳や移築民家のライトアップを行い、クイズに答えながら、きもだめしを行う。
16	紀伊風土記の丘 食べ物クイズ大作戦	初級・中級・上級のクイズに回答し、回答に応じて各種食べ物の割引券を手に入れる。

表1 授業で各グループが提案したイベント（1～6：5年A組、7～14：5年B組）

※ 各々の提案は、イラスト(A3画用紙2枚)と提案書から構成。提案書には、イベントの効果、時間帯、場所、イベント内容、準備物、問題点とその解決策が記されている。これらの提案をもとにクラスではさらに詳細な議論が行われ、一つの計画がまとめられた。



写真 1 授業風景



写真 2 試験的イベント実施状況



写真 3 クイズ&逃走中



写真 4 勾玉キャンディーづくり



写真 5 火起こし&バーベキュー



写真 6 火起こし&バーベキュー

時間・場所	イベントの実施概要
8:30～ 準備(職員)	体験広場・竪穴住居へ机、消毒液、各食材、水、鍋、カセットコンロ、薪の搬入、公開古墳・谷村家・小早川家など園内各所にクイズ設置
8:55～ 西和佐小学校到着 9:00～9:05 開会式	開会式 中村浩館長あいさつ 児童代表あいさつ 参加者 西和佐小学校 第5学年児童 54名(A組・B組) 指 導 小倉教頭、竹内教諭、木次教諭、伊藤教諭、松本教諭(以上、西和佐小学校)、中村館長、中村副館長、迫間専門員、佐々木学芸課長、川崎主査、松本、出島、植松、萩野谷(以上、紀伊風土記の丘)、津田(紀伊風土記の丘ボランティア)
9:05～11:00 「クイズ&逃走中」 (紀伊風土記の丘園内)	園内を対象にした「クイズ&逃走中」 ①園内 10 か所(移築民家、公開古墳、展望台等)にクイズ配置。②参加者 12 グループが、配布地図の順番に従い、クイズを探してみつけ、答えを解答用紙に記入。③「ハンター」5 名が園内の所定の場所に配置し、隠れる。参加者を発見したら笛を吹き、停止させ、新規問題を出題(不正解ならば減点、正解ならば何もなし)。④「ゴールデンハンター」1 名が園内を自由に移動。遭遇したら出題。正解したら 20 点加点。⑤制限時間内に園内 10 か所を周り、体験広場へ帰着後に教師が解答用紙を回収して採点。高得点者(1～3 位)には記念缶バッジを贈呈。
11:00～11:20 「火起こし&バーベキュー」(体験広場)	火起こし体験と着火した火によるマシュマロ焼き ①事前準備:耐火煉瓦で炉を設置し、おき火を用意。 ②各グループに分かれ火起こし具による火起こし体験 ③着火後に焚火でマシュマロ焼き(51 名の児童が密を避けて順次参加)
11:00～ 「勾玉キャンディーづくり」(復元竪穴住居) *火起こし体験と同時並行	砂糖を溶かした飴を、型に流し込みキャンディーを制作(3 名の児童参加(発案者))。 ①事前準備:型は事前に児童全員が粘土で制作し、紀伊風土記の丘で焼成。②竈にフライパンを設置し、砂糖を溶かす(カセットコンロも使用)、②勾玉の型に切ったクッキングペーパーを押し込む、③スプーンなどで飴を流し込む、④冷まして完成
11:55 頃 閉会式(体験広場) 12:00～ 出発 (12:25:小学校帰校)	あいさつ 記念品贈呈(火起こし具、参加賞缶バッジ等)

表 2 子供たちが最終提案した「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」の実施概要 (令和 3 年 3 月 10 日)

和歌山県立紀伊風土記の丘のアゲハチョウ類について

松下 太

風土記の丘の植物について、観察を続けていくうえで、それと相互に深く関わり、この森の生態系を保っている昆虫類を切り離すことはできない。

例えば昆虫は植物を食物として、または住みかとして植物に大いに依存し、また植物は昆虫によって効率よく受粉するなどの恩恵を得ている。特にチョウの仲間は種によって食草が限定されているものが多く、植物の分布はチョウの生息と大いに関係がある。ここではアゲハチョウ科の9種のチョウについてその食草と関わって報告する。

ミヤマカラスアゲハ

Papilio maackii

全体に黒く虹色光沢が強い。前翅には明るく光沢のある帯が目立つ。水路沿いを往復したり吸水したりしていることが多い。紀伊風土記の丘のアゲハチョウの中ではもっとも個体数が少ない。

食草はカラスザンショウやキハダで前者の大木はこの山に多数生育している。

カラスアゲハ

Papilio dehaanii

全体に黒く虹色光沢がある。ミヤマカラスアゲハに見られる前翅の帯びはない。クサギなどの花で吸密したり水たまりなどで吸水したりする。クロアゲハなどと似ているので、注意深く観察しないと見過ごすこともある。



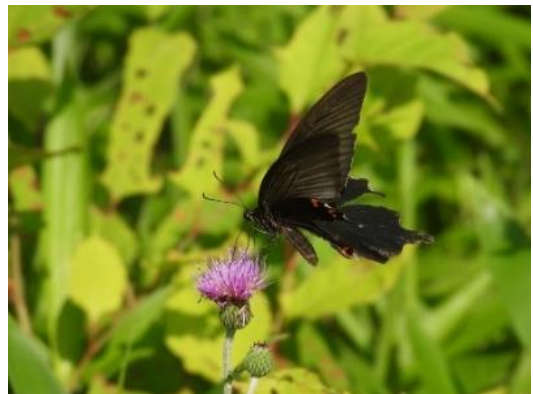
カラスザンショウなどが食草である。

クロアゲハ

Papilio protenor

全体に黒く、わずかに青っぽい光沢がある。目立った斑紋はないが、後翅の裏の赤い斑紋はよく目立つ。クサギやアガパンサス、ヤブカンゾウなどの花に集まる。

幼虫の食草は広く柑橘類であり、紀伊風土記丘の周辺にはミカン畑が点在し、中には放置されたものもあり、個体数が多い事も頷ける。



モンキアゲハ

Papilio helenus

クロアゲハと並ぶ大型のアゲハチョウである。

後翅表面の大きな白い紋が目立つ。その紋は、生時は白いが死んで標本になると黄色くなる。カラスアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハなどと様々な花に集まり吸密する。また、水たまりなどで吸水する場面もよく目にする。

食草はカラスザンショウや柑橘類で、風土記の丘にはどちらも多く生息している。

ナガサキアゲハ

Papilio memnon

名前から推測されるように南方系のチョウであるが、最近では分布域が北上している。全体が黒いも

のから、白斑が目立つもの、中にはかなり白化した個体も見られ、変化に富む。食草は広く柑橘類で、モンキアゲと共にここではもっとも普通に見られるアゲハチョウである。アゲハ類によく見られる尾状突起がないので、他種とは容易に区別できる。



ジャコウアゲハ

Byasa alcinous

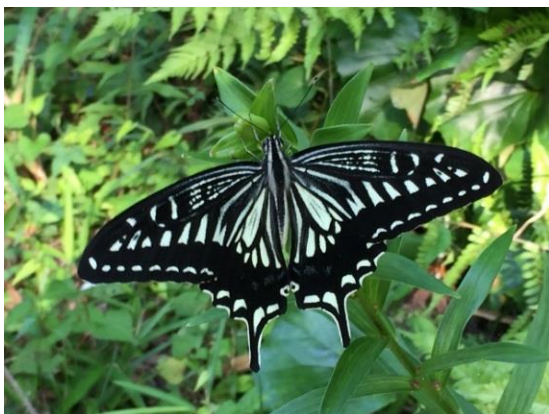
前出のアゲハ類と同じくらい大きなアゲハチョウである。雌雄の違いが明瞭で、雌は全体に色が薄いのに対して雄は黒い色をしている。腹は黒と赤の斑模様があり、毒々しい印象を受ける。

食草はウマノスズクサというつる草に限定される。この植物はここでは観察例が少ないが、初夏に咲くツツジの花に集まっているのがよく観察される。

ナミアゲハ

Papilio xuthus

もっともよく知られたアゲハチョウでありアゲハとも呼ばれる。前翅、後翅ともに黒と黄色の複雑な模様彩られる。季節によって色合いや模様の違いがある。



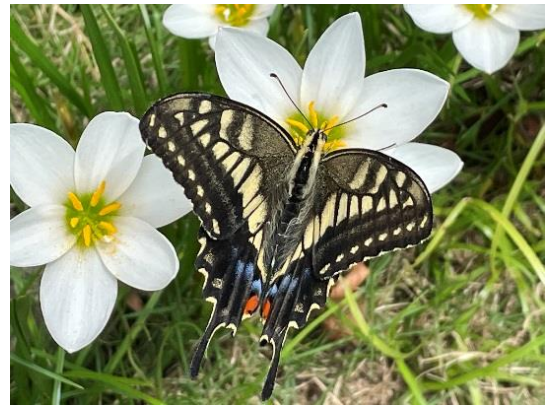
食草は広く柑橘類で、かつてはカラタチの生け垣で幼虫がよく見られた。

キアゲハ

Papilio machaon

ナミアゲハに似るが、全体に黄色っぽい。前翅表面の付け根あたりには筋模様がないことなどで区別は難しくない。明るい丘のようなところで占有行動をすることがあり、ここでは墳丘に咲くノアザミなどでその行動がよく見られる。

食草はパセリニンジンなどのセリ科植物で、独特である。



アオスジアゲハ

Graphium sarpedon

これまで挙げた他のアゲハ類とは全く違う体型をしたアゲハチョウであり、尾状突起もない。前翅後翅を通して青緑色の帯が縦に走り、他種と間違えることはない。飛び方も素早く吸水時以外はせわしなく飛び回っている印象を受ける。

食草はクスノキで、特に新葉の部分を好むようで、細い枝先に数匹が集まっていることもよくある。



村上海賊見聞録

富加見 泰彦

はじめに

海の生業については古今東西なんでも興味がある。「歩けおろ爺 (archaeology)」を自負する私の基本姿勢である。

昨今はコロナ禍で外出もままならず不本意な日々を過ごしてきた。最近ようやく収まりを見せたかと思いきや新たなオミクロン株の出現である。人生の大半を経過した人間にとって一日は貴重である。スーパーマーケットの陽だまりで屯するスーパーマンの仲間入りをする気は毛頭ない。

昨年3月後半、自分なりの万全対策を講じ芸予諸島へ出かけることとした。今思えば第3波と第4波の谷間であったようだ。人との接触をできるだけ避けるため公共交通機関を利用せず、前日に車検を受けたばかりの愛車で片道 350km、因島まで駆け抜けた。いつもの弾丸・徘徊の旅ではあるが観光とは程遠い緊張感の漂う旅であった。

天気予報では好転とのことではあったがとにかく決行することにした。天気が悪いと人出も少ないとの読みと、これまでも幾度となく最悪の天気予報であっても晴れることが多かったので根拠のない自信のもと出かけることとした。よほど悪運が強いのかほとんど雨に出会うことなく目的を達することができたのである。感謝。



能島遠望（後方の橋はしまなみ海道）

さて、今回の旅の目的はもちろん宣教師ルイス・フロイスをして「日本最大の海賊」と言わしめた能島村上氏の居城である能島城の見学と発掘調査の出土品から海賊衆の実像をこの眼で確かめたいと思いつからであった。若いころ、根来寺坊院跡を調査した経験もあり、多少興味もあったからである。中・近世の考古学、文献史学は門外漢であること、紀要としての性格を考えると躊躇いあるものの関連資料を参考にしつつ探訪記を書くことにした。

村上水軍（海賊）について

村上水軍とはいかなるものか、そのことに触れることにしたい。西日本各地で9世紀頃から海賊たちが跳梁するようになる。その多くは、厳しい年貢の取り立てを逃れた浮浪農民や、土地などの生産手段を保障されない海民たちであった。国家の手が届かない瀬戸内の海辺や島嶼に住み着き、飢饉になればたちまち食料を求めて目の前を航行する船を襲った。海賊行為そのものである。国家は度々地方に海賊の追討を命じるものの彼らの多くは小舟を住処とする移動性の強い海上生活者であり、その成果は一向に上らず捉えがたい存在であった。

藤原純友のような統率者が現れ、海賊衆や国家に不満を抱く地方の官人を組織化するとたちまちに巨大な勢力となって国家の存立を脅かすこととなった。南北朝、室町時代には各地の津々浦々や島嶼で海賊が横行し、彼らは縄張りを通過する舟から通行税を取ることから「関立」と呼ばれていたといわれる。

村上氏は古くから人・船が行き交う瀬戸内海で活躍した一族である。14・15世紀に頭角をあらわし警固・水運・交易に携わりながら、小さな海賊たちの中心となって次第に勢力を伸ばしていく。俗に三島村上と呼ばれ、能島、来島、因島の三家からなり強い同族意識を持ち、やがて芸予諸島全域を掌握する一大勢力へと成

長していったのである。

それを可能としたのは、三家がそれぞれの海域を棲み分け、因島村上は本州側の航路、能島村上は中央の最短航路、来島村上は四国側の航路をそれぞれ縄張りとしたからであった。海域を要衝とすることで海の戦いに備えるだけでなく、海の関所として瀬戸内海の東西交通を支配したのであった。宣教師フロイスの船から航海の安全を求められた村上海賊は、「怪しい舟に出会った時に見せるがよい」と「上」の紋章が入った絹の旗と署名を渡したと伝えられる。後に「過所船旗」と呼ばれる通行許可証である。この旗と水先案内によって他の海賊や航路の難所から船を守り、対価として通行料を徴収した。瀬戸内海を通行する船は、大名でも商人でも、そのおきてに従うことによって、安全に航海することが約束されたのである。

海の安全保障者としての名声を得た村上海賊は、いくつもの顔を持っている。島々を物流の基地として、国内外を産地とする高級な陶磁器などの流通に携わる商人の顔、名だたる大名も顔負けの優雅さで香や茶、連花をたしなむ文化人の顔、瀬戸内海で獲れる新鮮な魚介類を扱う漁撈従事者でもあった。

では、水軍ではなく、なぜ「海賊」と呼ぶのか？少しこのことに触れることにしよう。「海賊」というと西洋の「バイキング」「パイレーツ」といった理不尽に金品を奪う極悪非道の集団をイメージする。しかし、日本の海賊はそれらとは異なり独自のおきてに従い、海の安全を保障する存在であった。「水軍」と呼ばれるようになったのは江戸時代からで、それ以前は「海賊」と言われているからである。戦国大名などの水軍は、船を警固したりするため「警固衆」とも呼ばれている。海賊はいつも戦っているのではなく、様々な顔があり、平時には様々な活動をしている。ボディガード、水先案内人、水軍、商人、漁師、そして教養のある文化人でもある。

村上海賊の本拠地である芸予諸島は大小さまざまな島々が密集する現在でも海の難所である。一見穏やかに見えるが狭い海峡は、潮の干満によって激しい潮流が襲い掛かってくる。古来より船乗りを悩ませてきた海の難所で、この地で語り継がれた漁師の

言葉「舟に乗るより潮に乗れ」はこのことを雄弁に語っている。

村上海賊が歴史上に登場するのは南北朝時代である。船を警固する小集団からやがて芸予諸島の全域を掌握する一大勢力へと成長したのである。海に生き、潮を読み、複雑な地形を知り尽くした村上海賊の力が必要とされる時代がやってきたのである。戦国時代になると村上氏はその海の強力な武力を背景に瀬戸内海の広い海域を支配して国内の軍事、政治、海運の動向を左右し、来島城を本拠とする来島村上は守護大名河野氏と結びつき因島村上は大内氏、後に毛利氏の有力な水軍となった。能島城を本拠とする能島村上は独立性が高く村上武吉はどの大名にも従わず独自の姿勢を貫き通している。

能島村上氏が全盛を誇ったのは村上武吉が当主の時、天文初年 宗家の吉益と戦いか得を奪い取り能島村上の頭領となった（能島騒動）。現在の宮窪に本拠を構えて能島と号し、中・西部瀬戸内海に監視・連絡網を設け、要所々に城砦を構え、堺から坊津までの制海権を掌握したとされる。

能島城跡散策

能島城見学のための船の出航まで十分な時間があったので宮窪港に隣接する今治市村上海賊ミュージアムを見学することとした。ミュージアムには能島村上氏に関する民俗資料、考古資料などが数多く展示されている。

展示された資料を観ていくと、先述のボディガード、水先案内人、水軍、商人、漁師、そして教養の



今治市村上海賊ミュージアム



ある文化人であったことが良く理解できる。要職に就くとなぜかにわか文化人となる人をこれまでも何人かみてきたがどうやら村上氏は別人種のようにだ。

予定の時刻となったので宮窪港からクルーズ船に乗って念願の能島に出かけることとなった。出港時間によって観潮船と能島上陸できるクルーズ船の2タイプがあり、事前に調べ予約をしていたので混乱することなく島に上陸することができた。満潮の時間帯であったため急流を体験することが叶わなかつ

たのは残念である。私は、極度の高所恐怖症で、遊園地の観覧車はもちろん谷瀬のつり橋、祖谷のかずら橋、宮崎県の綾のつり橋などとてもない。料金まで支払って恐怖を味わうのはまっぴらごめんと常日頃から思っている。

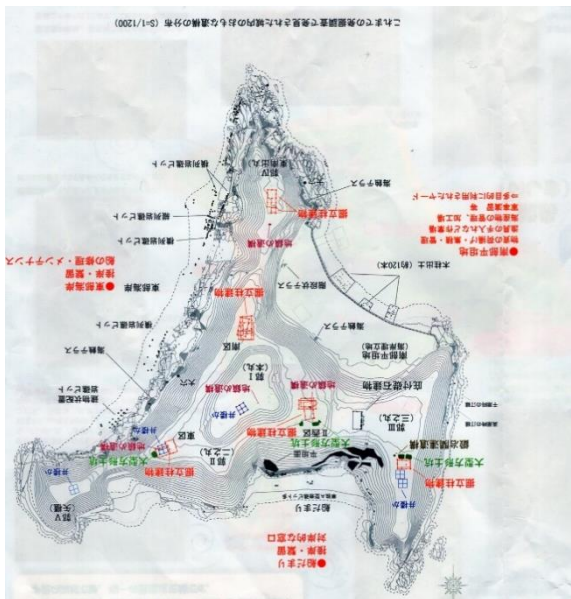
能島への緊張のボリテージは次第に増していった。やがて能島に到着、下船し、船着き場からは能島城の曲輪を見るために手すりもない崖っぷちを上がったり、下ったりし曲輪へ。島を一周する路程は私にとっては恐怖の連続ではあったが見たい気持ちが強かったので何とかクリアすることができた。

聞くとところによると春は桜の名所であるらしく、地元人が宴を催す格好の場所となり賑わうらしく、多くのサクラの木が植えられている。よくぞ滑落する人が出ないものと感心。アルコールが入れば恐怖心が薄れるかもしれないが私にはその勇気は持ち合わせていないし余裕もない。なんとか無事に船に戻ることができほっとした。



能島村上の居城能島

能島城は近年発掘調査がおこなわれ、その実態が明らかになっている。入手した資料を基に遺構のことに触れておこう。城跡は小さな島全体を城とする天然の要害である。島の中央部の最高所には本丸、一段下がったところに二の丸がある。南部平坦地から島に上陸したがその上方手には東南出丸が築かれ、瀬戸を挟んでその先の鯛崎島には鯛崎出丸が築かれている。本丸から南に下った位置には三の丸があり、住居か倉庫とみられる建物が見つまっている。大型の礎石建物で重要な役割を果たした施設であろうが性格はわかっていないようだ。鍛冶屋の痕跡もあり、鋳などの小さい鉄製品が多く出土することから製作、修理は島内で行っていたようだ。本丸は船折瀬戸を望むように小規模な掘立柱建物がある。二の丸、三の丸、矢櫃と呼ばれる場所にも同様の遺構が発見されている。まさに地産地消である。



本丸では素焼きの皿の破片が1万点以上出土しているらしい。儀礼や宴会の場所であったと推定されている。想像をたくましくすると日夜戦勝を祈願しての鯛や鯉の舞い踊りの酒宴が開かれていたのかもしれない。左手の内湾には船溜まりがあり、岩礁ピットと呼ばれる船を係留するため岩盤を彫り抜いた柱穴と犬走のようなテラスが存在する。矢櫃と呼ばれる櫓では弓の稽古場や武器庫があったと伝えられる。東部海岸には最大級の岩礁ピットと岩礁を掘りくぼめた建物跡も存在する。島全体が堅固な要塞であったことが容易に推察されるのである。2時間ほど島をめぐり、宮窪港へ戻ることとなる。

私の旅は回数をこなすことに重きを置いているので、なれば当然素泊まりが多い。定番の宴会料理ではなく「地もっち」の店を食べ歩くのを楽しみにしている。今回はコロナ禍でもあるので食料・飲料を買い求め一切出歩かないことにした。翌日はかねてから見学したいと願っていた今治市大三島の大山祇神社を訪ねることとした。

3年前に弓削島で海洋考古学会の研究会があり、見学をと考えていたが交通の便を考えるととても回り切れないと判断し取りやめていた。今回は車で旅なので有効に動き回ることができた。宝物館は全国の国宝・重要文化財の指定を受けた武具類の8割が展示され、甲冑の保有は全国一で、日本最古と言われる平安中期の河野通信が奉納した鎧、源義経奉納の鎧、鎌倉～戦国時代の名だたる武将が奉納した名品が展示され目の保養をさせていただいた。

続いて訪れた因島水軍城では思わぬ資料を手にとることとなった。それは「日本遺産村上海賊公式お守パンフレット」である。表紙には能島村上氏の過所旗が掲載されていた。過所旗は前にも触れたように村上武吉が上関、厳島、塩飽、などの札浦で、瀬戸内を航行する船舶から帆別銭、駄別銭、などの関税を徴収し、「丸に上」の字の過所旗を与え、その無害通航を保障したのである。武吉の「過所旗」は当時、大量に発行されたようで実物が今日まで伝えられているのはほとんどなく、厳島神社の神官に宛てられた山口県事例が知られるのみであった。驚いたことに過所旗には意外な内容が記されていたのである。



因島水軍城と館内の展示品

紀州雑賀ノ内向井弾右衛門尉とのへ

上

天正九年三月廿八日 武吉（花押）

この向井家とあるのはいかなる家か、ひょっとして和歌山市加太の向井家なのか。気になったので調べてみることにした。やはり、和歌山市加太の旧家向井家のことで鎌倉時代以降賀太荘現地荘官である刀禰公文職を歴代相伝し、聖護院配下の伽陀寺別当を受け継いできた家柄である。

葛城修験の葛城二十八宿の「一之宿」となっていた伽陀寺が別当職を廃止した後は向井氏が伽陀寺の経営に深く関与していたことが永正8年（1511）から天文17年（1548）の「葛城入峯先達注文」でも知られる。向井姓も一宿の「迎え坊」に由来するともいわれている。

向井氏は、室町・戦国時代の賀陀荘において年貢や公事の徴収実務にあたっていることは「向井家文書」に年貢納帳、公事納帳が多数残されていることから知られるところである。刀禰として海を掌り、公文として村を掌り、また「迎え坊」として修験（山と島）を掌握する特異な村落領主であった。

前述の「過所旗」には雑賀ノ内とあるので天正9年（1581）には雑賀荘に属していたことがわかる。村上海賊は天正4年（1576）に石山本願寺を支援する毛利軍の水軍の主力として織田信長の水軍を木津川の戦いで撃破するこの戦いに雑賀衆として共同戦線組んでいることから、向井家はこの「過所旗」を容易に手にすることができたのであろう。そのことによって、瀬戸内海を自由に通行できる権利を得たと考えられるのである。刀禰公文である向井氏は唯一「との」と呼ばれていたらしいが、過所旗には「向井壇右衛門尉とのへ」の表記があり、本来「殿」であるところを「との」とするのはいささか無礼な表現であることを岩倉哲夫氏からお教えいただいた。「海の戦国大名村上氏」と雑賀衆向井氏との格の違いを見せつけているのであろうか。思わぬところで私の知らなかった向井家の一端を垣間見ることとなったのである。

紀伊湊と賀陀について

紀伊湊は紀の川河口付近にあったとされるが場所については定かではない。日下正義氏論文に詳しいので詳細は省くが紀の川は、船所付近から平井方面

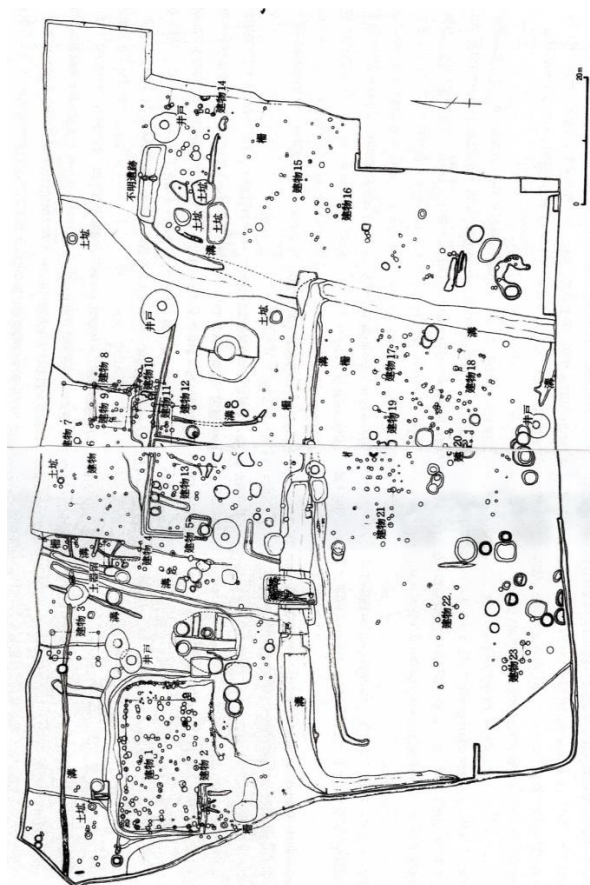
に大きく弧を描き土入川を経て宇治付近でもう一度弧を描いて和歌川から和歌浦湾に注いでいたといわれる。『平家物語』巻10の「玉津嶋の明神、日前宮・国懸の御前を過ぎて、紀伊の湊にこそつき給う」からはかなり遡ったところに紀伊湊が存在したと考えられている。

『和歌山市史』では、船所、梶取、市小路などの地名から港湾ないし付属施設として、市小路付近に紀伊湊があった可能性を示唆している。賀陀は自然堤防と和泉山脈と堤川に挟まれた低地はかつて低地であり入り江は外洋の風雨を避けるための絶好の泊りであった。『続日本紀』大宝2年(702)春正月「始置 紀伊国賀陀駅家」とあるように古代から南海道の淡路への重要な渡海港であった。浜堤背後のかつては入り江か沼地であったとみられる小字「出口」、「泊り谷」の地名が残り、船溜まりであった可能性は高いと思われる。

紀淡海峡に浮かぶ沖ノ島と地の島の間海域は最良の漁場であり、イカ場と呼ばれる特定の地域から中国製陶磁器が漁網にかかることがあり、深日の宝樹寺、加太の淡島神社には加太沖から水揚げされた「海上がりの青磁」として多数伝えられている。かつてNHKが潜水夫による海底調査を実施したところ、この狭い海峡に何層にも積み重なった多数の沈没船が見つかったという。加太は古代から南海道の重要な港であることを考えても難所の紀淡海峡を通過して最初に寄港するのが加太港であっても何ら不思議はないと考えられる。かつての南海道の加太駅であることもそのことを裏付けよう。

和泉山脈南麓に位置する西庄地区遺跡は注目する遺跡で、昭和51年～53年にかけて発掘調査が行われた。中世の遺構は、東西に走る大溝の北側(A区画)南側(B区画)、南北に走る大溝の東側(C区画)の各区画内には掘立柱建物跡、井戸、柵、溝、土壇などがある。A区画の西半分には東西25m、南北15mの石組基壇を持つ主屋の掘立柱建物跡1が存在する。東西溝によって画された南側には2×3間程度の建物と1×2間の建物が複数等見つかっている(全体図参照)。

木本八幡宮の文書に嘉慶2年(1388)木本西庄地頭



西庄遺跡屋敷跡

職平氏盛田地寄進状、永享9年(1437)杉原彦左衛門尉田地寄進状がみられることから荘園に関わる在地豪族の屋敷跡と推定されている。

中世・近世の遺物は多岐にわたり瀬戸内海を経由して持ち込まれたと考えられる遺物は、中国製陶磁器の青磁、白磁、染付、備前焼の摺鉢、甕、壺が出土している。近世では唐津焼の皿、椀、水差し、片口鉢、深鉢、瓶、燈明皿、小型高杯、伊万里焼(白磁鉢、染付鉢、染付椀、染付皿、青磁水差し、青磁花瓶などが出土している。

自然堤防に位置する西庄遺跡の地元有力層とみられる屋敷跡からは九州系の唐津焼、同遺跡の屋敷墓とみられる遺構からは中国製白磁椀、青磁椀が複数出土している。根来寺ではご存じのように前焼の大甕が数多く出土している。紀の川北岸ルートを使つての賀陀港からの交易品であることは言を俟たないであろう。

紀伊湊が紀の川をさかのぼった地点に存在したとすれば、瀬戸内を航海してきた船が紀伊湊に入港す

るには紀淡海峡から和歌浦湾に入りさらに紀ノ川を遡ることになるので、まず紀淡海峡を臨む賀陀港に寄港することは甚だ無理な解釈ではないと考える。紀伊湊については国衙の管理する湊、賀陀港は向井家の管理下にあった津であったのかもしれない。

因島水軍城を見学した際、因島歴史資料館が隣接されていたので見学したら思いもよらない人物がこの地の出身であることが分かった。小学生のころ「あゆの話」（岩波新書 1960）を偶然読み、「棲み分け」の話が非常に印象的で記憶に残った本で、著者は宮地伝三郎である。

宮地伝三郎は、主に、湖沼、河川など淡水に棲息する水生動物の生物相から底生生物の研究、生物指標を用いて湖沼型の分類を行った人物で、京都大学名誉教授でモンキーセンターの設立にも深く関わった人物でもある。宮地の「棲み分け論」の根底には村上三家の住みわけがあったのではと勝手に想像してみた。水軍城の山麓の金連寺（因島中庄町）に境内には宮地姓の墓標がいくつかあり、この地の出身であったことを裏付けている。先のことに気を取られ実は重大なミスを犯してしまった。金連寺は因島村上氏の菩提寺であることに気づかなかったのだ。その境内には因島村上氏の墓石群が残され、因島村上氏の奥津城であることを見落としていた。気づいたのは帰宅してから関連する資料を読み耽っていたときであった。痛恨の極みである。

コロナが終息したら再度訪れることになるであろう。訪れるたびにまた新しい発見があることに期待しつつ。



妙見山古墳からの眺望

水軍城見学後は、来島海峡大橋を越え、大西藤山歴史資料館を訪れた。今治市大西町の藤山健康文化公園の丘の上に四国最大の前方後円墳国史跡の「妙見山古墳」を見学することにした。

全長 80m の堂々とした古墳である。斎灘を見おろす丘陵上にあり海を強く意識した古墳であることが一見して理解することができる。歴史資料館を拝見すると、これまでの妙見山古墳尾調査、研究から第1展示室では二つの竪穴式石槨を原寸大で復元したジオラマと副葬品が展示されている。第2展示室では全国でも妙見山古墳でしか出土していない伊予型特殊器台を展示、古墳における王位継承の「まつり」を解説している。コンパクトな資料館ではあるが見ごたえのある展示である。

古墳見学後は、野間馬を見るため移動。「野間馬」は「トカラ馬」「宮古馬」「与那国馬」などと並ぶ在来馬で日本最小の馬である。その歴史は江戸時代にさかのぼり瀬戸内海の馬島での合戦にあたり、馬を松山領の野間郷で育ててもらうことにし体高が4尺以上は買い取り、それ以下は農家に無償で払い下げたのが始まりと言われる。

農家では体高の低い馬どうしをかけあわせることによって今のような野間馬ができたと考えられている。明治時代には軍馬を育てるために小さい馬の飼育は禁止となり、昭和に入ると農業機械や、車が普及、やがて馬の数が次第に減少し30年代には今治市では1頭もいなくなり、全国でも6頭になったらしい。幸いそのうちの4頭を育てていたのが松山市の長岡悟さんで、昭和53年に貴重な4頭を故郷の今治



野間馬ハイランド（今治市）

市に寄付したそうである。

今治市では「野間馬保存会」を設立し、ふるさとの宝として地域の人たちが大切に育て増やしてきた。絶滅寸前であった野間馬は現在 60 頭余りが今治市「野間馬ハイランド」で飼育されている。乗馬体験できるファミリーパークとして人気が高いようだ。乗馬体験は体重 25kg 以下の条件があるので私が騎乗するには命に係わる減量が必要であることは言うまでもない。孫の世代に譲りたいと思う。

昭和 60 年には 8 番目の日本在来馬に認められ、その後今治市の天然記念物に指定されている。飼育されている中に白馬が何頭か見受けられたので飼育員に尋ねたら齢を重ねると白くなるとの話だったので、思わず人間と一緒にだとなつて自分の頭に手をやってしまった。

この野間馬ハイランドで今回の旅は、目的を達したので、築城の名手と言われた藤堂高虎が築城した今治城を見学することにした。予定のフェリーの出航を考えると外観だけの見学となってしまったのはいささか断念である。その後、東予港へとひた走り、22:00 時出航のオレンジフェリーで帰路に就いたのである。ほとんど貸し切りに近い状態であった。

翌日 6 時前には大阪南港に接岸し、7:00 過ぎには帰宅、何事もなかったようにいつものコーヒーを飲み、次はどこに行こうかと計画を妄想しつつ、しまなみ海道の旅は幕を閉じたのである。

探訪記を書き終えて

記憶と感動が鮮明なうちにと一気に書き上げたのが本記である。帰宅後は引き籠って文献を検索しながら事実誤認、誤用などを訂正しながら現在に至っている。

岩倉哲夫氏・大岡康之氏には解説不明な個所を読んでもいただいた。「過所旗」の内容がそれである。その後、岩倉氏から『荘園の世界』下巻 2002 のコラムで高橋修氏によってすでに「新出の村上武吉過所旗と雑賀衆」として紹介されていることをご教示いただいた。高橋論文では向井強右衛門尉と読むが本稿では岩倉・大岡氏に従い弾右衛門尉とした。

たまたま、4 月 10 日に春の葛城入峯の折り、紀州

加太浦「採燈護摩」が行われることを知った。修験道が「迎え坊」に来るときは提灯を吊るし、幟を立てるのですぐにはわかるのと地元民の有力情報を得たので 4 月 9 日に早速出かけることとした。情報通り玄関には提灯、幟、幕が張られ、修験者を迎えるべく慌ただしく人が動く姿を垣間見ることができた。地元住人しか知りえない貴重な情報であった。

少し修験道、向井家に興味が湧いてきた。「歩けおる爺」の興味は当分尽きることはなさそうだ。

【参考・引用文献】

「日本最大の海賊の本拠地本拠地―芸予諸島―よみがえる村上海賊の記憶」

『瀬戸内の海人文化』 海と列島文化第 9 巻 1991

「よみがえる村上海賊の記憶」パンフレット 今治市村上海賊ミュージアム

「国指定史跡 能島城跡散策マップ」

「よみがえる村上海賊の記憶因島水軍城」パンフレット

「尾道市因島資料館」パンフレット

「中世の和歌山」『和歌山市史』第 1 巻 1991

(2022 年, 1 月吉日脱稿)